

表紙, 目次, 雑纂, 抄録, 通信, 雑報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38386

明治四十四年八月二十五日發行

十全會雜誌

第六十七號

全澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌第六十七號目次

○原著及實驗

●硫酸銅ノ消毒力。

館保二氏

○雜纂

●「ホルモン」説。

石原誠氏

●代謝學ノ大勢。

竹中繁次郎氏

●脚氣懷舊談。

高木兼寛氏

●結核新治療法。

ハンキン氏

●「コカイン」及知覺脫失藥検査法。

高橋順太郎氏

●新藥「アエール」。

高安六郎氏

●學位請求論文ノ要旨。

○抄録

●一二濕疹療法。

笹岡芳名氏

●「サルブアルサン」ノ新証明法。

アベリン氏

●糖尿病患者ノ唾液反應。

ステフエン氏

●酒精單寧ノ手術局所消毒力。

ツアアルドウスキー氏

●再ビ米粉養兒ニ來ル病變。

岡本京太郎氏

●血液ノ防衛作用。

二本謙三氏

●尿中蛋白ノ各種証明法ノ比較。

佐多芳久氏

●新血液証明法。

井上善次郎氏

●血清學的免疫研究。

福原義柄氏

●細菌「リボイド」。

福原義柄氏

●糞便中ヨリ「チフス」菌分離法。
●特發性角膜脂肪變性。

辻寛治氏
高安右人氏

○通信

●鈴木寛之助氏。●淺野達也氏。●生沼曹六氏。●平原雲新氏。●加藤敏作氏。●岡忍氏。●在豊橋同窓會。

○内地雜報

●博士論文。●本年度の傳染病豫防費。●朝鮮東北の藥業狀態。

○醫校雜報

●官立醫專校の入學志願者。●藥學科志願者。

○校內雜報

●四十二年卒業生同窓會。●七五三、山田、伊藤三氏送別會。●歡迎及送別會。●韓、湯阿氏の招待會。●木村氏歡迎會。

○人事

●鈴木文太郎氏。●島田吉三郎氏。●辻岡律氏。●七五三龜吉氏。●中村重好氏。●森善次氏。●田中退三氏。●岡部千太郎氏。●寺田久十郎氏。●森田齋次氏。●山崎芳太郎氏。●日野信次氏。●若尾隆吉氏。●長井運男氏。●近森村重氏。●西村銀太郎氏。●竹中精一氏。●才田猶次。●堀孝信氏。●塚本政治氏。●田濱仙次郎氏。●山田有登氏。●茨木忠俊氏。●坪田義門氏。●田中精一氏。●福村深教氏。●本校出身陸軍々醫異動。

○會告

●校外特別會員會費領収報告。

「トラホーム」病毒ヲ媒介傳染スルモノナルヲ豫告スルモノナリ

然ラバ如何ニシテ此ノ杆ヲ殺菌セバ確實ニシテ且ツ保存上良好ナルベキヤ
一 硫磺銅ハ水ニ溶解シ易キモノナルヲ以テ水分ヲ有スル消毒藥ニ濕シ置
クキハ溶解シテ其ノ表面粗糙トナリ破損シ易ク又水分ヲ吸収スル方法ヲ以
テ消毒スルキハ硫磺銅結晶ノ結晶水ヲ吸収スル故ニ破損シ易シニ於テ余
ハ硫磺銅結晶カ如何程破損サル、ガチ二三ノ消毒藥ニ就テ試験セリ

消毒藥 浸シタル時間 試験前量 試験後量

エーテル 四時間 〇、九六五六 〇、九六三三

純アルコール 全 一、〇六八四 一、〇一三一

五〇％アルコール 全 一、三一〇八 一、二八三三

千倍昇赤水 四十分 一、六〇八八 〇、〇六三五

五％石炭酸水 全 〇、八六三三 〇、〇七二一

此ノ試験ニヨリ昇赤石炭酸ハ最モ早ク硫磺銅ヲ溶解シ且ツ表面ヲ粗糙ニシ
純「アルコール」ハ硫磺銅ノ結晶水ヲ取ル故ニ表面ハ白色ニナリ面粗糙ト
ナル五〇％アルコールハ比較的溶解セズ且ツ形ヲ損セズ且ツ五〇％アル
コホールハ消毒力ヲ有スルヲ以テ蓋シ良好ナルモノ、一ナラン而シテ「エ
ーテル」ハ其ノ形ヲ損セズ溶解セサル点ニ於テ最モ良好ナルモノ、如キモ
消毒作用ニ就テハ尙充分ノ研究ヲ要スルヲ以テ更ニ將來ノ實驗ニ俟タント
欲ス故ニ硫磺銅杆ヲ使用スル場合ニハ一患者毎ニ一個ト定メテ所置スルカ
或ハ硝子杆ノ尖端ニ脱脂綿ヲ堅ク巻キ之レニ一定ノ硫磺液ヲ附着セシメテ
結膜ヲ摩擦シ一回毎ニ硝子杆ヲ取換ヘルヲ良トス此ノ如クスルハ硫磺銅
トシテ化學的ニ充分ニ働キ得ルノミナラズ亦器械的ニモ遺憾ナリ働キ即チ
硫磺銅棒ト同作用ヲナシ、寒心スベキ病毒傳播ノ媒介ヲ防止スルノ幸ヲ得
ト信スルモノナリ

雜纂

「ホルモン」説

福岡醫科大學教授 醫學博士 石原 誠

體內ニアル種々ノ組織竝ニ臓器ガ其相互ノ間ニ密接ナル機能的關係ヲ有ス
ルコトハ、幾多ノ實驗的及臨牀的經驗ニ由リテ我等ノ既ニ知ル所ナリ、而
シテ其相互間ノ關係ハ當ニ神經系統ニヨリテ媒介セラル、ノミナラズ、亦
化學的方法ニ由リテ營マル、モノナラントハ、未ダ其事實的證明ナカリシ
頃ニモ、既ニ識者ノ相像セル所ナルガ、今ヲ去ル二十年前、佛國ノプラウ
ン、セカールガ膠丸浸出液ノ注射ヲ自己ニ試ミケル以來、所謂「内分泌」ノ
研鑽、大ニ起リ、幾多ノ曲折迂回ノ間ニ斯想像ハ益々事實的證明ヲ得タリ
プラウン、セカールハ既ニ體內ノ各臓器ガ血液内ニ排出スル物質ニハ遠キ
場所ニアル臓器ノ正常機能ニ必要ナルモノアルベキヲ認メヌ、近時獨國ノ
クレールハ臓器相互ノ化學的關係ノ障礙ヲ論スルニ當テ、尙一步ヲ進メテ
説クラク、組織竝ニ臓器間ノ化學的關係ハタゞ或組織ヨリ或一定物質ガ出
テ、他部ニ赴キ其機能ニ影響ヲ與フルニ基クトイフヨリモ、遙ニ「密接
ニシテ且ツ復雜ナルモノナルベク、凡テノ組織ヨリハ絶エズ諸物質ガ出テ
テ、他ノ凡テノ細胞ニ赴キ其細胞生活ニ關與スルモノト考フベキナリト、
氏ハ尙言ヲ續ケテ曰ク、斯ク考フレバ一臓器ノ異常ガ他部ニ種々雜多ノ變
化ヲ續發セシムルハ怪ムニ足ラザルト共ニ、一疾患者ノ症狀ノ發現ガ常ニ
一定スルコトナク、極メテ多様ナルコトナモ亦了解スルヲ得ン、又之ニヨ

レバ疾患部下目下何等ノ關係ナシトセラル。他部ノ組織ノ機能ヲ興奮又ハ變化セシムル事ガ、間接ナガラ尙能ク患部組織ノ活動ヲ來シ、爲メニ病因ノ除カレベキコトノ、アリ得ベキヲ知ラン、短刀直入、直接ニ病因ヲ去ラシ、アル間接的治療法ヲ捨ツベカラザルナリト、(獨逸臨牀醫學實函第八十八卷、千九百七年クレール論文)

クレールノ所説、甚ダ我等ノ意ヲ得タリトイヘドモ、具體的研究ハ未ダ然ク深ク化學的關係ニ侵入シテ、其機密ヲ窺フノ域ニ達セズ我等ハ今ハ尙アラウン、セカールノ言ノ事實的證明ヲ以テ満足セザルベカラザルナリ、我等ハ生殖腺、甲狀腺、副腎等、若干ノ臟器ガ化學的物質ヲ血液ノ途ニ由リテ、之ヲ他臟器ニ送り其機能又ハ發育ヲ影響スルコトヲ、唯少シク明ニスルヲ得タルニ過ギザルナリ

抑モ醫家ノ藥劑ヲ使用スルハ、之ニ由テ身體諸機能ニ影響ヲ與ヘントスルニ非ズヤ、然ラバ少數ナガラ、是等「内分泌」ノ事實ガ既ニ示スガ如ク、體內ニ於テ既ニ平常ニ形成セララル、諸化學的物質ガ諸臟器ノ機能發育ニ必要ナル作用ヲ及ボストイフコトハ、言フ迄モナク醫家ナシテ「内分泌」ノ研究ヲ等閑視スルヲ得ザラシムルナリ、斯研究ノ進歩ハ「内分泌」セラル、化學的物質ノ闡明ヲ來スベク、幾多ノ利器ハ醫家ノ前ニ供セラル、ニ至ラン、我等ハ既ニ「アドレナリン」ニ於テ其好例ヲ見タリ

余ハ茲ニ此「内分泌」論ヲ叙セントスルニ非ズ、唯其化學的物質ノ性狀ニ關スル最近ノ一假説ヲ略述セントスルノミ余ガ茲ニ便宜上「ホルモン」説ト名ツクルモノ是ナリ、假説ハ要スルニ假説ニ過ギズ然レドモ假説ニシテ盛ニ研究ヲ促シ、幾多新事實ヲ產出セシカ、タトヘ其假説ガ終ニ誤謬タルコト發見セラル、ニ至ルモ尙如斯假説ハ學界ニ有益ナルモノトセザルベカラズ

「ホルモン」説ハ英國ノスタアリング及ヒベイリス、Starling, Bayliss 二氏ノ

唱フル所ニカ、ル、「ランセツト」、千九百五年八月スタアリング講演、並ニアツシエル、スピロ發行「エルゲーブニス、テル、フィナチロギー」第五年、千九百六年、ベイリス及スタアリング論文、二氏以爲ク、一臟器ノ機能ガ他臟器ニ其影響ヲ及ボスニ當テ、斯反應ガ極メテ迅速ニシテ、秒時又ハ其ヨリ少キ時間ニアラハレ來ルモノナレバ、ソハ神經系統ノ媒介ニ由ルモノトスベキモ、反應ノ起ルコト比較的緩慢ニシテ、數分、數時、又ハ數日ヲ要スルモノハ、臟器間ノ化學的聯絡ニ由ルモノト見做スベク、即チ一ノ臟器ガ或物質ヲ血液ニ出シ、此物質ガ、イハバ使者トシテ他臟器ニ赴キ、其機能ヲ興奮シ又ハ其發育ヲ促スニ由ルモノト考フベキナリト、而シテ斯ノ如ク體內諸部分ノ間ニ血液ノ途ヲ取リテ、使者トシテ往來スル物質ヲ、スタアリングガ「ホルモン」Hormon トハ名ツケタルナリ、蓋シ希臘語ノ「喚起スル」トイフ字ヨリ作レル語ナリ

有名ナルエールリツヒハ身體又ハ其一部ニ作用ヲ及ボス凡テノ化學的物質ヲ二大別シヌ、其第一種ニハ所謂「トキシシン」ト名ツケラル、モノ之ニ屬シ、例ヘバ質布埤利亞毒、破傷風毒、「アアリン」、「リチン」蛇毒等ノ如シ、イツレモ之ヲ結晶セシムルヲ得ズ、共ニ蛋白質ニ類似セル性質ヲ有シ、「エンチーム」類ノ如ク極微量ニテ既ニ其毒作用ヲ起シ、且ツ體內ニ於テ特異「アンチトキシシン」ヲ作ルノ性アリ、而シテ其作用ハエールリツヒニヨレバ蛋白質ノ類化ニ於ケルト同シク、生活質分子ヨリ出テ居ル手(側鎖)ニ「トキシシン」分子ガ自己ノ手ヲ以テ懸着スルニ基ク、第二種ニハ我等ガ通常藥劑ト稱スルモノ之ニ屬ス、其作用ハ第一種ノゾレノ如カラズ、唯其化學物理的性質若シクハ分子の構造ニ由リテ生活質ニ働クモノトセラル、イツレモ比較的堅固ナル物質ニシテ、熱ニヨリテハ容易ク破壊セララズ又一般ニイヘバ結晶セシムルヲ得、之ヲ反復、生體ニ使用スレバ漸次其效力ヲ減ズルコトアルモ、決シテ彼ノ「アンチケルベル」ヲ形成スルコトナシサテ然ラバ「ホルモン」ハイツレノ部類ニ屬スベキ物質ナリヤ、二氏以爲ク、

體內ニ於テ「ホルモン」ハ反復若シクハ絶エズ形成セラレ、其特異作用ヲ現ハスヲ以テ、若シゾレガ第一種ニ屬スベキ物質ナランカ、ヤガテ之ニ對スル特異「アンチ、ケルベル」現ハレ來リ「ホルモン」ハ爲メニ中和セラレテ其作用ヲ起サズ、從ツテ其任務ヲ果スヲ得ザルニ至ルベキナリ、之ニヨレバ、既ニ理論上「ホルモン」ハ通常藥劑ノ屬スル第二種ノモノナリトセザルベカラズ、實際、通常藥劑ニ於テ我等ノ「ホルモン」ノ如ク唯一定ノ組織又ハ臟器ノミニ特異作用ヲ起スモノ少カラズ、例ヘバ「ピロカカルピン」ノ諸分泌腺ニ於ケル、「ヂキタリス」ノ心臟ニ於ケル、「ニコチン」ノ交感神經節内神經末端ニ於ケルガ如シ、而シテ今少數ナガラ明ニ分リ居ル「ホルモン」ヲ見ルニ、其性狀、能ク此推定ニ一致ス、故ニ此推定ヲ未知ノ「ホルモン」ニモ推シヒロゲテ、「ホルモン」ハ凡テ比較的簡單ナル性質ヲ有シ、之ヲ組織ヨリ分離精製スルヲ得ルノミナラズ、既ニ「アドレナリン」ニ於テ之ヲ見ルガ如ク、亦人工的合成ニヨリテ製出スルヲ得ベキモノナルベク、而シテ其作用ハ「トキシシン」又ハ榮養物質ノ如ク複雑ナラズ、通常藥劑例ヘバ「ピロカルピン」、「ニコチン」、「ヂキタリス」等ノ如キモノト同様ナルモノト者フベキナリト、二氏尙言ヘラク、若シ果シテ然リトセバ、生體ガ各部相互ノ關係ヲ化學的ニ調節スルハ、恰モ醫家ガ疾患ニ藥劑ヲ與フルト同一ノ方法ニ由ルトノ面白キ現象ヲ見ルニ非ズヤト

三

我等ハ其最簡單ニシテ其作用最明ナルモノヲ、呼吸ノ調節ニ於テ之ヲ見ルナリ、我等ハ血液内ノ炭酸量ガ或原因、例ヘバ筋肉運動ニヨリテ増加スレバ、呼吸運動ハ直ニ深ク且ツ速ニナルヲ知ル、是レ血液内増量セル炭酸ガ呼吸中樞ヲ興奮スルニ由ル、凡テ生活質ノ興奮ハ其酸素ノ需要、竝ニ炭酸形成ノ増強ヲ伴フモノニシテ、今茲ニ筋肉運動起ルトセン乎、其筋肉ヨリ

血液内ニ送り出サル、炭酸ノ量ハ、固ヨリ靜止時ニ於ケルヨリモ遙ニ多カルベキナリ、斯クシテ炭酸量ノ多クナリタル血液ガ、延髓ニ於ケル呼吸中樞ニ赴キ、其興奮ヲ來スヲ以テ、爲ニ呼吸運動ハ早ク且ツ強クナルサスレバ肺内瓦斯交換ハ平常時ヨリハ、ヨリ盛ニナリ、血液ハ獨リ炭酸ヲ排出スルノミナラズ、亦多量ノ酸素ヲ此處ニテ取り入レ、以テ筋肉ニ於ケル酸素需要ノ急ニ應ズルヲ得ルナリ、サテ此場合ニ於テ炭酸ノ發生スルハ筋肉ニシテ、其働クハ呼吸中樞ニアレバ、炭酸ハ筋肉ヨリ呼吸中樞ニ向フテ派出セラレタル化學的使者トスベキモノ、即チ「ホルモン」ナリ

筋肉運動過度ニシテ、酸素ノ供給尙不十分ナレバ、筋肉ヨリハ酸性代謝産物、例ヘバ乳酸ノ如キモノ派出セラレ、血液ニ由リテ延髓ニ達シ、呼吸中樞ヲ益強ク興奮セシメ、其ノ活動ヲ増サシムルニ至ル、然ラバ此酸性代謝産物モ亦「ホルモン」ナリ

是等ノ物質ノ外、我等カ確ニ捕ヘ得タルモノハ、唯副腎ヨリノ「ホルモン」タル「アドレナリン」アルノミ副腎ノ身體ニ重大ナル化學的關係アルハアザソン氏病既ニ之ヲ示ストイヘドモ、其關係ノ細微ニ至リテハ未ダ明ナラズ、然レドモ副腎髓質ノ浸出液内ニハ「アドレナリン」含有セラレ、又此物質ガ實際、體內ニ於テ絶エズ副腎ヨリ血液内ニ派出セラレツ、アルコトヲ證明セラレタルノミナラズ、醫家ハ既述ノ如ク既ニ「アドレナリン」其物ヲ使用シツ、アルナリ、「アドレナリン」ノ作用ハ交感神經ノ刺激ト同結果ヲ來シ、交感神經ヲ有セザル組織ニハ亦其作用ヲ起サズ、例ヘバ血管ハ爲ニ收縮シ、瞳孔ハ廣大スルモ、氣管枝筋ニハ何等ノ變化ナキガ如シ、故ニ「アドレナリン」ハ交感神經末端ヲ興奮スル作用アルモノト考ヘラル、今動物ヨリ副腎ヲ抽出スレバ、血壓ノ著シキ沈降ヲ起シ、遂ニ死ヲ來スガ、其際、交感神經ノ刺激ハ血壓ノ増強ノミナラズ何等ノ結果ヲモ起サズ、ベイリス及スタアリング二氏ハ之ニ由リテ以爲ク、「アドレナリン」ノ存在ハ交感神經ノ反射的機能ニ必要ナル條件ナリト考ヘテ可ナリト

上述ノ炭酸及ビ乳酸ノ如キ有機酸類、竝ニ「アドレナリン」ハ、少數ニハア
レトモ、我等ノ明ニ捕ヘ得タル「ホルモン」ノ全部ナリ、然レドモ其他「ホ
ルモン」自己ハ未ダ分離精製スルヲ得ザレドモ、幾分カ其性狀ヲ窺ヒ得タ
リト思ハル、モノナキニ非ズ

此内先ヅ舉ゲベキハベイリス及スタアリング二氏ガ發見シ(千九百七年)、
腺分泌ニ對スル「ホルモン」ナリト考フル「セクレチン」Secretin ナリ、斯注
意スベキ發見ガ、實ニ二氏ノ「ホルモン」說ノ出發點ナルノミナラズ、亦、
腺分泌機能ノ智識ニ一新方面ヲ拓ケルモノナルヲ以テ、茲ニ少シク其發見
ノ次第ヲ述ブルヲ得ン歟

抑モ腺分泌ハ既ニ久シク學者ノ注意ヲ惹ケル所ニシテ、胃ヨリ酸性内容ガ
腸ニ入レバ腺ニ盛ナル分泌起ルハ、諸家皆之ヲ神經性反射ニ由ルトセリ、
然ルニ上記二氏ハ小腸ノ一部分ヲ取り、之ト他ノ身體部分トノ間ノ凡テノ
神經的聯絡ヲ切斷シタル後、其腸部ニ酸ヲ入ルレバ正常狀態ニ於ケルト同
シク、盛ニ腺分泌ノ起ルヲ見、又凡テ神經的ニ起ル分泌ハ「アトロピン」ニ
由リテ制止セラルモノナルレドモ、此場合ニハ「アトロピン」ヲ與フルモ何等
ノ效ナキヲ實驗セリ、茲ニ於テ二氏以爲ク、斯分泌ハ神經性反射ニ基ケモ
ノトハ考ヘラレズ、腺細胞ガ直接ニ化學的刺戟ヲ受クルニ由ルナラン歟、
斯實驗ニ於テ使用セル腸部ト腺トノ間ニハ神經的聯絡コソナケレ、血液ノ
途ハ依然トシテ存在スルナレバ、腸部ヨリ何カ或物質ガ此途ヲ通りテ、腺
ニ赴キテ分泌作用ヲ喚起セルニ非ル乎、而シテ酸自己ヲ門靜脈内ニ注射ス
ルモ、腺ニハ何等ノ作用ナキ事實ヲ見レバ、其或物質ハ小腸粘膜内ニ酸ノ
作用ニ生ゼザルモノナルベシト、依テ二氏ハ此推論的或物質ヲ捕ヘント試
ミス、之ニハ先ヅ十二指腸又ハ他ノ小腸上部ノ粘膜ヲ剝キ取り、之ニ〇、四
%鹽酸ヲ加ヘ、砂ト共ニ磨碎シタル後、之ヲ煮沸セシメ、亞爾加里ヲ以テ
中性ニ直シテ後、濾過スレバ透明ナル液ヲ得(甲)之ニアリテハ蛋白質ハ既
ニ悉ク沈澱シ去レルモノト見ルベキモ、尙膠質竝ニ蛋白質ノ痕跡ハ、此液

ニ亞爾個保兒及ビ依的兒ヲ加フレバ沈澱スベク、而シテ此亞爾個保兒依的
兒溶液ヨリ亞爾個保兒及依的兒ヲ驅逐シテ得ル殘渣ヲ、水ニテ浸出スレバ、
茲ニ亦透明ナル液ヲ得(乙)、二氏ハ動物ニテ靜脈ニ此甲乙二液ノ少量ヲ注
射セルニ、イヅレモ常ニ盛ナル腺分泌ヲ來スチ見タリ、次ニ腸ノ各部ヨリ
斯ノ如キ酸浸出液ヲ製シ、其腺ニ及ボス作用ヲ比セルニ、十二指腸ノモノ
最強ク、小腸中部ノモノ之ニ次キ、廻腸下部、竝ニ大腸ノモノハ其效ナキ
ヲ見タリ、是レ實驗的ニ酸ヲ腸内ニ入ル、ニ當テ起ル腺分泌ハ、之ヲ十二
指腸ニ於テスル時ニ最盛ナルガ、注入部腸ノ下部ニ近ツクニ從ヒ其作用益
々弱ク廻腸ノ下部ニ於テハ最早分泌ヲ起シ來ラザル事實ニ能ク一致ス
然ラバ即チ此小腸粘膜ノ酸浸液内ニハ彼ノ推論的物質、即チ酸ニヨリテ粘
膜内ニ生ジ、腺ニ分泌ヲ促ス作用アル物質ガ含マル、モノト考フベク二氏
ハ之ニ「セクレチン」ノ名ヲ與ヘヌ、然レドモ此物質ハ未ダ之ヲ純粹ニ分離
スルヲ得ザルナリ

此ニ於テ二氏ハ說ヲ立テ、曰ク、酸性胃内容ガ十二指腸内ニ進入シ來レバ、
其酸ガ此處ノ粘膜ニ働キ爲シ「セクレチン」ヲ生ジ、之カ化學的使者トシテ
血管ヲ通りテ腺ニ赴キ、其細胞ノ機能ヲ喚起スルガ故ニ、茲ニ腺分泌ヲ見
ルナリ、此現象ハ神經的反射ニ對シテ化學的反射トコソ名ヅクベケレ、腺
液ハ亞爾加里性ナレバ、腹内容ノ酸性ガ之ニヨリテ中和セラル、マデハ、
「セクレチン」ノ形成竝ニ派出アルベシ内容、中性トナレバ其酸性タル間ハ
堅ク鎖サレタル幽門ハ直ニ開キテ、適量ノ酸性胃内容ヲ進入セシム、サス
レバ茲ニ再ビ「セクレチン」ノ派出トナリ、酸性反應ノ中和ニ要スル丈ノ腺
液更ニ分泌セラレ、斯ノ如クシテ小腸ニ於ケル糜爛ノ消化ハ、常ニ殆んど
中性ナル「メヂエーム」ニ於テ行ハル、ナリト
然ラバ如何ニシテ酸ニ由リテ「セクレチン」ガ形成セラレ、乎、二氏ハ以爲
ク小腸小部ノ上皮細胞ガ一種ノ物質ヲ有シ、之ガ酸ニヨリテ「ヒドロロ
ゼ」ヲ受ケ「セクレチン」トナルナラン、此物質ヲ「プロセクレチン」ト名ヅ

ケン、此物、モトヨリ未ダ純粹ニ製出スルヲ得ザレドモ、其全然不溶性ニシテ、又細胞ノ死ニヨリテ破壞セラレザルハ、之ヲ粘膜ヨリ溶出スルヲ得ズ、又煮タル粘膜、竝ニ度々亞爾保兒ニテ浸出セル後、乾燥セシメタル粘膜ニ酸ヲ働カスモ、「セクレチン」ヲ得ルコトニ由リテ之ヲ知ル

尙曰ク、或ル任意ノ有脊動物ノ腸ヨリ、斯クシテ作レル「セクレチン」ハ、之ヲ他ノ任意ノ種類ノ有脊動物ニ注射スルモ、常ニ腺分泌ヲ來スガ故ニ、「セクレチン」ハ「アドレナリン」ト同シク廣ク動物界ニ發生スル物質トナスベキナリト

次デエドキンス(千九百六年)ハ胃ニ於テ、幽門粘膜炎「デキストリン」、又「デキストローゼ」、「マルトローゼ」、若シクハ「ペプトン」ト共ニ磨碎シテ得タル浸出液ヲ、動物ニ注射スレバ、常ニ胃鹽酸並「ペプシン」ノ分泌ヲ起ストイヘドモ、「デキストリン」又ハ其他ノモノヲ注射スルモ、別ニ然ル作用ヲ起ス能ハズ、故ニエドキンスハ「セクレチン」ニ於ケルガ如ク、是等消化産物ノ爲メニ幽門細胞内ニ一種ノ物質ガ出來、之ガ分泌ヲ喚起セルモノナルベシト考ヘ、之ニ「ガストリン」ノ名ヲ與ヘヌ、斯物質モ亦「セクレチン」ノ如ク煮沸ニヨリテ破壞セラレズ

ペイリス及スタアリング二氏ハ其「セクレチン」説ヲオシヒロメテ、以爲ク、消化管内ニ於ケル諸分泌ニハ胃ニ於テハ神經的反射ハ此「ガストリン」ニ由ル化學的反射ト共ニ働クナランモ、ソレヨリ以下ノ部分ニ於テハ、イヅレモ化學的反射ニ由ルモノナルベシト

四

生殖腺ノ「内分泌」ノ研究ハ近時大ニ進ミス、スタアリングハ亦レイン、クレイボント共ニ、(千九百六年)家兔ニ於テ乳腺ノ發育ト妊娠トノ關係ヲ調査シテ、乳腺ハ受胎後速ニ肥大ナラシ、約十四日ニ至レバ、始メテ其中ニ小分泌胞ノ散在スルヲ見ルニ至リ、又始ノ内乳頭ヲ壓スレバ、唯無色

液ノ流出ヲ見ルノミナルガ、二十五日以後(家兔ノ妊娠期ハ三十日ナリ)ニナレバ、其液ハ潤滑シ、分娩前二三日ニハ全ク乳汁ノ性質ヲ得然レドモ、受胎後十五日以後ニ妊娠ヲ中止セシムレバ、直ニ乳分泌ノ起ルヲ見タリ、リツベルト千八百九十八年)ガ「ホルモット」ノ耳ノ傍ニ、乳腺ヲ植エタル

ニ、妊娠ニ當テ乳腺肥大シ、分娩後亦其分泌ヲ見タルコトハ、既ニ明ニ妊娠ト乳腺トノ間ノ關係ハ化學的ナルコトヲ示スナリテ二氏ハ乳腺ノ發育ヲ促シ、其機能ヲ喚起スル「ホルモン」ヲ捕ヘントテ、胎兒、卵巢、胎盤、子宮粘膜ノ各浸出液ヲ處女性家兔ニ注射シテ、乳腺ノ變化ニ注意セリ、若シ

果シテ是等浸出液内ニ尋ヌル「ホルモン」アリトスルモ、實驗的ニハ之ヲ到底体内ニ於ケル如ク、絶エズ乳腺ニ働カシムルヲ得ザルナリ、然レドモ二氏ハ六匹ノ家兔ニ於テ、胎兒浸出液ノ注射ニヨリテ乳腺ガ少シク發育セルヲ見、然モ其内ノ一匹ニテ注射ヲ五週間持續シ、百六十個ノ胎兒ノ浸出液、使用セラレタルモノ、乳腺内ニ、分泌胞ノ發生アルヲ證明シ得タレドモ、胎盤及其他ノモノ、浸出液ハ乳腺ニ變化ヲ及ボスアルヲ見ザリキ、茲ニ於テ二氏以爲ク、乳腺ノ發育ニ對スル「ホルモン」ハ胎兒ヨリ出ヅルモノニシテ、其作用ハ乳腺細胞ニ分解ヲ制止スルニアルベク、爲メニ其細胞ノ類化作用ハ其勢ヲ遏フシ、以テ乳腺ノ肥大ヲ來スガ、分娩ニ至レバモハヤ斯物質ノ乳腺ニ至ル者ナケレバ、乳腺細胞ニハ分解起ルベク、以テ乳汁ノ分泌

ヲ來スニ至ルナラント其他、甲状腺ガ身體諸部ノ發育ニ化學的關係アルハ、其機能缺如ニ直接歸因スル諸障礙ハ、之ニ甲状腺劑ヲ與フルガ、又ハ此腺ヲ植ユルコトニテ除クヲ得ルノ事實ニヨリテ、我等ノ既ニ知ル所ナリ、然レドモ我等ハ未ダ甲状腺ヨリ派出セララル「ホルモン」ヲ明ニセズ、彼ノパウマンガ製出セル「ヨードチリン」ハ甲状腺劑ト同様ノ作用アリトイヘドモ、其效力之ヨリモ弱シ、故ニ若シ「ヨードチリン」ガ此腺ノ「ホルモン」ナリトスルモ、恐クハ唯一ノモノニハアラザラン

次ニ又「内分泌」アリトセラル、大體垂體ニ就テハ、マグヌス及シエーフェ

ル(千九百一年)が其神經部ノ浸出液ヲ血中ニ注射スレバ、血管ノ状態如何ニ拘ハラズ、常ニ腎臟ニ特異作用ヲ起シ、尿分泌ノ増加ヲ見ルトノ報告アリ

サテ「ホルモン」ノ未ダ純粹製出セラレザレドモ幾分カ其性狀ヲ窺ヒ得ルモノトハ上述諸浸出液ノコトナリ

ベイリス及スタアリンク二氏ハ言ヘラク、炭酸、乳酸、「アドレナリン」ノ如キ明瞭ナル「ホルモン」ガ、イヅレモ上記エールリツヒノ第二種物質ニ屬スベキハ、勿論ノコトニシテ別ニ説クヲ要セズ、「セクレチン」ガ煮沸スルモ其效力ヲ失ハズ、滲透性ヲ有シ、蛋白質ニ非ラザルコトハ、タトヘ未ダ之ヲ分離シ得ザルトスルモ「トキシシン」類ヨリハ遙ニ簡單ナル物質ニシテ、亦エールリツヒノ第二種ニ屬スルモノナルベキヲ思ハシメ、又上記ノ「ヨードチリン」大腸垂體浸出液、胎兒浸出液ハ、イヅレモ煮沸ニヨリテ其效力ヲ失ハザルハ、其内ノ「ホルモン」ガ蛋白質、又ハ之ニ類似ノモノニアラズシテ、亦此第二種物質タルベキヲ思ハシムト

以上ニテ余ハ「ホルモン」説ノ事實的根據ヲ列舉セリ、即チ知ル其根據ノ未ダ十分ナラザルチ、從フテ此説ノ是非ハ固ヨリ今後ノ研究ヲ待タザルベカラズ、然レドモ七年前「セクレチン」ノ説、四年前「ホルモン」ノ説發表セラレタル以來、「セクレチン」ニ關スル研究甚盛ニシテ、「ホルモン」ノ名亦大ニ顯ハル、諸方ノ學者或ハ二氏ニ賛スルアリ、或ハ之ヲ難スルアリ、是等ノ論難ハ既ニ幾多ノ新事實ヲ齎シ來リヌ、今後モ亦然ラン、余ハ他日自家ノ經驗ト共ニ、是等ノ叙述ヲ試ムベキ機アルベキヲ思フガ故ニ今ハ煩チ避ケテ、「一切之ヲ言ハズ、唯此一篇ガ「ホルモン」ノ意義ヲ紹介シ得ルト共ニ、身體諸機能相互間ノ化學的關係乃至「内分泌」ニ對スル興味ヲ喚起スル「ホルモン」タルチ得ンチ冀フノミ

代謝學ノ大勢(醫學の進歩)

ドクトル 竹中繁次郎

代謝學ノ進歩

今新陳代謝物質代謝或ハ Stoffwechsel) 生理化學的方法ニヨリ對照シ得ベキ身體集成ノ變化ナリトセバ該學ノ源洞ハ遠ク西曆十七世紀ノ初期ニ溯ラザルベカラズ當時「バデユア」ノサンクトリウス氏、Sanctorius) ハ一大天秤ヲ用ヒ其體重ノ變化ヲ研メ、所謂周回揮發説ヲ主張シ、目撃スル排泄物ニヨレル體重ノ減少ヨリモ密ロ周回揮發ニヨリテ失フコトノ著明ナルヲ唱導セリ、當時ノ學者ハ排泄ト外溫并氣侯トノ關係ヲ證明シ、更ニ勞働、晝夜、四季、其他病的熱及病變ガ體重ノ減少ニ及ボス影響ヲモ示シ、業多ノ新研究ニ資質スル好材料ヲ掲ゲリ。

當時已ニ瓦斯排泄ノ本態ガ稍闡明セラレ、後間モナク二大要素ナル炭酸及水ノ本態ヲ識リ得ルノ機運ニ進ミ、爲メニ學界ハ光明ノ一点ヲ認メシモ今日唱導スルガ如キ、代謝學ノ意ニ非ラズシテ其經營ニハ少ナクモ尙ホ他ニ二大理想ト事實的證明ヲ要ス、則チ物質不減ノ原理 Der Prinzip von der Unzerstorbarkeit der Materie) 「化學的作用ニヨリ現出スル力ガ動物機能ニ變來スル事」ニシテ、蓋シ今日ノ代謝學ハ茲ニ胚胎ス、此盤石ノ上ニ立テラレ動物代謝ノ學問ヲ啓キシハ吾人實ニラザアジエー氏(Lavoisier)ガ不朽ノ功ニ歸セン。

ラホアジエー氏ノ説クガ如クンバ「反應時ニ見ル物重ノ増加減少ハ一ニ瓦斯形成分ノ附着放散ニ係ハリ、瓦斯ノ固形物質ト結合シ或ハ離散スルヤ豫メ固形物質重量ノ變化カ示ス分量ト同一ナリト爾來幾多ノ經驗ハ其有理ヲ語リ、一昨年ハ、ランドルト氏(Ernst Landolt)ノ如キハ二十年間ノ作業成績トシテ「化學的作用ニ反應スル物質ノ重量ハ

一 mgノ百分ニテ變セズ」トノ確定ヲ與フルニ至レリ如斯ク各個ガ年來練習セル妙靈ノ手腕ニ訴ヘ、本定理ヲ證左確定スル事實ハ學術研究ノ基礎トシテ無限ノ意味ヲ示ス者ニ非ラズシテ何ゾ。

斯クラゴアジエー氏が自然科學ニ提ケシ物體不滅ノ原理ハ同時ニ氏ヲ驅リテ生活體上ニ向ハシメタリト雖ソノ豐饒ナル證左ニ據ラス尙ホ生物學上幾多ノ證左ヲ求ムル切ナリ、爾來ノ研究者ハ此錯節ニ屈セズ、彼ノ無生物界ノ力則チ凌駕シ、生活體ニ不可思議ノ魔技ヲ弄シ、各分子ヲ交互ニ變化セシムル所謂生活力ヲ研メ前途ノ真理ヲ探クルニ日モ足ラサルノ觀アリ、要スルニ生活體ニ存スル凡テノ物質ハ例ヘ當時ノ技術法ヲ以テ食物中ニ證明シ得ザリシニモセヨ悉ク外發的 Ektopent ナルハ今ヤ分析術ノ完成ト共ニ十全ヲ告グルニ至レリ。

氏が第二ノ偉業ハ「動物体内ニ於ケル化學的變化ハ顯出スル力ノ根源」ナリト云フニアリ、而シテ酸素ナルモノハ初メプリストレー氏 Priestley ノ發見ニ掛リ、氏ニ由リテ初メテ燃燒并代謝ノ範圍ハ分量的ニ追究セラレ、無限ノ意味ヲ闡明セシ以來其作用ハ管ニ偉業ノ要部ニシテ化學的變化、力作業、溫形成ノ關係モ一ニ並ニ存ス、宜ナル哉、彼ノラブラシウ氏 Rappace ノ行ヘル試驗ハ一方ニ酸素消耗并炭酸排泄ノ量ヲ定メ、他方ニハ氷「カロリメーター」中ニ存スル「モルモット」ニ溫形成ヲ測レリ、之等ノ事實ニ徴スレバ「体内ニ於ケル酸素ハ恰モ蠟燭ノ炭化水素ガ燭中ニ酸素ヲ消費スル時ノ如ク同一量ノ溫形成スル者ナルヲ」略ホニ識ルニ足ル、然シ氏ハ尙ホ之ヲ以テ足レリトセズ、酸化作用ト溫形成ノ外更ニ動物體ニ於ケル作業ヲ明ニセリ。

氏ハセグレン氏 Seguin ト共ニ爲セル晩年ノ業作ハ革命ノ慘憺ニ妨ケラレテ公表ヲ見ザルモ明カニ「人体動作ノ酸素消費ヲ増加セシムルコト、寒氣ハ溫ノ需用ヲ高メテ同シク消耗ヲ増加スル事、并ニ攝食ノ酸化作用ヲ増進スルニ足ル」ヲ證セリ、唯リ晩近代謝ノ湖勢ニ鑑ミ餘隙ト認ムル者ハ力ノ

變化ヲ明了タラシメザリシ所ニシテ、爾來經緯五十年ローベルト、マイエル氏 Robert Meyer 及ヘルムホルツ氏 Helmholtz ガ彼ノ物體不滅ノ原理ト和照シテ「力ノ保存」 Erhaltung der Kraft トシテ公開セリ然共之レ亦代謝現象ノ質體ニ付キ注意スル稀ナリキ、其后、ラゴアジエー氏ノ僻ニ徵ヒ、スバルランツァニー氏 Spallanzani ハツセムフラツツ氏 Hassenfratz フムホルト氏 Humboldt ゲー、ルスサツク氏 Gay Innesse プルー氏 Prunt アルレン氏 Allen ベー、ユー氏 Pepp ノ輩出テ詳細ニ研究ヲ遂グ、遂ニ動物體ハ空素含有物質ヨリ構成セラレムルゲル氏 Müller 氏ノ所謂「プロテイン」 Protein ナル此物質ノ研究ハ總テ生活現象ノ詳精ナル觀察ニ對スル要件ナリトセリ、是ニ於テカ蛋白質ノ講究時トナリヘルウエリユス氏、ドウヤス氏 Berylines Dumas ヲイアン氏 Payen プツシン、ホルト氏 Bous-singnet ウエレル氏 Wohler チーデマン氏 Fiedemann グメリン Gmelin 等其重ナル者ニシテ、殊ニリービヒ氏ハ名高シ、氏ハ作業ノ根源ヲ構成ニ與カレル物質ノ内蛋白質ニ求メ、筋肉及臟質ノ消耗ハ作業ノ度ニ比例ストセリ又々空素排泄ノ化學的關係ハ一ニ尿ニ存スト。實ニ精細ナル輓近ノ試驗モ此說ニ一致シ空素ハ瓦斯形ニ排泄セラル、モノニ非ラズシテ液性可溶性狀態ニテ身體ヲ去ル者、全ク尿中ニ求メ得ベキ者トナス、是ニ於テカ、尿素并ニ他含空素分解物、排泄ハ諸種ノ生活現象ト關聯シテ學バレ、恰モラホアジエー時代ニ現モ再ビ「呼吸作用ニ於ケルト同一ナル趨勢ヲ呈セリ、然リ空素含有質ノ代謝ハ根源ノ現象ニ屬シ、他結合物例令ハ脂肪及抱水炭素ハ溫形成トシテ價值ヲ俱ヒ、血中ヲ循環シテ酸素ニ襲撃セラレ、蛋白防衛ノ任務ヲ果ス者ナラン。當時ノ學潮ハ妄リニ此点ニ瀕傾シ、リービヒ氏ノ如キハ「呼吸ノ強度ニ應シテ体内ノ燃燒ヲ高ム」ヲ信ズルモ又止ムヲ得ザルニ出ツ。

代謝生理ハ更ニ一新軸ヲ啓キ、動物体内ノ代謝總計ヲ明カナラシメ收入ト輸出トトテ分量的ニ計算スル時代ニ到着セリ、千八百五十二年ビツテル氏及

シユミット氏 Bilder Schmittノ検査ハ則チ模範ニシテ代謝ノ計算ハ空腹
時并ニ營養狀態ニ付キ遺憾ナク遂行セラル、氏等ハ尙ホ身体ノ外方ニ關ス
ル該表ニ甘ンセス、進ンデ中間代謝ノ如何、消化器ノ各腺ガ分泌スル量、
分泌物ノ集成及運命ニ於ケル説明ヲモ試メリ。茲ニミスシエル氏ルツシユ
氏 Abser-Ruesch 等一派ノ研究モ他面本學ノ進歩ニ價ス、即チ外來ノ食
物ナキモ生殖器ヲ完成スル鱒ニ見ルガ如ク、欠如セル食餌ニ對シ一定ノ器
官ハ可及的作業ヲ限制シ彼ノ存在ヲ計ルノミナラズ量ニ於テモ反テ増加
ス。

其后ビツテル氏シユミット氏ノ業作ハ實偉大ナルモ永ク繼續スル者ナカリ
シガリービロ氏ノ余波ヲ受ケ民顯ノビシヨフ氏 Teichhof ヲイト氏 Voit
|| 初メビシヨフ氏ト共同シ后チ獨立シテハ方法ノ改善ニ苦心シ内外諸種ノ
條件ニ對スル蛋白質分解ノ有様ヲ追及セリ、是ニ至リビツテル氏シユミツ
ト氏ノ計算試驗ハ益々完美ヲ告ゲ、殊ニフオイト氏ハベツテンコーフェル
氏ト結合シテ炭酸排泄酸素消耗ノ測定ニ勉メテ價値ヲ與ヘシ以來然リトナ
ス故ニ總代謝計算 Gesamte Stoffwechselノ完美ハ氏ニ至リテ初メテ十全
ナリ、氏及ベツテンコーフェル氏ノ呼吸裝置ハ人類其他ノ大動物ニ對シ長
時ニ渡ル呼吸試驗ヲ勵行セラル得ル特点アル事ハ言フ迄モナシ。

|| ビロ氏ノ學說ニ對峙シテスベツク氏 Beek フオイト氏 Voit ハ筋作
業ノ蛋白分解ニ及ボス事ノ僅微ナルヲ證明シ、恰モ之ヲ水車ノ河ニ比シ其
齒輪ニ水ガ作用シテ動作ヲ喚起スルニ異ナラストセリ異論茲ニ百出シ、物
質ノ代謝及溫發生ハ安靜勞動ニ於テ共ニ同一ナリトナセル者アルニ至レ
リ、當時未ダ他物質ハ蛋白代謝ノ代價的ニ平均スルチ知ラザリシガ故ニ眞
理ハ再ビ蒙雲場裡ニ道ヒ、唯リ体内ニ於ケル活潑ナル蛋白流 || 含物ノ豐
及恰當セハ動作完成ノ要件タリト信セルノミ。 體ナル輸入
斯ク世ハ永ク研究ヲ窒塞ニ裏ラセリ從テ其間蛋白代謝上蛋白輸入ノ影響ハ
物質ノ化學的本態ニシテ又タ代謝全部ナリト了解セシガベツテンコーフェ

ル氏フオイト氏ハ僅カニ無生物ヲ檢シテ其運命ヲ同義ニ論破シ殊ニフオイ
ト氏ハ脂肪及抱水炭素ガ蛋白代謝ニ及ボス節約作用ヲ發見シ、抱水炭素ハ
遙カニ脂肪ニ勝ル者トナシ、更ニ含水炭素ノ大量ヲ体内ニ輸入スルヤ悉ク
分解セラル、事恰モ蛋白質ノ代謝時ニ見ルト同一ナリト信セリ。此際炭酸
排泄ノ増加ハ唯一ノ證據ニシテ、化學的本態ガ代謝ノ大サヲ定ムルトノ說
ハ絶頂ニ達ス、時ニフリユゲル氏 Heringer ガ行ヘル血液瓦斯、動物体ニ
於ケル酸化ノ場所及法則ノ試驗ハ代謝ノ範圍ヲ支配スル方則ノ觀察ニ變化
ヲ興フルコト、ナレリ。

フリユゲル氏ハ生体ニ於ケル生理的燃燒ノ検査ニ由リ、從來ノ想像ニ反シ
テ酸素ハ主動的ニ動物体内ノ燃燒チ左右セス、燃燒ノ大小ハ細胞ノ生活機
能ニヨリテ支配セラル、者ナルヲ確定セリ。

●高木兼寛氏の脚氣懷舊談

志賀、今ノ二博士及長典綿引其他數氏ノ發起ニテ去六月十七日午後一時ヨ
リ、高木氏ヲ慈惠會醫專校ノ新築講堂ニ請待シ、氏ノ脚氣ニ關スル舊專談
ヲ乞ヒタリ、陸海軍醫等聽衆七十餘名、氏ハ三時間ニ亘リ快辯ヲ振ハレタ
リ、左ニ大要ヲ紹介スル事トセリ。

▲所謂タカキノ脚氣談 今日諸君ガ此ノ凡骨タカキノ脚氣談ヲ聞イテヤロ
フト云フ御芳志忘レ難ク此上モナイ面目トスル處デアル。以前余ガ脚氣チ
談ズルト、人ハ所謂高木ノ脚氣談ガト一笑ニ附シ去ツタ位デアル、然ルニ
二十餘年後ノ今日ニ至リ、却ツテ諸君ヨリ望マル、トハ誠ニ夢ニモ思ハザ
リシ所、命長クシテ面目アル次第デアル。

▲先ヅ予ノ表ニ見ヨ 明治五年兵部省ヨリ別レテ海軍省ガ獨立シ、海軍ヲ
醫ヲ置カレテ以來今日ニ至ル間ノ變遷ハ實ニ甚シイモノデアル、最初我海
軍々醫ノ元祖トモ云フベキ人ハ彼ノ石神良範氏デ此人ハ長崎修業ノ蘭醫者

デ、維新ノ前薩長兵ガ京ニ入り込ミ、禁裏ヲ守衛セシ際、薩軍附ノ醫者トシテ入洛シ、後チ海軍艦輔トナツテ次ニ軍醫寮ガ置カレ、奥山小平氏ガ代テ主腦トナツタガ、當時ノ書類ハ散亂シ、纏マリシモノ少ク患者表等モ不確デアツタガ、明治十三、四、五、六、ノ數年間ニハ是等不確ノ中カラモ推斷シテ比較的的確ナル患者表ヲ作ツタ、併シ未ダ脚氣ガ幾名アルカ、ソノナ事ハ確カニ分ラナカツタケレドモ、五年ト六年ニハ千人ノ海兵中ニハ三百六十四人ノ病兵ガアリ、九年ニハ四百十一ニ増加シ、十二年ニハ三百四十八トナリ、十五年ニハ四百五人デアツタノザヤ、然ルニ予ガ兵食ノ改良ヲ絶叫シテ實行セシ十七年ニハ不可思議ニモ百廿七人ニ減少シ、更ニ十九年ニハ一萬人ニ付テ三十五人ニ減少シ、特ニ十八、九年ニハ脚氣ニ斃レシ兵ハ一人モナカツタノデアアル。何故ニ斯ク海軍衛生員上ニ病、死者ノ變革ヲ來スニ至ツタカハ、則チ予ガ述ベントスル脚氣談ノ生命デアツテ、

又諸君ガ聞イテヤロフト云ハル、目的デアラウ。

▲初メテ九等出仕デ海軍ニ入ル。想ヘバ明治五年五月デアツタ。鹿兒島デ兵部省カラ召サレテ東京ニ出テ、海軍省ニ入り、九等出仕ヲ命ゼラレ、今ノ高輪ノ伊東元帥邸ノ所ノ、外國人接見所跡ノ海軍病院ヘ勤務シタノハ。當時ハ諸寺ノ寮ヲ召上ゲンテ海軍兵ノ宿泊所ニ充テ、芝濱ノ離宮等モ當時其ノ入口ノ邊ハ水兵屯所トシテ水兵ト海兵ノ二種ノ海軍兵ガ居ツタノデアアル。是等ガ脚氣又ハ花柳病ニカ、レバ、高輪ノ病院ニ入レタガ、夏季ハ罹病者ガ多クテ、到底高輪病院ノミデハ收容シ切れヌ處カラ、更ニ近所ノ寺院ノ廣間ヤ、増上寺木寺ノ寮ナツ片端カラ借り切ツタモノデアアル。之等ニ對シテハ矢張り今日現行ノ脚氣療法ト同様デ下劑ヤ、キニーネ、ホミカヤ、鐵劑位ヲ與ヘタモノデアツタ。

▲死者ニ對シテハ瀉ヲマヌ譯。當時我海軍ニ屬ツテ居ツタ英醫リ弗リヤムアンデルソン氏ハ脚氣重患者ニハ、峻下劑ヤ刺絡ヲ行ヒ、衝心狀態ニ陥ツタモノニモ又行フタ。多少ノ効果モアツタ様ニモ見タガ、モ一全快スルト見

テ、高輪カラ増上寺ノ寮ヘ送ル途中、突如トシテ衝心狀ヲ起シ、一二日後ハ鬼籍ニ上ツタ者モ澤山アツタ。誠ニ死者ニ對シテハ申譯ノナイ氣ノ毒ノ事デアアル。余ハ八年六月外國留學ヲ命セラレ、十三年歸朝シテ其間ノ病兵狀態ヲ聞クニ中々ノ増加デアツタ。コレデハナラヌト焦慮シテ居ル内、中監ヲ拜命シ、海軍病院副長トナツタカラ、何デモコレカラ大奮發デ、此多數ノ病者ヲ救濟セシバナラヌト、諸々ノ策ヲ講ジテ、遂ニ各海軍病院ヨリノ報告ヲ綜合シテ見ルノニ、病者ノ類別ヤ其ノ報告數等ニ非常ナ不平均ノ數ガ示サレテ居ル事ニ氣附イテ、茲ニ初メテ衣食住ニ就テ一路ノ光明ヲ認メ得タ様ニ感ジタ。

▲衣食住ハ果シテ病因カ。サテ衣、食、住ト脚氣ノ關係ニ氣付イテカラハ種々ノ方法デ精査シタガドモ大同小異デ、劃然ト取トメル事ガ困難デアツタケレ共、大體ニ於テハ、下級ノ者ニ該患者ガ多ク、下士官以上ニ少ナイト云フ事ヲ發見シタ。當時下士以下ニハ一人一日十八錢ヲ支給サレテ銘々食物ヲ求メテ生活シタノデアアル。此ノ十八錢ノ現ナマ支給ノ事ニ付テハ、當時上下ニ物議ガアツタノデアアルガ、常ニ移動的ノ海軍ニハ、陸軍ト同様ニ食物ヲ支給スル譯ニ行カヌトノ理由デ現金ヲ與ヘル事ニナツテ居ツタノデアアル。丁度八年六月ノ三日ニ北海道ヲ拔錨シテ、十一月ニ至ル間、航海四十四日、定泊九十餘日、天氣好真ニモ不拘、此間五十三人ノ患兵ヲ出シテ死者九人ヲ算シタ。又同年ノ十一月六日北太平洋ニ向ケ拔錨シタ筑波艦ハ、桑港布哇ヲ經テ、翌年四月十四日ニ歸朝シ、此間百六十日ノ航海百八日ノ定泊、當時或ル一日寒風凜烈ノ時ニ桑港近クニ於テ、餘リニ病兵頗出スルノデ、勘定シタラ一日平均五十餘人ヲ算スルニ及ンデ居ル。艦長以下ノ驚愕ハ言ハデアツタ。又布哇ヘ寄航ノ場合モ同様デアツタガ、予ニ取ツテハ此ノ慘狀ガ大ニ研究ノ歩ヲ進メシメタノデアアルガ、十一年六月筑波ガ更ニ奥州ヲ廻ツテ六月ニ歸ツタ。此航海ハ温ヨリ熱帶ニ至ル航程デ歸リハ寒イ所ニモヨツタガ患者ハ案外少カツタノデアアルガ寒暑ニ多クノ關係ガナ

イト思フニ至ツタ。

▲パークスノ衛生書ハ恩人。ソレ等カラ更ニ食餌ニ付テ、各海軍根據地就中横濱須賀野屯所ヲ親シク巡察シ一定ノ表ヲ示シ、三食量ノ詳細ナル調査報告ヲ徴シ、我國兵食ヲ根本ニ分析解決セント企テタ。乍併今日デコソ食物ノ分析表モ完全ノモノガ出来テ居ルケレ共、當時予ガ初メテ分析表ヲ綜合スルノ勞ハ中々デアツタ。處ガ幸ヒパークス氏ノ實際衛生書ガアル事ニ氣附イテ、ソレヲ基礎トシテ、僅ニ調査ノ便ヲ得テ、更ニ勇氣ヲ百倍シテ調査ヲ進メテ、遂ニ我が海軍屯所ヨリノ報告書ニ據レバ屯所々々ニ與ヘラ

ナツテ、四十餘日武裝ノ儘ニ滞陣スル事トナリシガ、比叡艦中ニハ早クモ脚氣患者ガ非常ニ増加シテ來タ。元來朝鮮ニ向ハヌ前、此等三艦ハ、北海

▲脚氣全滅ノ策漸ク立ツ

斯クテ予ノ調査方針モ略ホ日途ガ立チ、何テモ兵食ノ改良ヲ斷行シ、前述ノ分析數字ニ當テハマル様、調理シテ見テバナ

▲脚氣調査委員會

ソノ建白書ノ内容ハ、金剛艦ノ例ヤ横須賀横濱ノ屯所ニ罹病者ノ多キ事、殊ニ金剛艦ニハ機關ノ運轉ニサヘ差支ヘル場合ニ立チ

▲養兵費三百萬圓。斯クノ如ク食物上ニ付テ一新光明ヲ獲得シタル予ハ、寢テモ起キテモ居ラレヌ。一日兵食ノ事ヲ云ハサレバ、幾人ノ脚氣患者ハ増ス譯デアアル。焉ゾ此ノ倦怠々時ノ至ルナ俟ツテ居ラレウ。具申書ヤ献策

シ出来ザレバ十八錢ノ支給額ヲ日々全額支給スベシ現時ノ如ク十八錢ノ内

幾錢カハ月末ニ纏メテ支給スル如キハ單ニ營養不長ニ陥ルノ原因タルノミナラズ、花柳病ヲ助長セシムルノミト喝破シタガ、到底此ノ支給額全部ヲ彼等ノ常食ニ充テシメル事ハ出來ヌトノ説ガ勢力ガアツタ。川村海軍卿テサヘ、兵ニ小使ヲ貯ヘサス事ヲ一ツノ美風ト信ジテ居ツタノデ、他ノ長官連ハ、勿論雷同シタガ、當時大佐デアツタ、伊知地幸吉氏ハ、大反對デ、大ヒニ予等ノ全額支給説ニ賛同シテ論セラレタノデ、海軍卿ヲ動カシ、遂ニ他ノ反對者モ説伏スルニ至ツテ、予等ノ兵食改良説ノ第一歩ヲ移ス事ヲ得タ。醫務局ノ方針ニ賛成シタ伊知地氏ノ見識ニハ、今デモ感謝シテ居ル次第デアアル。

▲脚氣調査委員成ル。一度本病調査研究ノ歩ヲ進メン爲メ、現職ニアル武官等ヲ長トシ、各艦ニ斯會ヲ組織シ、爾來夫等ノ報告ヲ綜合シテ、漸々所期ノ目的ヲ達シ得ントスルニ至ツテ、更ニ十六年二月ニハ中央ニ調査會委員トシテ、將官一名、佐官十名、醫官十名、主計官二名其他職員二十五名、外ニ書記三人ヲ以テ組織サレ、十七年二月期シ、愈々十八錢全額ヲ以テ所謂窒素炭素ノ割合一ト十五ノ比例ニヨリ供給スル事トナリ、大イニパン食肉食ヲ増ス事ニシタ。斯クテ予ガ希望ハ、益々拂トツテ來タ。

▲軍艦ノ周圍ニパンガ漂フ。一難去ツテ一難來ルデ、何ゾ圖ラン、神州由來猪牙ノ様ナ白米テ育ツタ大和魂、何テ今更脂臭ニ著チ着ケンヤ、肉食唾棄スベク、パン食又然リトイフノテ血氣ノ逸ル海兵等ハ、當路ノ心痛チモ不顧、喫飯時ニハ、乘組軍艦ノ四圍ニハパンチ放棄シテ、恰度鷓鴣イタ權ダトノ報告ガ來ル、事幾分尾端ヲ附ケタル嫌アルモ、或ハ斯ル事ヲ等閑ニ附シ、彼等海兵ノ爲スマ、ニ放任セル長官ナキニモマラズ、サリトテ脊ニ腹ハ代ヘラルマツ、何時シカ改良食ニ慣ル、ナラント信ジ、一時ハ報告ノマニ、取合ワヌ方針ナリシガ、スキ腹抱ヘテモ食リヌト云フ様ナ頑固ナル風評モ立チカクタノデ、醫務局ノ失當ナル處置ダト云フテ來ル、五月

▲閣下脚氣調査委員成ル。直チニ兵食改良ト迄ハ行カザルモ、予ガ所信ハ一步一步ヲ進メ來リ遂ニ十八錢全用説ハ採用セラル、ニ至リ。潛カニ喜悅シタ事デアツタガ、茲ニ恐レ多キ事ナガラ 主上御脚氣ノ御容體ニ在ラセラレ、九重ノ大内山ニハ愁ヒノ雲ヲ拜シ奉リシガ、一日八ツ山ノ伊藤博文公ヲ訪子テ、他所ナガラニ、御容體ヲ聽クト、實ハソレニ付テ、脚氣ニ付テノ見込ミガ立ツカト云ハル、カラ、素ヨリ無定見ナラバ何チ好ンデ今日迄絶叫センヤト答ヘタ。スルト公ハ、實ハ 主上モ脚氣ニ付テハ軫念アラセラルレバ機ヲ見テ御前ニ伺候シテ、本病ノ事ニ付キ、何カト御聞ニ達ス様ニ取計フベケレバ、其ノ積リテ十分研究セヨトノ事故、唯々トシテ辭シ歸ツタガ、其ノ後數日ニシテ伊公カラ直様參内セヨトノ急使ニ接シタ、取ルモノモ取り敢ヘズ川村海軍卿ニ隨伴シテ赤坂御所ニ伺候シ拜謁ノ光榮ヲ浴ビタ、無論伊藤公モ控ヘテ居ラレ、バ、有栖川宮殿下ニモ塞臨アツタ斯クテ身ニ餘ル光榮ヲ荷イツ、申上タノハ斯様デアツタ。

▲外人ニ發見サレルハ不名譽。御答ハ大體左ノ三項ニ付テ申上ゲタ。即チ第一當今海軍兵ノ本病豫防ノ事、第二學生ニシテ本病ニ罹ルモノ多キハ將來國家發達ニ大障礙ヲ來スモノタル事、第三ニハ本病ノ原因ヲ外人ニ發見サル、ハ本邦斯學者ノ大不名譽デアルト云フ事デ、先ツ之レニ對シテハ如

何トノ御言葉……死體解剖ナシテ顯微鏡的檢査ヲ爲セルモ其ノ原因ガ不明デアアル事、食物ノ比較研究ノ必要ナル事、病因ハ全ク食物ノ割合ニ欠クル處アリ、滋養品チ欠ク人ノ割合ニ多ク濕氣、群居、勞働、精神上ノ抑壓粗食等モ何等此病ニ關係ナキ事等ヲ申上ゲタ。

▲要ハ食物ノ爲ナリ。斯ク御下問ニ對シテ逐一謹答申シテ最後ニ然ラバ如何ニスベキトノ勸諭アリシカバ、予ハ要スルニ、食物ノ調和如何ニヨルノミナリト申上グルヤ、海軍兵等ノ食物ハ如何トノ事故、千載ノ好機コ、ナンメリト予ハ現時ノ十八錢説ヲ全然廢止シ、御英斷ニヨリ、現品給與ノ制ニ改メラレン事ヲ望ム旨ヲ申上ゲテ退イタ。是レ實ニ十五年十一月廿九日デアアル。

▲脚氣調査委員成ル。一度本病調査研究ノ歩ヲ進メン爲メ、現職ニアル武官等ヲ長トシ、各艦ニ斯會ヲ組織シ、爾來夫等ノ報告ヲ綜合シテ、漸々所期ノ目的ヲ達シ得ントスルニ至ツテ、更ニ十六年二月ニハ中央ニ調査會委員トシテ、將官一名、佐官十名、醫官十名、主計官二名其他職員二十五名、外ニ書記三人ヲ以テ組織サレ、十七年二月期シ、愈々十八錢全額ヲ以テ所謂窒素炭素ノ割合一ト十五ノ比例ニヨリ供給スル事トナリ、大イニパン食肉食ヲ増ス事ニシタ。斯クテ予ガ希望ハ、益々拂トツテ來タ。

▲軍艦ノ周圍ニパンガ漂フ。一難去ツテ一難來ルデ、何ゾ圖ラン、神州由來猪牙ノ様ナ白米テ育ツタ大和魂、何テ今更脂臭ニ著チ着ケンヤ、肉食唾棄スベク、パン食又然リトイフノテ血氣ノ逸ル海兵等ハ、當路ノ心痛チモ不顧、喫飯時ニハ、乘組軍艦ノ四圍ニハパンチ放棄シテ、恰度鷓鴣イタ權ダトノ報告ガ來ル、事幾分尾端ヲ附ケタル嫌アルモ、或ハ斯ル事ヲ等閑ニ附シ、彼等海兵ノ爲スマ、ニ放任セル長官ナキニモマラズ、サリトテ脊ニ腹ハ代ヘラルマツ、何時シカ改良食ニ慣ル、ナラント信ジ、一時ハ報告ノマニ、取合ワヌ方針ナリシガ、スキ腹抱ヘテモ食リヌト云フ様ナ頑固ナル風評モ立チカクタノデ、醫務局ノ失當ナル處置ダト云フテ來ル、五月

繩キ事ダツタ。然ラバ、現ニ入院中ノ患者ニ改良食ヲ與ヘテ、其ノ堪ヘ得ルヤ否ヤヲ試ミルニ、彼等ハ却ツテ改良食ヲ希望スル事勿論ナリシカバ、病兵既ニ之ヲ堪ユ、何ゾ健康兵ノ此ノ位ノ事ヲ堪ヘ得ザランヤト、益々醫務局ノ方針ヲ確守シテ勵行セシメタ。

▲遂ニ麥飯說ヲ糾ス。肉食パン食主義ニケチヲツケラレタル予ハ、然ラバ日本古來ノ麥飯ハ如何ニト、十八年三月一日ヨリ十五日迄ハ麥米、半々四月一日ヨリ三食共ニ半麥飯ヲ與ヘル事ト爲サントシメガ、又々物議ヲ醸シタ、セメテ七分三分トカ、或ハ四分六位ノ程度ニセバ云々ノ愚說モ綴出スルニ至ツタカラ止ムヲ得ズ、權須賀地方ノ各上官ヲ急ニ召集シテ、其ノ半麥ヲラザレバ、矢張肉食パン食ニスルノミ、兩者ノ養價比例ヨリ打算シテ、其ノ主成分ノ配合表ヲ示シ、決シテ無定見ニ半麥飯モ肉食パン食モ推獎スル譯ニアラズ、宜シク健全ナル模範的日本海兵ヲ養成セントセバ、須ラク斷然之ヲ實行セラレンコトヲ望ト述ベテ、尙ホ望ムラクハ此ノ半麥三食ニ加フルニ、肉食ヲモ加ヘタキナリト追加シタ、斯クテ不平ナガラニ、理ノ當然ニ從ヒ、斷然行フ事トナリテ以來、翌十九年ニハ實ニ患者三名ヲ出スニ止ツタノデアアル。予ガ築地ノ厚生館ヲ開カレタ私立衛生會ノ席上デ、食物ノ組合セニヨリ、養價ノ上ニ注意スベキ數字ノ變化ヲ來ス事ヲ述ベテ、來會者ノ注意ヲ喚起シタ事ハ、諸君ノ御記憶ニ存スル事ト信ズル。

▲再ビ龍顏ニ思ハス。流石ニ伊藤公ハ、常ニ達觀シタ事ヲ云フテ居ラレタガ、中ニ米ダニ耳架ニ殘ツテ居ルノハ、或時會見ノ際、大切ノ人懐ノ子供ヲ預ツテ、脚氣位デオ役ニ立テズシテ、何デ返ヘサレルカ、トノ一言ハ實ニ我ガ意ヲ得タモノデ、其ノ後苦心ノ結果、全ク此ノ伊公ノ杞憂ヲ去ルヲ得テ、公モ大ニ喜ンデクレラレタ譯デアツタガ、遂ニ十八年三月再度拜謁ノ光榮ヲ得テ、遠洋航海ヲシタ龍城艦ニ、本病者ノナカリシ事ヤ、兵食改良斷行後ノ狀況等ヲ遂ニ二言上シ、尙ホ數年ヲ出ズシテ脚氣ハ全滅スベク、其時更ニ重子テ光榮アル拜謁ノ義ヲ豫メオ願ヒ申上グルト云フテ退出

(雜纂)

シタ。

▲三度閣下ニ脚氣ヲ上聞ス。三度拜謁ヲ願ヒ奉ツタ、予ハ更ニ満身ノ勇ヲ起コシテ、専ラ本病ノ根絶ニ熱中シテ、幸ニ成績モ著々ト擧ガル、海軍脚氣病事歷書、内閣諸官省ノ報告書等ヲ取マトメ、二十三年十月十六日、天顏ニ咫尺シ、其ノ後本病ノ根絶及ビ將來ノ施設方針、及本病ハ年次全國都鄙ヲ論セズ傳播ノ風アリ、开ハ世ノ進歩ニ連レ、米食ヲ主トスル農民多キヲ加フルベナリ、米ヲ造リ麥ヲ食フ農民ハ、次第ニ米ヲ作り賣ツテ又米ヲ買イ食フニ至ル、之レハ本病ノ傳播スル一因ト存スル旨ヲ申上タルニ、陛下ニハ此ノ脚氣ヲ根本ヨリ滅絶セシメタル結果、國家ガ得ル海軍經濟ノ利益ハドノ位ナルヤノ御下問ニ對シテハ、直チニ其ノ其大ナル療養費ト、余ク戰鬪力ヲ缺ゲル病兵ノ爲メニ補フベキ斯兵ノ補充、健康兵ノ服務時間ヲ延長シ、延イテ之レヲモ亦不健康兵トナラシメルノ不幸、國家ガ支拂フ不利益ハ、到底一言ニ申上ゲ兼ヌル位ナリト申上グルヤ、イタク感動被遊シヤニ拜シ奉ツタ次第デアツタ。

▲想起當年楚歌ノ聲志レモセヌ十七年五月八日築地精養軒ニ於テ、海陸軍々醫ノ醫官會議ノ席上、余ハ陸軍側ノ神經中樞說、解剖的所見ヲ批難シ、矢張り靈、炭一ト十五ノ優良說ヲ主張シタ、石黒氏ハ然ラバ、熊本龍城ニ脚氣ナキハ何故カト質問サレタノデ余ハ當時兵食不足、將軍自ラ粟粥ヲ口ニシ、兵士ノ命脈ヲ維持シタルニ依ルト答フ、當時石黒氏ハ空氣說ヲ主張シ、予ハ食物說ヲ主張シ、遂ニハ東京醫科大學ノ大澤博士ノ學理上ノ反駁、緒方博士ノ細菌說、村田學士ノ論駁等一齊ニ予ノ說ニ鋒ヲ向ケラレタ、殊ニ村田學士ノ如キハ、然バ該先生ハ何故糠ヲ食ハヌトサヘ怒號シタノデアツタガ二十餘年後ノ今日ニ至リ、糠ト脚氣ヲ云々スル學者手合ノ増加シタルヲ思ヘバ寧ロ奇異ノ感ニ堪ヘヌノデアアル。

▲後進青年ニ注文ス。物ハ知足ノ二字ニ付テ解釋ノ仕方ニテ如何様ニモ考
 へ得ラレン、予ハ今脚氣病ノ昔物語ヲ終ルニ臨ミ、切ニ此ノ知足ノ二文字
 ニ深キ意味アル事ヲ特ニ附言シテ、光榮アル此ノ壇ヲ降ラント思フ。开ハ
 鏡氣ニ逸ナル青年諸君ガ、何事ニマレ、自説ヲ樹テ、愚ニモツカヌ理屈チ
 ノミ説キ立テタガル事ノ弊風アルヲ遺憾トス。物ノ理屈ハ、時ト場合トニ
 ヨリ、幾種類ニモ立テ得ラル、モノデアルガ、此ノ脚氣ニ付テモ、幸ニ此
 ノ如キ成績ヲ示シツ、アル場合、更ニ改良ヲ行ハントカ、或ハ病原力不明
 ナ病氣ダカラト云フ趣味ノ上カラ、矢鱈無情ニ、試験管ヲ振り廻ハシ、或
 ハ顯微鏡ト手ヲ換ヘ品ヲ代ヘテ研究サレルノハ、決シテ惡イトハ云ハザレ
 共、角ヲ矯メントシテ牛ヲ殺スノ愚チ學バザラン事ヲ切望スル。

以上高木男ノ演説ニ對シ、志賀博士ハ有志ヲ代表シ、閣下ガ昔日ノ苦心ト
 勇氣トハ、實ニ榮譽アル好成绩ヲ示サレテ、後進者ノ感佩ニ堪ヘヌ次第。
 如斯大專業ノ好實驗ハ他ニ比スルモノガナイト信ズ、最早脚氣ハ大體研究
 サレシ如キモ、尙ホ殘ル問題モ少ナカラザレバ二十年後ノ今日ト雖モ猶ホ
 問題ハ問題トシテ、他ノ方面ヨリ研究スルモ可ナリデアル。併シ男ノ大實
 驗ニ向ツテハ、吾人後進者ハ飽迄敬意ヲ拂ヒ今後尙ホ進ムデ分析的、研究
 的態度ニ出テ、益々其ノ根本ヲ明カニセズバナラヌ、云々ト述ベ散會シ
 タ。

結核新治療法

今春ルーター電報ハ巴里ニ於テ完全ナル結核治療法ノ報告サレタル旨
 傳ヘラレタルガ、内容ノ如何ナルモノナルカハ何等報導サレザリシ、
 今左ニ詳細ナル通信ヲ得タレバ此ニ掲グ、賛否ノ論交々アリ未ダ全體
 ニハ認メラザルモノ、如シ

巴里結核事業會長ドクトル、サムエルベルンエーム、及サンデニー對結核

配劑所主任醫ドクトル、ルイ、ジョーハールノ兩氏ハ、萬國結核會ト、治療
 會ノ兩所ニ於テ明日演述スベシ。但シ放射能作性「メントール」、沃度ヲ以
 テ、肺及他ノ結核病ノ治療上ニ著大ノ進歩アリタルヲ報告セントスルニア
 リ此結核特效藥ハ、ブダペスト市ドクトル、ド、センデツフイーノ研究ト實
 驗トニ由リテ成立シ、過去三年ノ間、同市ドクトル、ケルテツスアバニ由
 テ實地ニ應用セラレ、其他全然無關係ナル多數専門家ニ由リテ試用サレシ
 者ナリ。佛國ニ於テハペンノ養生所長ナルドクトル、エルウエ巴里ノドク
 トル、ガミンスキ、及ドクトル、ミシヤロウイシ、ロートシルド病院ノ助
 手ドクトル、シアマントベルデル、タキシールノ養生所長ドクトル、カル
 レノ如キ是ナリ。

製品ノ成分ハ左ノ如シ。

「ペプトン」化沃度〇・七五種

「メントール」〇・〇六種

「鹽化」ラツニウム、「バルニウム」ノ「エーラル」溶液十分一滴

▲沃度ヲ以テ行ヘル試驗

ドクトル、ド、センデツフイーガ、結核ノ治療ニ沃度注射ヲ試ミシハ久シキ
 以前ヨリノ事ニテ、氏が巴里ナル同僚諸氏ニ其成績ヲ報セシ時ニハ、何レ
 モ大ナル興味ヲ喚起セシガ、併シ驚嘆スル事ハナカリキ。但シ諸氏モ同似
 ノ成績ヲ有セシガ故ナリ沃度ノ治療力ハ著大ナル者ニテ、結核ノ治療上ニ
 モ現出ス。乍去注射ニ繼發スル堪ヘ難キ疼痛、并ニ沃度中毒ノ如キ副作用
 ハ其應用ヲ殆ント絶對的ニ禁止セシム。然ルニ新製劑ナル放射能作性メン
 トール沃度ニハ斯ル不便ナク、其効力ニ至リテハ極メテ偉大ナリ。只其理
 由モ完全ニ説明サレザルヲ遺憾トス。

動物試驗就中天竺鼠ニ行ヒシ者ハ、對照動物ニハ危險ナル結核菌モ本劑ヲ
 用ヒシ者ニハ、全然無力ナル事ヲ示セリ。人類ニ行ヒシ試驗ハ、大ナル注
 意ヲ以テ施行サレシガ、是又驚ベキ好成绩ヲ呈セリ。日々一罎ヲ注射シテ、

三十回ニ至レバ。奏効ス。一箇モ沃度療法ニ於ケル如キ、注射不能症ヲ起セシ事ナシ。肺結核ニ於テハ、十回ノ注射ニテ早ク既ニ明確ナル効力ヲ認ム。咯血ハ止マリ、盜汗、削瘦、衰弱及食慾減損ノ如キ不快ノ同伴者モ消失セリ。患者ハ體重及體力ヲ増加シ、同時ニ精神狀態モ慰安セラレテ、活潑トナリタリ。此恐ルベキ病ヲ治スル上ニ於テハ、治効ノ半ハ氣力如何ニ關スル者ナルニ、斯ク活潑トナレルハ、非常ニ喜ブベキ徵候ナリトス。ドクトル、ベルンエーム及ドクトル、ジョーパールノ報告セル七十五人ノ中ニハ副學丸結核一人、骨結核四人、腺結核二人、通常必死ト稱スル喉頭結核二人アリ。治癒ノ効力ハ、患者ガ常職ニ従事スル間ニ現レ來ルナリ。患者ノ多數ハ、勞働者ニシテ、或者ノ如キハ、非常ニ有害ナル狀況ノ下ニ執務スル者ナリキ。特ニ注目スベキハ、狼瘡治療ノ報告ニシテ、硬化ハ自然ノ經路ヲ取ル者ノ如ク、治癒機會ハ良性ノ結核症ガ新鮮ナル空氣ト日光トニ由リテ治スル時ト同ジ性質ヲ帶ビタリ。

▲新治療法ノ効能

結核菌ガ、他ノ細菌ト合併スル時ハ、豫後不良ナルヲ常トス。連鎖菌及葡萄狀菌ハ、該菌ノ毒性分泌ヲ増加スル者ノ如シ。放射能作性メントール沃度ハ連鎖菌ヲ速ニ撲殺ス。一回ノ如キハ、治療三日ニシテ既ニ消失セリ。教室内ノ試験ニ由ルモ、菌ハ速ニ死機ヲ發シ終ニ全然消失ス。

巴里ニ於ケル二種ノ學會ニテ、報道ノ任ニ當レル人々ハ『ドクトル、ド、セツフイハ結核治療上最モ大切ナル發見ヲ爲セリ』『氏ノ藥品ハ實ニ完全ナル者ナリ』ト信ズト云ヒ『無害ニシテ大多數ノ場合ハ全治ス』ト思フト云ヘリ、氏等ハ曰ク。

予等ハ見聞シ觀察シ研究シタル結核、放射能作性メントール沃度ノ堅キ信者トナリタリ。是此藥品ガ直チニ奏効シ、不治ト思ヘル者ヲモ、治癒セラルガ故ナリ。ドクトル、ド、モンテツフイ氏ノ共働者ガ其効力ノ確實ナルヲ認定スルニ及ンテ始メテ之ヲ世ニ發表セシハ、極メテ大ナル功德ト

ス。

▲英國醫界ノ諸説

木曜日ノ『タイムズ』ニ掲ゲラレタル豫報ハ、醫ノ注意ヲ喚起セリ病院ニ於テハ、一般ニ討論サレタリ。ドクトル、ベルンエーム及ドクトル、ジョーパールガ新製劑ヲ『完全ナル藥品』ト云ヒタル事ニハ疑ヲ挿ム者アリタレドモ、後日ノ報道ヲ俟テ、確定議ヲ爲ス事トナレリ。

▲注射法

結核治療上注射法ヲ行ヒ、之ニ由テ直接病原菌ニ作用セシメ、又ハ血液ノ性狀ヲ變セシメテ間接ニ之ニ作用セシメントセシハ、故コソホ教授ノ創意ナリ。即一八九〇年ノ『ツベルクリン』ト稱スル藥品ヲ始メトス。不幸ニシテ豫言ハ適中セザリキ。用量ノ過多(後日之ヲ知ルニ至レリ)ナリシモ、不奏効ノ一因ナリシナランカ、兎ニ角其研究ヲ遲滞セシムルニ至レリ。

▲サー、アルムローズ、ライトノ法

サー、アルムローズ、ライトハ『バクテリア』ノ純培養ヲ殺菌シテ血中ニ注入スル時ハ、同種ノ生活セル細菌ヲ撲殺スル能力ノ増加スル事ヲ發見セリ。氏ハ此増加ヲ以テ血中ニ常在セル對抗物質ノ増加ニ歸納セリ。語ヲ換ヘテ云ヘバ、對抗物質ハ恆ニ血中ニ現存スレドモ少量ニシテ、侵入セル毒敵ヲ殺スニ足ラズ。注射ニ由テ此物質ヲ増加スト云ヘルナリ。氏ハ此抗物質ニ『チアソニン』ナル名ヲ下セリ。而シテ或ル患者ガ、或ル時期ニ保有セル『チアソニン』ノ量ヲ略知スル方法ヲ案出シテ之ヲ『チアソニンインデックス』ト稱セリ。氏ハ此方法ニ由リテ、數年ノ間ニ、多數ノ結核症ヲ治療セリ。此方法ハ、内科ニモ應用シ得ベキナレド、氏ガ試ミシハ概テ外科ノ者ナリキ關節結核、腺結核、皮膚結核ノ類ニシテ、肺結核ハ少數ナリキ。關節ニ來ル結核菌ハ、概シテ一定ノ範圍内ニ靜息シ、他ヨリ衝動サル、ニ非ザレバ、血中ニ來ラザル者トス。依テ氏ハ先ズ撲殺セル結核菌ヲ注入シテ、血液ノ『チアソニンインデックス』ヲ増加セシメ、一定程度ニ達スルニ及ン

デ、關節内ノ菌ヲ血中ニ移行セシメ、之ヲ殺サシムル事トシ、此法ヲ反覆シテ終ニ全治ノ目的ヲ達シタリ。此方法ハ自然ノ豫防法ヲ人工的ニ増加セシムル者ニシテ、單ニ結核ニ有効ナルノミニアラズ、他ノ病ニモ應用シ得ベシ他病ニ合併シテ疼痛炎症及化膿ヲ起サシムル連鎖菌葡萄菌ニモ用ヒ得又瘡腫ニモ行フ事ヲ得ベシ放射能作性「メントール」沃度ニ關シテ、吾人カ聞得シ所ニテハ、ライトノ死菌應用法ト異ナリ、血中ノ抗菌質ヲ増加スルニアラズシテ、直接病原菌ヲ毒殺スル者ノ如シ。果シテ然リトスレバ、諸種ノ接種法ニ由レル防禦力ヨリモ、寧ロ「六百六號」ノ殺菌ニ於ケル効能ニ近キ者ノ如シ。サー、アルムロース、ライトノ研究ハジエンナーノ事業ヲ理解シ、其原理ヲ確知セシメシ者ナリトス。

▲病院醫師ノ批評

龍動市ノ或ル主ナル胸病院ノ古參醫ハ、昨日「タイムズ」ノ代表者ニ對シ、新療法ハ頗ル疑問ナル旨ヲ述ベタリ。氏ノ説ニハ同市ノ主ナル藥學者ノ一名モ同意ヲ表セリ。

彼曰ク、「ペプトン」化沃度トハ、未知ノ品ニシテ、全然存在シ難キ品ナリ。沃度ガ蛋白質鹽基ト抱合セル事ハアリ。現時用ヒラレツツアリ。此者ガ消化サレ、即チ「ペプトン」化サレテ沃度ト「ペプトン」トノ抱合物ガ生ズル事ハアリ得ベキ事ナリ。併シ此品ハ「ペプトン」化沃度ニ非ズ。

沃度ヲ内服スル事、即チ金屬性ノ沃度ヲ用フル事ハ、人ノ善知スル所ナリ。併シ之ヲ皮下注射ヲ爲ス事ハ實際不可能ノ事ナリ。尤モ沃度ト「ペプトン」化合物ヲ注射シ、「メントール」ニ由テ、疼痛ヲ減ズル事ハ、考ヘ得ベキ事ナリ。

鹽化「ラジニウムバリニウム」ト云フ品モ、未知ノ品ナリ。併シ「ウラニニウム」礦ヨリ、「ラジニウム」ヲ析出スルニ、鹽化「バリニウム」ヲ用フル事ハアリ。故ニ此方法ニ由リテ得タル「ラジニウム」鹽ノ事ナルヤモ知レズ。此品ナレバ、一瓦十五「シルリング」ニ過ギザレト、本眞ノ「ラジニウム」鹽

ナレバ、一瓦少クモ二十磅ノ價ヲ有スベシ。予ノ疑ワシト思ヘルハ左ノ諸點ニアリ。

新法ハ既知ノ方法ヲ混合セシモノニテ必シモ結核ニ關スル者トハ云ヒ難シ。沃度ノ皮下注射、「ペプトン」他沃度ノ應用、放射能作性物質ノ皮下注射是ナリ。何故ニ是等ノ方法ヲ研究シタル成績ヲ公ニセザルヤ。何故ニ肺結核ニ應用シ得ベキ特種ノ方法ノ發見サルル迄、諸種ノ階段ハ公ニサレザリシ歟。何故ニ放射能作性癌ニ試ミザルヤ。「ラジニウム」ノ應用ハ、目下研究サレアルニアラズヤ。何故ニハンガリニ於テ、發見サレシ事ヲ、巴里ニ於テ報道スルヤ。(醫海時報抄)

●「コカイン」及其他ノ知覺脫失藥檢査法

(E. H. Hankin, Analyst, 1911, 36.)

S. M. 生譯

アウテンライト(Antareith)ニ從ヘバ「コカイン」ニ對スル過「マンガン」酸鹽試驗法ハ甚ダ鋭敏ナリト稱スルモ此法ハ「コカイン」鹽ノ濃水溶液ヲ用井ザル可カラザルノ欠點アリ、依ツテ著者ハ此法ヲ改良シ「コカイン」ノ甚シキ僅微ノ量ヲ容易ニ檢出シ又「トロバコカイン」及ビ其他ノ類縁「コカイン」代用品ヨリ明カニ區別スルノ法ヲ發見シタリ

「コカイン」溶液ノ一滴及ビ過「マンガン」酸「カリウム」溶液ノ一滴ヲ共ニ硝子物體板上ニ置ケバ顯微鏡的檢査ヲ行フモ何等過「マンガン」酸「コカイン」ノ結晶ヲ生ゼズシテ唯暗赤色ノ粘着體ヲ生ズルコト往々之アリ、去レド若シ此二滴ヲ硝子棒ニテ摩擦混攪シ以テ赤色ノ凝體ヲ厭潰スレバ過「マンガン」酸「コカイン」ノ固有結晶ヲ生ズルノ機會チ多カラシム、又此結晶ノ生成ハ「コカイン」ノ稀釋ニヨリテ妨ゲラル、此障害ヲ除カンガ爲メ著者ハ過「マンガン」酸鹽ヲ加フルニ先ダチニ「アンモニア」ヲ加ヘテ「コカイン」ヲ沈

濃セント試ミタリ。然ルニ此法ハ其結果良好ニシテ微量ヲ用井テ試験スル際殊ニ然リトス。此試験法ノ鋭敏ハ「アンモニア」ノ代リニ「プロオム」水ヲ用井ルニヨリテ増進セラル、即チ「コカイン」ノ痕跡ヲ取り物體板上ニ置ケル「プロオム」ノ三分ノ一或ハ四分ノ一飽和水溶液ノ一小滴中ニ投ジ之ニ過「マンガ」酸鹽ノ酸性溶液（四％ノ過「マンガ」酸「カリウム」及ビ三％ノ硫酸ヲ新ニ混和シタル溶液）一滴ヲ加ヘ此滴ヲ充分ニ混攪スレバ過「マンガ」酸「コカイン」ノ結晶徐々ニ析出ス。

著者ハ他ノ「コカイン」代用品ニ於ケル過「マンガ」酸鹽ノ作用ヲ試ミルニ際シ其改良試験法ヲ發見シタリ、「スコポラミン」ハ過「マンガ」酸鹽ノ稀薄溶液ニヨリテ油狀ノ赤色滴ヲ生ジタルモ過「マンガ」酸鹽ノ濃液ヲ用井テ屢々過「マンガ」酸「スコポラミン」ノ結晶ヲ生ジタリ、著者ハ之ニヨリテ一道ノ光明ヲ得テ過「マンガ」酸鹽ノ濃液一滴ヲ物體板上ニ擴ゲ之ヲ乾燥シテ過「マンガ」酸鹽薄膜ヲ製シ之ヲ「コカイン」ニ限ラズ他ノ代用品ノ試験ニモ應用シタリ、若シ「アリピン」(Atropin)、「トロパコカイン」或ハ「スコポラミン」ノ溶液一滴ヲ過「マンガ」酸鹽薄膜上ニ加ヘ然ル後硝子蓋板ヲ以テ之ヲ覆ヒ顯微鏡下ニ檢スレバ此等過「マンガ」酸鹽ノ特異ノ結晶ヲ認メ得ベシ然ルニ此法ヲ「コカイン」ニ應用スルモ一般ニ結晶ヲ生ゼズシテ油狀ノ赤滴ヲ生ズルノミ、依テ著者ハ或無感應ノ鹽ヲ加ヘテ過「マンガ」酸鹽ノ作用ヲ遲滯セシメ或ハ之ヲ緩和セント試ミ明瞭ノ飽和液若シクハ半飽和液ヲ用エテ成功シタリ、若シ「コカイン」ノ痕跡ヲ明瞭飽和液ニ溶解シ此溶液ノ一小滴ヲ過「マンガ」酸鹽薄膜上ニ置キ蓋板ヲ以テ之ヲ覆ヒ鏡檢スレバ一二分時内ニハ過「マンガ」酸「コカイン」ノ影シキ結晶ヲ生ズ、此方法ハ頗ル鋭敏確實ニシテ且ツ操作容易ナリトス。

過「マンガ」ノ結晶ハ石竹紅色ヲ呈シ其單晶ハ殆ド正方ノ板狀ヲ爲ス、而シテ晶圍ハ常ニ直角ノ刻線ヲ有ス、乳酸「コカイン」ヲ檢スルニハ「アンモニア」ヲ以テ「アルカリ」性ト爲シ然ル後「エーテル」ヲ以テ振盪スベシ茲ニ

得ル所ノ「エーテル」液ハ之ヲ分取シ明瞭溶液ノ少量ヲ以テ振盪スレバ「コカイン」ハ明瞭液ヘ移溶スルヲ以テ之ヲ過「マンガ」酸鹽薄膜ニ應用スルコトヲ得ベシ。

「アリピン」ハ過「マンガ」酸鹽薄膜上ニ最モヨク結晶ヲ形成ス、若シ「アリピン」ヲ水ニ溶解スレバ其結晶ハ最モ容易ク得ラル可シ、又「アリピン」ヲ「プロオムカリウム」ノ濃溶液ニ溶解スレバ容易ニ結晶ヲ形成スルモ「コカイン」ハ然ラズ、而シテ過「マンガ」酸「アルピン」ノ結晶ハ淡石竹紅色ニシテ不整ニ分枝シタル晶圍或ハ狹長ナル枝晶又ハ鹹晶ヲ爲ス、「アリピン」ハ明瞭溶液ニ溶解スレバ過「マンガ」酸鹽結晶ヲ生ジ易カラズ。

「トロパコカイン」ハ他ノ「コカイン」代用品ニ比スレバ結晶ヲ生ジ易シ、若シ「トロパコカイン」ノ微量ヲ明瞭飽和溶液ニ溶解シ之ヲ過「マンガ」酸鹽薄膜上ニ置クバ帶紅紫色ノ晶圍ヲ生ズ、此晶圍ハ常ニ彎曲シテ羽毛狀或ハ羊齒狀ヲ呈ス、若シ「トロパコカイン」ノ稀薄水溶液ノ一滴ニ稀薄過「マンガ」酸鹽ノ一滴ヲ混ズレバ單獨ノ結晶又ハ稍小ナル晶圍ヲ生ズ、其形體ハ雜多ニシテ不整ナリ、時ニ或ハ長方形ニシテ、微ニ彎曲セル邊ヲ有スル結晶ヲ生ズ。

「スコポラミン」ノ過「マンガ」酸鹽ハ前記ノ各種ヨリハ之ヲ得ルコト容易ナラズ、之ヲ得ルニハ濃水溶液及ビ過「マンガ」酸鹽薄膜ヲ用井ルコト肝要ナリ、其溶液稀薄ナラバ唯粒狀ノ沈澱或ハ油狀滴ヲ生ズルコト必定ナリ結晶ハ常ニ暗赤色ヲ呈シ其形ハ多様ナリ、時トシテハ兩端尖レル稜柱狀ヲ爲シ不整ナル六面體ノ觀ヲ呈スルコトアリ、或ハ一端尖リ一端然ラザル稜柱體ヲ爲スコトアリ、其小ナル結晶ハ不整ナル長方形ヲ有スルコトアリ、大ナル晶圍ハ之ヲ見ルコト稀ナリ。

サボレッチ(Savoy)ノ「プロオム」水試験法ニシテ著者ノ行フタル成績ト一致シタル反應ハ左ノ如シ。

(一)コカイン、スコポラミン、ストブリン(Stovain)、ノウカイン(Novoa-

(can) ハ黄色ノ沈澱ヲ生ジ暖ムレバ溶解ス

(二)「ベタ、オイカイン」ハ黄色ノ沈澱ヲ生ジ暖ムレバ一部溶解スルモ煮沸スレバ白色沈澱トナリテ再ビ析出ス

(三)「ニルブニン」(Nirubin) ハ黄色ノ沈澱ヲ生ジ暖ムレバ溶解ス、此時液ハ帶赤色ヲ呈シ佳快ナル芳香ヲ放ツ

(四)「ホロカイン」(Holocain) ニ就キテハサボレツチハ記載スル所ナカリシモ著者ハ「プロオム」水ニヨリテ黄色沈澱ヲ生ジ此沈澱ハ煮沸ニヨリテ溶解シ液ハ石竹紅色ヲ帶ビタル蛋白石濁ヲ呈スルコトヲ發見シタリ
茲ニ掲ゲタル「ベタ、オイカイン、ストブリン、ノウカイン」及ビ「ニルブニン」等ハ過「マンガン」酸鹽ニテハ結晶ヲ生ズルコトナシ(藥石新報抄)

●新藥「フアゴール」

東京醫科大學藥物學教授醫學士高橋順太郎氏ハ去月二十日東京醫學會ニ於テ其ノ創製ニ係ル「クレオソート」新劑「フアゴール」ニ就キ大要左ノ如ク演說セラレタル由

「クレオソート」ハ殺菌ノ力強ク殊ニ結核菌ヲ少量ニテ撲滅シ又消化ヲ促進スルノ作用アリ、ソレ故ニ早クヨリ醫藥用ニ供セラレタレドモ而カモ本品ハ液體ニシテ左ノ副作用アリ

(一)腐蝕性アリテ局所(消化器官)ノ粘膜炎ヲ侵シ又其刺戟作用ノ爲メニ發病ヲ來スコトアリ

(二)不快アル臭味ヲ有ス

(三)中毒作用 多量ニ用フル時ハ神經中樞ニ働キテ危險症狀ヲ惹起ス

サレバ「クレオソート」ソノモノニテハ應用ニ便ナラザルガ爲メ其有効成分ナル「グアヤコール」ヲ用フルニ至リシモ是亦其副作用「クレオソート」ト多ク異ナラズ、當時子シツキユ氏が「サリチール」酸ニ「フェノール」ヲ作用セ

シメテ「サロール」ヲ得タリシヨリ吾人之ニ做フテ炭酸「クレオソート」乃至炭酸「グアヤコール」等ノ製品ヲ製出シ爾來無數ノ誘導體坊間ニ出デ何レモ「クレオソート」ノ代用トシテ提供セラレタリ今茲ニ述ベントスル「フアゴール」モ亦其一ニシテ「クレオソート」ニ定ノ温チ與ヘ之ニ「フオルマリ」ヲ作用セシメテ得タル物質ナリ。予ハ假リニ之ヲ「フアゴール」(Fago)ト命名セリ

本品ハ「クレオソート」ノ「メチレン」化合物ニシテ白色ノ結晶性粉末始ド無臭無味、水ニ溶解セズ、「アルコホル」、「エーテル」、「クロ、フォルム」等ニハ溶解ス

本品ノ「アルコホル」溶液ニ過「クロール」鐵ヲ加フル時ハ綠色ヲ呈ス試験「ペフシン」○・五瓦ヲ百ノ水ニ溶解シ之ニ鹽酸○・五ヲ加ヘタルモノ

ニ本品一瓦ヲ入レ三十七度ニ於テ二十四時放置シタル後「エーテル」ヲ加ヘテ振盪シ尙ホ稀薄ナル炭酸「アルカリ」溶液ニテ振盪シ後「エーテル」分ヲ取り「クレオソート」ノ反應ヲ檢スルニ其反應ヲ見ズ。又「パンクレアチン」○・九瓦炭酸「アルカリ」一・五瓦ヲ百ccノ水ニ溶解シ之ニ本品一○ヲ加ヘテ前記ノ如ク處置シタルニ明カニ「クレオソート」ノ反應アルヲ見ル。又酸性液ニ腐敗性ノ物質ヲ共ニ加ヘテ放置シタルニ多少分解セリ

次ニ動物試験ニヨリテ毒性ヲ檢シタルニ兔ニ二週間一瓦宛與ヘタルモノ等ノ障害ナク又五二〇〇瓦ノ體重ヲ有スル犬ニ最初ハ五瓦次ニ七瓦ヲ「アラビヤゴム」乳劑トシテ與ヘタルモ是亦何等ノ障害ヲ認メズ、故ニ自身ニ毎日二・〇一三〇宛ヲ服用シテ試ミ又胃ニ不快ノ症狀アル人ニ一日一五瓦宛與ヘタルニ何等ノ不快ヲ感ズルコトナク却テ食欲ヲ増進セシムルコトヲ經驗セリ

要之本品ハ「クレオソート」ノ製劑ナレドモ「クレオソート」及「グアヤコール」ニ比シ其液體ナラザルト、腐蝕性ナキト、臭味ナキト、毒性ナキトニ於テ大ニ優レリト爲ス、之ヲ内服スルモ健康ナル胃中ニハ溶解セズ、腸中

ニ至リテ始メテ徐々ニ其成分ニ分解シ一半ハ防腐作用ヲ呈スルト共ニ一半ハ徐々ニ吸收セラレテ奏効スルナリ、絶エテ副作用ナク又中毒症狀ヲ呈スルコトナシ

終ニ臨ンデ一言ス、スパイエル氏ノ「ブノイミン」モ亦「クレオゾート」ニ「フオルマリン」ヲ作用セシメテ得タル物質ナレドモ其製法秘密ナリ、之ヲ「フアゴール」ト比スルニ其色澤ニ於テ彼ハ褐赤色ナルモ之ハ類白色ヲ呈シ又其熔融點ニ於テ彼ハ百度以上ナルモ是ハ約九十度ナルノ相違アリ、サレバ兩品ハ恐ク同一物ナラザルベシ云々

學位請求論文審査ノ要旨

高 安 六 郎

● 實驗的腎臟炎ニ於ケル絲絨體ノ解剖的變化ト腎臟機能トノ關係

ニ就テ(獨文)

絲絨體腎臟炎ノ組織的變化ニ就テハ從來甚多數ノ學者ニヨリ詳説セラレタルニモ拘ラズ之ト腎臟機能殊ニ尿ノ分泌トノ關係ノ如キ臨牀上必要ナル問題ニ注意セルモノ極メテ稀ナリ固有ノ變化アル著者ナル絲絨體腎臟炎ニアリテ排尿作用ノ強ク害セラル、ハ言フ俟タズト雖絲絨體ノ滲出力不可能トナルニハ常ニ斯カル強度ノ變化ヲ要スルヤ又此變化ニヨリテ常ニ機能障礙ヲ説明シ得ベキヤニ就テハ未ダ何等ノ論述セラレタルモノナシ
從來ノ諸家ガ腎臟ノ水分分泌作用ニ關シテ論ズルヤ人ノ絲絨體腎臟炎ニ於ケル觀察ヲ基トシテ生前ノ尿量減少ヲ説明セルヲ以テ其比較ハ其精密ト謂フ可カラス且解剖上絲絨體腎臟炎ト考フヘカザルモノ、生前尿量ノ減少ヲ示セル腎臟炎ニ關シテ解釋ヲ缺ケリ蓋以上ノ如キ研究ナ人ニ試ムルコト

ハ其關係極メテ複雑ナル爲甚困難ニシテ寧ロ動物試驗ノ簡易ナルニ如カズ著者ハ諸種ノ毒物ヲ與ヘテ腎臟炎ヲ起サシメタル家兎腎臟ニ就キ其腎臟血管ト尿ノ分泌不全トノ關係ヲ検査シタルモノ六十例ヲ試驗後直ニ組織的検査ヲ行ヒ腎臟血管運動及排尿不全力如何ナル程度マデ絲絨體ニ於テ解剖的ニ證明セラレ得ルカヲ研究セリ

腎臟ハ試驗後直ニ適當ナル方法ニヨリ組織的検査ヲ施サレタリ腎臟全般ニ於ケル變化ヲ概略ナガラ定量的ニ知ランガ爲解剖的變化アリト認メタル絲絨體ノ數ヲ各切片ニ就キテ數ヘ其平均ヲ取レリ而シテ先ヅ機能試驗ニ於ケル手術一切ガ影響ナキヲ確メ次ニ機能ノ尋常ナルモノ少シク犯サレタルモノ、強ク害セラレタルモノ等ニ就キ比較セリ

検査ノ主眼ハ毛細血管及其内容物ノ關係絲絨體及其囊ノ核ノ状態ニアリ猶絲絨體變化ヲ數字ニヨリアラハサンガ爲ニ各絲絨體中ニ保タル、核ヲ數ヘ其平均ヲトレリ

機能の検査ハ血管ニノミ關スルヲ以テ細尿管ノ變化ニ就キテハ記述セザルコト、セリ

今検査ノ結果ヲ略述スレバ左ノ如シ

(一) 血管性腎臟炎

血管性腎臟炎トハ「カンタリガン」及砒素中毒ニヨリ起リ又、「ザフテリ」毒素ノ末期ニ起ル處ノモノニシテ細尿管ノ輕度ニ害セラル、ニ反シ腎臟血管擴張竝ニ收縮及利尿作用ノ消滅ヲ特徴トス

此種ニアリテハ機能障礙ノ増進ニ從ヒ絲絨體ノ充血アリ而シテ障礙既ニ強度トナルモノ解剖的變化ハ著シク僅少ナリ又機能不全極度ニ達セルモノ、多數ニハ多クノ絲絨體囊中僅微ノ滲出物ヲ認ルノミニシテ貧血、絲絨體核ノ増加無ク囊上皮細胞ノ脱落ハ尤強ク害セラレタル絲絨體ニ於テモ唯一二ノミ即全試驗ニ於テ人ノ絲絨體腎臟炎ニ見ラル、解剖的變化ノ多クハ何處ニモ認ムベカラス

細微ノ變化トシテハ絲絨體核ノ腫脹シテ著シク其容積ヲ増シタルモノノ機能障礙ノ輕重ト比例シテ其數ノ増減ヲ呈セリ次ニ絲絨體核係壁亦腫脹シ境界銳利ナラスシテ潤濁シ中毒經過及ビ度ニ從ヒ其度ヲ増減セリ

此二者ガ絲絨體及其上皮細胞ニ於ケル變化ノ主ナルモノニシテ機能障礙ト竝行シテ常ニ存併スルモノナリ要スルニ血管性腎臟炎即絲絨體腎臟炎ニアリテハ機能障礙其極ニ達スルモ解剖變化甚僅微ニシテ毛細血管又ハ尿管ノ門塞ハ必ズシモ機能障礙ノ原因タラサルコト明ナリ

人ノ絲絨體腎臟炎ニ於テ機能障礙ガ動物試驗ニ於ケルモノト根本的ニ他ノ方法ニテ起ルト考フレハ誠シカラス故ニ人ニアリテモ強キ機能障礙アルニモ拘ラズ僅微ナル解剖的變化ヲ呈スル絲絨體腎臟炎ノ一時期又ハ種類アリ得ベシ然ラバ即チ強度ノ解剖的變化ハ唯疾患ノ強度ナルヲ示セルモノト考フル方適當ナルヲ見ル

絲絨體核及縮係ノ變化ハ外見上細微ニシテ從來注意セルモノ甚少ケレドモ其不易ナル爲絲絨體腎臟炎ノ初期又ハ輕度ノモノ、診斷上價値ナシトセス唯機能障礙ニ向テ原因的意義ヲ有スルモノトスル能ハズ其原因トシテハ機能試驗ノ示ス如ク多分局處ノ血行障礙ヲ考フヘキナレドモ解剖的ニ之ヲ示スモノヲ見出ス能ハザリキ

(二) 尿管性腎臟炎

「クローム」昇汞「ウラーン」ニヨリ起ルモノニシテ尿管ノ破壞ガ主ナル變化ナリ
血管ハ長ク無害ニシテ不全ノ末期ニ至リ初メテ機能ヲ營ム血管障礙始マル時期ニハ尿管既ニ害セラル、ヲ以テ血管ハ續發的ニ犯サル、ト考フベキナリ

此種ニアリテモ絲絨體ノ解剖的變化極メテ僅微ニシテ擴張機能全ク止ミ利尿劑ニ對シ排泄皆無ノ時期ニアリテモ絲絨體ニハ一乃至四%ノ滲出然モボスナー氏ノ法ニヨリ辛ジテ證明セララル、極メテ輕度ノモノヲ見ルノ

ミ上皮細胞脫落モ唯一ニ止マリ充血ノ狀態ノ數何レトモ異常ヲ認ムル能ハズ即血管運動及排泄ノ著患ニ對シテ解剖的徵候ハ見出スベカラス細微ノ變化トシテハ血管性腎臟炎ニ於ケルガ如ク絲絨體核ノ變化ニシテ尿管性腎臟炎ノ末期ニ機能障礙ニ一致シテ常ニ見出サル「クローム」腎臟炎ニ尤著シ縮係壁ノ變化モ亦血管性ト同様ノ狀ヲ呈セリ然レドモ如上ノ變化ハ一般ニ血管性ニ於ケルカ如ク著明ナラズ而シテ機能障礙ハ比較的緩慢ニ増進シ著シキ解剖的變化ヲ起スニ十分ナル時ヲ有スルニ拘ラズ機能障礙ヲ解剖上確實ニ證明シ得ザルハ注意スベキコトナリ

人ニ於ケル昇汞中毒腎臟炎ハ家兎ニ於ケルガ如ク絲絨體ノ變化極メテ僅微ナリ中毒ノ度強キトキ排泄閉止ヲ起スコトハ臨牀上人ノ知ル所ニシテ是亦動物試驗ト相似タリ即此場合ニ於テモ血管ノ強キ障礙ヲ解剖上認識スル能ハザルナリ

兎ニ角人ニ於テ機能及解剖上變化ヲ比較シテ如上ノ問題ヲ尙深ク研究スルコトハ必要ナリ然レドモ人ニ於テハ腎臟血管ノ機能ヲ知ルコト甚困難ナリ又其解剖的變化モ殊ニ急性腎臟炎ニ於テ常ニ見出シ得ルヤハ疑問ナリト考ヘラル勿論上述絲絨體核及縮係壁ニ於ケルガ如キ微細ノ變化ヲ標準トシ數量的ニ考究スルトキハ必ズ從來ヨリ多ク證明サレ得ルナルベシ然レドモ此際管ニテ數ノ絲絨體ニ變化アルトキノミナラス又唯二三ニ此ヲ見ル時ニ當リテ既ニ腎臟血管ノ緊要ナル機能ガ既ニ障礙ヲ蒙ルルコト上述試驗ニ明ナレバ多大ノ注意ヲ拂ハサルベカラズ

● 大動脈中膜炎竝ニ其動脈瘤發生トノ關係(邦文)

三十三歳ノ男子ノ大動脈瘤破裂ニヨリ死セシ一例ニ於テ動脈瘤ヲ發生セシメタル大動脈壁ノ變化ヲ追究セシニ壁ハ高度ノ硬化ヲ現ハシ手拳大ノ破裂セル動脈瘤ノ外ニ尙動脈瘤發生ノ初期トモ見做シ得ベキ小ニシテ淺キ膨隆

ナ有セリ

組織的變化ハ中膜炎其主ナルモノニシテ内膜ノ肥厚ハ寧ロ續發性ナリ即通常ノ老人硬化性動脈内膜炎トハ其趣チ異ニス初期小動脈瘤壁ニ顯著ナル如ク通常中膜内ノ外層尤著シク且早ク犯サレ漸々展伸シテ終ニ動脈瘤チ形成ス彈力纖維ハ漸次其大サ減少シ終ニ消滅スルニ至ル

興味深キハ肥厚セル大動脈壁ニ於テ境界略ホ銳利ナル一小膨隆部アリ之ガ管腔ニ向テ膨出シ恰モ反對ノ方向ニ小動脈瘤チ形成セル如キ觀チ呈セルコトナリ其壁ハ他ノ動脈瘤ニ於ケルト同シ關係チ示シ中膜炎尤著シ境界部ニアリテハ中膜ノ彈力纖維著シク屈曲シ外膜及内膜ハ甚シク肥厚セリ

之ニヨリ大動脈中膜炎ハ通常大動脈瘤チノミ形成スルモノニアラズシテ時ニハ壁チシテ或一定ノ關係ノ下ニ反對ノ方向ニ膨隆セシムルコトアルチ知り得タリ

黴毒ハ生前既往症ニ於テモ死後剖檢上ニ於テモ證明セラレザリシニ拘ハラズ大動脈ノ變化ハ比較的若年ニ動脈瘤チ發生セシムル所謂黴毒性大動脈中膜炎ノ像チ示シタリキ

●所謂傳染病性動脈内膜炎竝儂麻質斯性惡心内膜炎ニ於ケル結節構成ニ就テ(獨文)

八歳ノ少女急性關節儂麻斯ニ罹リテヨリ約三箇月ヲ經心臓内膜炎ニテ斃レ剖檢上僧帽瓣大動脈瓣三尖瓣ノ疣狀心内膜炎左右心室ノ肥大擴張竝ニ輕度ノ心外膜炎及心嚢水腫チ呈セリ

此心臓チクレール氏法ニ從ヒ連續切片チ作り檢査セシニ瓣膜ニ臨牀上ノ症狀ト一致セル再起性疣性(儂麻質斯性)心内膜炎チ形成セル外心筋ニ於テ甚強キ炎症チ呈シ殊ニ房室境界部ニ於テ顯著ナリ儂麻質斯性心筋炎ニ固有ナ

リト云フ所謂小結節ハ一般ニ著明ナラズ殊ニ房室境界ニ於テ然リ心尖ニ於テハ左右心室トモ其筋間結締織ニ於テ屢見出サル、細胞ノ聚族アリト雖、ガイベル氏ガ描寫セル如キ顯著ナル像トハ全ク異ナレリ此病竈ハ何等ノ順序無ク群集セル長卵形乃至紡錘形ノ大細胞ヨリナリ屢細織ナル突起ニヨリ相連結セルガ如シ核ハ大ニシテ中等度ニ染色シ又時ニ孤立セル巨大細胞アリ其核ハ不規則ニ中心ニ集合ス而シテ此細胞群ノ位置ハ血管ト密接ノ關係ナシ

斯ノ如キ性質竝ニ排列ハ寧ロロムベルグ、リツベルト、セルレンチン諸氏等ガ種々ノ心筋炎ニ於テ記載セル者ニ類シ、唯明カニ其印象ノ著シク且強キ點ニ於テ異ナルノミ即アシヨツフ、ガイベル氏小結節トロムベルグ氏等ノ記載セル變化トノ中間ニ一致ス

次ニ注目スベキハ心筋ノ小動脈ノ變化ナリトス心尖ニ於テ直徑五九乃至一八五ミチ有スル小動脈ノ管腔ガ粗粒不規則ノ構造ニテ中ニ内皮細胞型ノ多數ノ核チ包含セル組織新生物ニヨリ半月形乃至半圓形トナレリ中膜及外膜ハ尋常ニシテ管腔チ被フ細胞ハ常態ト等シク内皮細胞ナルガゾノ内ニ多數相聚合セル核チ有スル巨大細胞チ見ルコトアリ上述血管壁ノ肥厚ハ其長六〇乃至二七〇ミチニテ其兩端ハ可ナリニ急激ニ正規ノ管腔ニ移行セリ前述ノ硬結形成トハ的確ナル關係チ認ムル能ハズ此變化ハ佛人が肥厚性動脈内膜炎トシテ記載セルモノニ酷似セリ然レドモ吾人ノ例ニ於テハ心尖ノ如キ炎症症狀ノ極メテ僅微ナル場所ニ於テ血管ノ變化チ認メ又其壁自個ニ於テモ何處ニモ炎ノ發生チ示ス病變チ證明スル能ハザルナリ尙十分ナル研鑽ニヨリ心尖部ノ一局ニ於テ屈曲シ同時ニ狹小セル一小動脈ニ長サ七五ミチノ再通ノ途ニ在ル血栓チ發見セリ之トカノ遠心性動脈狹窄ト比較スルトキハ雙方同一ノモノニシテ唯其時機チ異ニスルモノト見做シ得ベク即再通性血栓ニシテ纖維性物質ノ形チナセル殘餘ガ一局部ノ血管狹窄チ發生シタルモノナリ

此血栓ハ恐ラク眞ノ血栓ニアラズシテ却テ多發性栓塞ニ基因スルモノナラシ何トナレバ瓣膜ニ著シキ炎症沈著物アリ故ニ栓塞ノ材料ハ十分在リ又動脈閉塞ノ兩端急ニ移行シ又動脈ノ屈曲及突如狹小ヲ來ス部位ニ於テ杜絶スルコトモ栓塞說ノ論據點ナリ是ニ由テ之ヲ觀レバ動脈變化ハ肥厚性動脈内膜炎ヲ意味セズ反テ續發管腔再通ヲ伴ヘル小栓塞ノ殘遺ト見做シテ可ナルベシ

●健康尿ノ左轉性ニ就テ (獨文)

二十四時間ノ健康尿ヲ通常ノ麥酒醱酵素ニテ醱酵セシメタル後動物炭ヲ用ヒテ之ヲ透明ニシテ分極裝置ニテ其左轉性ヲ檢セリ検査ハ各三乃至五回反復シ其平均數ヲ比較セリ
今百種ノ健康尿ニ就テ試驗セル結果ヲ述レバ百種中九十三ハ左轉性ヲ有シ
○・〇一乃至○・〇四度尤多ク全數ノ平均ハ左轉○・〇四六度ヲ算セリ○・一度以上ノ數ヲ得タルハ稀ニシテ○・二度以上ハ僅ニ一回アリシノミ此ノ數ヨリモ萬度ナルトキハ健康尿ト認メ難ク特別ノ研究ヲ要ス之ヲ要スルニ尤屢々遭遇スル左轉ノ度ハ極メテ僅少ニシテ臨牀上殊ニ糖ノ計算ニ於テ之ヲ度外視スルモ大ナル誤謬ヲ來スコトナシ

●腎臟炎浮腫ニ就テ (獨文)

浮腫ヲ有スル人ニ於ケル腎臟炎ノ如ク特發性ニ浮腫ヲ來ス中毒性腎臟炎ハ唯一ノ「ウラー」腎臟炎アルノミ而シテ人ニアリテモ動物試驗ニアリテモ浮腫成立ノ原因ノ何ニアルカハ未ダ明ナラザルヲ以テ之ヲ伴フ腎臟炎ト然ラザルモノヲ比較シ腎臟障礙ノ狀態ニ特別ノ條件存スルアリテ是ガ浮腫成

高安六郎
シュライエル 共著
ヘーデインゲル

立ト或關係ヲ示セルヤ否ヤヲ研究スルハ殊ニ必要ナリ
砒素「カンタリヤン」ヨリ起ル所謂血管性腎臟炎及昇汞「クローム」ヨリ起ル尿管性腎臟炎立ニ此二種ノ中間ニ位スル「ヂフテリ」腎臟炎ニ於テハ「ウラー」腎臟炎ト同條件ノ下ニ置クモ水腫ヲ來スコトナシ故ニ若シ腎臟ノ狀態ガ浮腫成立ニ影響ヲ有ストセバ必ズ「ウラー」中毒作用ト其他ノモノトノ間ニ相違ノ點ナカルベカラズ

今二%ノ硝酸「ウラー」ノ種々ノ量ヲ秩序ノ二家兔ノ皮下ニ注射シ種々ノ時期ヲ撰ビテ左腎ノ「オンコメトリ」ヲ行ヒ第一ニ知覺刺戟次ニ「アドレナリン」ニテ血管收縮作用ヲ見次ニ食鹽及「コフエイン」注射ニヨリ血管ノ擴張竝ニ之ヲ生理的ノ強キ排尿作用ヲ檢シ猶時ニハ脫血ノ影響ヲモ檢シテ腎臟ノ機能ヲ確ムルニ其初期及末期ハ定型の尿管性腎臟炎ノ代表者タル「クローム」及昇汞中毒ニ見ルト全ク相同シ唯是等ト全相違セル中間期ナリ是ハ尿管性ニ於テノミナラズ又血管性ニ於テモ遭遇セラレタルコトナク唯一回「ヂフテリ」腎臟炎ニ見ラレタルノミ其特異ノ現象ハ收縮及擴張機能ノ全然健康ト異ナルナキニ反シ食鹽注射ニ當リ排尿豫期ノ強ク如盛ナラズ却テ突如トシテ閉止スルニアリ

又七回ノ試驗ニ於テ五%ノ尿索葡萄糖硫酸曹達ノ注射ヲ試ミシニ其以前ニ猶尋常ナリシ排尿作用ノ閉止ヲ來スコト食鹽ニ同シ又水ノ影響ヲ見「コフエイン」ノミハ排尿閉止ヲ起スコトナカリキ而シテ此現象ノ尤著明ナルハ強度ノ「トーマス」ヲ有スル食鹽注入時ナリ

排尿不全ノ原因

此原因ヲ腎臟以外ノ動機ニ求メンニ先皮膚及腎臟以外ノ他ノ血管ニ於ケル浸出力ノ増加ヲ考ヘザルベカラズ然レドモ此時期ニアリテコロンハイム及リヒトハイムノ方法ニヨリ多量ノ液體ヲ注入スルモ水腫ヲ起サズ次ニ血液ト組織トノ間ニ起ル他ノ作用殊ニ食鹽ノ殘留ニヨリ水分ノ體內ニ抑遏セラ

ル、爲トセンカ尿ノ排泄ハ中間時期ノ初迄尋常ナレハ少クトモ著シキ食鹽
停滯アリ得ベカラズ之ニ五%ノ食鹽水一〇〇立方仙迷ヲ注入シテ強度ノ
食鹽停滯ヲ起シ得トハ考ヘ難ク又〇・五瓦ノ代ニ〇・〇三瓦ノ食鹽ヲ用ウル
モ同様ナル排泄不全ヲ來スヲ見レバ此說明ノ當チ得ザルチ知ルベシ
要スルニ腎臟外ノ動機ハ排泄關係ヲ說明セズ故ニ寧ロ之ヲ腎臟自個ニ求ム
ベキナリ

排尿不全狀態ノ浮腫成立ニ對スル關係

「ウラーン」〇・〇二瓦ヲ家兔(二〇〇〇・〇五)ノ皮下ニ注射シ其十二時間ニ
於ケル尿量ヲ檢スルニ五%ノ食鹽水五〇〇立方仙迷ヲ日々胃中ニ注入シ
タルモノハ尿管性腎臟炎ニ固有ナル初期ノ多尿著シク増加シ上述ノ不全時
機ニ於テハ突然殆全キ排泄閉止ヲ來ス之ニ反シテ乾燥食餌ヲ與ヘタルモノ
ハ其尿量攝取セル液量ニ比シ全ク漸進的ニ減少シ之ヲ他ノ動物ガ突然其尿
量ヲ減少セシムル日ニ比シ却テ多量ノ排泄アリ剖檢上彼ニハ四五〇立方
仙迷ノ腹水八〇立方仙迷ノ胸水竝ニ腹壁及頭部ノ輕度ノ浮腫ヲ認ムレドモ
是ニハ何等ノ水腫ナカリキ蓋過度ニ攝取シタル動物ニテハ其要求過度トナ
リ之ニ應ズルコト能ハズ爲ニ排泄閉止急ニ起リ同時ニ水腫ヲ生ズレドモ乾
燥食餌ノ場合ハ腎臟機能ノ不全ヲ起ス機會ナク障礙ノ起ル迄僅少ノ水量ニ
適應シテ分泌セラル、故ナリ而シテ他ノ尿管性腎臟炎ト同様ノ經過ヲトリ
水腫ヲ生ゼザルナリ又「ウラーン」ノ量多キトキハ血管機能尋常ニシテ少シ
ク多尿アル時期ヨリ直ニ擴張作用並排泄ノ閉止時期ニ移リ不全狀態ハ全ク
無キカ或ハ唯其痕跡ヲ示スノミ而シテカ、ル場合ハ極メテ稀ニ水腫ヲ來ス
モノナリ其外強度ノ不全ハ濃厚ノ食鹽液ヲ注入時ニ起ルコト及「コフエイン」
ガ不全ノ度ヲ減少セシムレドモ全然之ヲ防止スル能ハズシテ尿量モ普通ノ
如ク多カフズ血管障礙ト共ニ其效力消失スル等竝ニ人ニ於テ慢性實質性腎
臟炎ノ浮腫ヲ伴フ或ルモノ、剖檢上專尿管ノ疾患ニシテ水及食鹽排泄不全
ヲ臨牀上ニ現ハシ「ウラーン」腎臟炎ト全ク相似タルコト等ヲ綜合スルトキ

ハ上述中間期ニ於ケル如キ障礙ハ浮腫成立上ニ密接ナル關係アルコトヲ知
ルベシ

細尿管上皮細胞ノ障礙ガ浮腫ノ原因タルヤ

「ウラーン」腎臟炎ニアリテハ剖檢上專尿管細尿管上皮細胞ノ變化アリ故ニレ
ヲ浮腫成立ノ原因トセンカ之レ尿水ガ其大部分絲絨體ニヨリ排出セラルテ
生理上定説ニ抵觸スル所ナリ又人ニ於テ猩紅熱腎臟炎ハ浮腫ヲ有スル腎
臟炎ノ適例ナルガ剖檢上專絲絨體ノ疾患ヲ示シ「ヤフテリ」及ビ昇赤中毒
腎臟炎ハ何レモ強キ尿管ノ變化ヲ來セドモ殆ト全浮腫ヲ伴フコトナシ動物
試驗ニアリテハ單ニ解剖上ヨリ見ルトキハ尿管變化ト浮腫成立ト關係アル
ガ如シト雖ドモ吾人ノ成績ニヨレバ之ヲ他ノ方面ヨリ解釋スルコトノ適當
ナルチ見タリ即昇赤水及「クローム」腎臟炎ノ末期ニ於テ「ウラーン」ニ於ケ
ルガ如ク腎臟血管ノ變化アレドモ解剖上之ヲ認識スル能ハズ故ニ腎臟血管
ノ解剖的變化ハ其機能の健否ヲ確定スル能ハズ從テ血管ノ機能検査ニヨリ
其狀態ヲ究ムルコト必要ナリ今「クローム」昇赤ト「ウラーン」トヲ比スルニ
管ニ解剖上變化ノミナラズ食鹽排泄ノ障礙ハ雙方等シト雖ドモ是ニアリテ
彼ニ存セザルモノハ上述ノ如ク過度ノ要求ニ對シテ排泄不全ノ夙ニ起ルコ
トニシテ「クローム」昇赤ニテハ此場合ニ利尿の刺激ニ應ジテ多尿ヲ起スモ
ノナリ
之ニ因テ見レバ細尿管ノ障礙ハ排泄不全ト直接關係ナク從テ浮腫成立トノ
關係ヲモ認マ難シ寧其原因ハ腎臟血管ノ變化ニシテ運動作用ガ依然タルニ
滲出不能トナルハ絲絨體上皮細胞ノ變化ト考フベキナリ勿論強キ尿管變化
ガ腎臟ノ作用ニ全ク無關係ニハ非ザルモ尿管性腎臟炎ニ於テ血管ノ機能排
泄作用尋常ナルトキハ決シテ浮腫ヲ來スコトナキハ確ナリ
「ウラーン」腎臟炎ニ於テ血管ノ解剖的變化ハ上述ノ如ク之ヲ認識スルコト
困難ナレドモ「ウラーン」氏ハ人ノ腎臟炎ニ於テ浮腫ト絲絨體ニ於ケル強度
ノ解剖的變化トノ關係ヲ發見セリ之亦吾人ノ意見ヲ補助スルモノナリ

上述腎臟障礙ノ結果竝浮腫成立ニ關シ
猶他ノ原因ノ有無

上述ノ不全ノ結果トシテ水分竝食鹽ノ強キ停滯アリ之ガ浮腫ノ成立ニ十分ナル條件ヲ得ルヤ否ヤヲ檢スル爲ニ排尿不全ノ時期ニ於テ攝氏四〇・〇度ノ溫度ニ保タシメタル〇・九%ノ食鹽水ヲ徐々ニ頓靜脈ヨリ注入セシニ十四回ノ試驗ニ於テ腎臟容積ハ液ノ注入ニ從ヒ膨大シ排尿ハ殆閉止セリ而シテ體重ノ七〇・〇%ニ一致スル量ヲ注入セシモ此時期ニアリテハ浮腫ヲ起サバリキ然モ注入量ト尿量トヲ比スルニ水及食鹽非常ナル停滯ヲ示セリ即水及食鹽ノ停滯ノミニテハ浮腫ノ原因タル能ハザルヲ知ル臨牀上中毒ノ末期ニ於テ多ク水腫ノ發生ヲ見ルヲ以テ中毒後四乃至五日ヲ經タルモノニ同様ノ方法ヲ試ミシニ四回ノ試驗盡ク強キ全身浮腫ヲ起セリ即中間期ニアリテハ血中ニ水分過多ナルモ皮膚ノ血管ハ滲出性ヲ有セズ末期ニハ之ニ反シテ滲出容易トナル

乾燥食餌ヲ與ヘタル動物ニアリテモ同様ノ方法ニテ浮腫ヲ生ズ故ニ皮膚血管ノ滲出性ハ血液中ノ水分ノ多寡ニ關係ナシ腎臟血管ノ運動ガ尋常ナル間ハ皮膚血管ノ滲出性ヲ認メス腎臟血管ノ障礙ヲ起ストキニ初メテ之ヲ生ズ即浮腫ノ成立ニハ腎臟障礙ニ因スル水及食鹽ノ停滯ノ外ニ皮膚血管ノ變化ヲ要スルコト明ナリ

此皮膚血管變化ノ原因ニ就テハ確タル説明ヲ下ス能ハズ單ニ水及食鹽ノ停滯ニテハ解スベカラズ或ハ他停滯物ニ因スルヤモ計リ難ケレドモ要スルニ「ウラーシ」中毒ノ結果ナルガ如シ

結 論

「ウラーシ」腎臟炎ハ其初期竝末期ニ於テ他ノ尿管性腎臟炎ト同シケレドモ之ト異ナルハ其中間期ニアリ即他ノモノニアリテ尙多尿ヲ起シ得ルモ同條件ノ下ニ「ウラーシ」腎臟ハ其排尿突然閉止ス食鹽注入ノトキ尤著シク又水ト極少量ノ食鹽竝他ノ利尿劑例ヘバ尿素葡萄糖ノ如キモ同シ障礙ヲ起ス獨

リ「コフエイン」ハ此障礙ヲ減少セシム此障礙ノ原因ハ腎臟自己ニ求ムベク而シテ細尿管ノ解剖的變化ハ之ヲ説明シ得ズ寧ロ解剖上ニ發見シ得ザル腎臟機能ノ強キ障礙ニ歸スベシ而シテ之ガ浮腫形成ニ甚密ナル關係ヲ有スレドモ是ノミニテ未ダ浮腫ヲ形成セス皮膚血管ノ滲出性ヲ有スルニ至リ始メテ然ルヲ得ルナリ即浮腫形成ノ要件ハ二ナリ

- (一) 腎臟障礙ノ結果トシテ來ル強キ食鹽竝水ノ停滯
- (二) 皮膚血管ノ障礙之ナリ

* * * * *

孤 録

●一二濕疹療法ニ就テ

(皮膚科及泌尿器科雜誌第一一卷第五號)

笹岡芳名

其一 脂漏性濕疹ニ對スル「カイグホルム」軟膏ノ應用

患者 H、N、五十三歳ノ婦人、華族、四十四年二月六日初診
既往症 三年來頭部脂漏性濕疹ノ診斷ノ下ニ數多ノ醫治ヲ受ケ諸種ノ藥劑ヲ用井シモ癢痒全ク止ムニ至ラズ加之時々逆上スルノ氣味アリ、月經ハ尙ホ之ヲ見ルモ極メテ正調ナリト、便通一日一行軟便ナリト云フ
現症 頭部ヲ檢スルニ脂漏性濕疹幾ド快癒シ居ルモ尙ホ處々ニ潮紅面ヲ呈シ稀ニ上皮ノ落屑スルヲ見ル、而シテ浸出液ノ漏洩ハ之ヲ認メズ只自

覺症狀ニ據ツテ患部ニ癢痒アルヲ知ルノミ

處置及經過 則チ余ハ初メ此患者ニ向テ二〇%カルボール精ヲ以テ頭部
ヲ清拭シタルノ後硫黃軟膏、硫黃豚脂、ウヰルキンソン氏軟膏、爹兒膏
等ヲ塗擦シタルモ只一時的止痒スルノミニシテ常ニ翌日來リテテフル所
ノモノ幾ド前日ト異ナラズ、依テ試ニ一〇%「オイグホルム」軟膏ヲ極メ
テ薄ク擦入シタリ然ルニ現下ニ癢痒全ク止ミシノミナラズ翌日來診シ欣
然トシテ自ラ語ルラク多年癢痒ニ苦ミシ頭部ノ始メテ全快シタルヲ覺ユ
ト、即チ余ハ患者ニ本軟膏ノ五瓦ヲ與ヘテ萬一癢痒起リシ時ハ型ノ如ク
擦入スベシト命ジ更ニ一週日ヲ經テ來診スベキヲ命ゼリ既ニシテ一週日
ヲ經テ患者ノ來診シタルヲ以テ其症狀ヲ問フニ一回僅カニ癢痒ヲ感ジタ
ルモ軟膏擦入ニヨリテ癢痒全ク快癒セリト、爾來癢痒起ラバ來診スベシ
ト告ゲタルニ未ダ來診セズ傳聞スル所ニ據レバ患者全ク快癒シテ大ニ余
ヲ信セリト

抑々「オイグホルム」ハスビーゲル氏ノ創製ニ係ル一種ノ防腐藥ニシテ水ニ
不溶解ナル輕キ黃褐色無形ノ粉末ナリ余ガ軟膏トシタルモノハ其香氣宛然
「チヨコレート」ノ如シ、マタ本品ハ粉末劑トシテ亞鉛花、滑石各二〇〇
「オイグホルム」五〇トナシ一日數回散布スルモ亦良效ヲ奏スト云フ而シ
テ其適應症ハ鬮行疹、傳染性結痂疹、下疳、便毒、黴毒性潰瘍、癩性潰瘍
等ニモ散布、軟膏、泥膏等トシテ奏效スト云フ

其二 陰囊濕疹ニ對スル「ピチユール」精ノ應用

患者 五十二歳、吳服問屋主人、二月十日初診

既往症 昨年春以來陰囊ニ癢痒ヲ感シ數多ノ醫師ノ治療ヲ受ケ患者ノ記
憶ニ有スル藥劑即チウヰルキンソン氏軟膏、ウヰルソン氏軟膏、爹兒膏、
「クリサロビン」、トラウマチン、ツメノール、ウヰルソン、ツメノール
丁幾等ヲ用井テ一時大ニ輕快ヲ覺エシモ尙ホ時々癢痒ヲ感シ此癢痒タル
ヤ較々陳舊ニシテ不知不識ノ間ニ搔爬シテ目下ノ狀態ニ至ルト告ケ

(抄録)

現症 陰囊ヲ檢スルニ上皮僅ニ肥厚シ處々ニ帽針頭大ノ搔爬面ヲ視ルモ

糜爛スルニ至ラズ癢痒ハ夜間ニ於テ特ニ甚ク且ツ輕度ニ濕潤スルガ如
シ、檢尿スルニ蛋白及ビ糖分ノ痕跡ヲモ認マズ患者又酒、煙草等ヲ嗜マズ
處置及ビ經過 余ハ患者ノ既往症及ビ現症ヲ推察シ自家考案ノ「ピチユ
ール」精 10% Pitylen-Glycerin-Aether-Alkoholヲ創製シ筆ヲ以テ之
ヲ陰囊ニ塗布シタルニ、癢痒止ミ僅カニ刺戟痛ヲ感セシモ却テ爽快ナリ
ト曰ヘリ、則チ余ハ其後ノ症狀ヲ視ンガ爲メ三十分時間滞在ヲ命ゼシモ
癢痒幾ド忘レタルガ如シト云ヘリ依テ亞鉛花澱粉ヲ其上ニ散布シ翌日再
來スベキヲ命ジタルニ患者翌日再來シテ曰ク、昨夜ハ極メテ僅カニ癢痒
アリシノミニシテ又前日ノ比ニ非ズト即チ更ニ前法ヲ施シ尙ホ三十五ノ
本品ヲ與ヘテ一日一回塗布スルコトヲ命ジ二日ヲ經テ再來スベキコトヲ
命ゼシニ當日來診シテ癢痒再ビ起ラズ全ク快癒シタリト云ヘリ、即チ陰
囊ヲ檢スルニ表皮ノ肥厚輕快シ搔爬部全ク痕ヲ留メズ大ニ卓效有ルヲ認
メタリ

抑々本品ハドクトル、カール、ガン 氏ノ報告シタルモノニシテ木爹兒ヲ
調度ニ凝固シテ製出シ爹兒ト「ホルムアルデヒド」ト固キ結合物ニシテ帶黃
褐色ノ粉末ナリ、ガンツ氏ノ記載ニ據レバ「エーテル、アルコホルム、ク
ロホルム、アツエトン」及ビ「コロヂウム」等ニ容易ニ溶解スト稱スル
モ、余ノ實驗ニ照セバ其法ノ宜シキヲ得ザリシニヤ其孰ニモ溶解シ得ズ只
僅カニ「コロヂウム」ニノミ溶解シ得タリ、依テ余ハ「エーテル、グリ
リン、アルコホルム」ノ等分ノモノニ一〇〇乃至三〇〇%ニ溶解シテ塗
布セリ

適應症ハ急性及ビ慢性濕疹ニ最モ長ク、特ニ消炎的且ツ止痒的ニ作用シ落
屑ヲ防ギ爹兒膏ニ比較スルニ香氣大ニ爽快ナリ、之ヲ軟膏トスルニハ「ピ
チユール」一〇〇、滑石三〇〇、亞鉛華一〇〇、石松子一〇〇ト

(抄録)

●サルブールサンノ新證明法(豫報)

ヨット、アベリン

(Minch. med. Wochenschrift No. 19, 1911)

尿中ノ「サルブールサン」ヲ試験スルニハ、先ツ試験管内ニ「七—八立方」センチノ尿ヲ入レ之ニ稀鹽酸五—六滴ヲ加ヘテ酸性トナシ冷却シタル後「2%亞硝酸」ナトリウム」ノ溶液ヲ三—四滴加フヘシ、此尿ノ混液二—三滴ヲ「アルカリ」性ニシテ無色ノ「レゾルチン」溶液中ニ加フレバ直チニ鮮明ナル紅色ヲ呈スベシ、此ノ際若シ尿ノ混液ヲ注意シテ「レゾルチン」溶液内ニ加ヘテ濃盪セザレバ色彩殊ニ美麗ナリ次ニ此試験管ヲ其儘放置スレバ永キ時間ヲ經テ最上層ニ暗色層ヲ生ズベシ、「サルブールサン」並ニ遊離亞硝酸ヲ含マザル尿ニ於テハ單ニ黃色ヲ呈スルニ過ギズト述べ、本試験法ハ極メテ鋭敏ナルミニナラズ、亦「サルブールサン」ノ定量ヲモ爲シ得ルモノナルコトヲ信ズト結ベリ

●糖尿病患者ノ唾液反應

アーボア、ステエフエン

British medical Journal, May 26th, 1911.

健康者ノ唾液ニ鹽化鐵ノ稀薄溶液ヲ加フルルハ該液ハ血紅色ヲ呈スル者ニシテ此反應ハ鉛中毒患者唾液ニ於テ認ムベカラザル事實ハ已ニ人ノ知ル所ナルモ氏ハ尙此反應ガ屢蔗糖ヲ食セル後ニハ健康體ニアリテモ尙呈セザル場合アルコトヲ注意シ之ヲ糖尿病患者ノ唾液ニ付キテ檢セルニ常ニ其反應ヲ呈セザルコトヲ發見セリ、而シテ此際用フル鹽化鐵液ハ極メテ弱度ナル者ヲ

要シ大約四号ノ蒸溜水中過鹽化鐵液ノ六一八滴ヲ滴下セル者ヲ良トスト

●アルコホル單寧ヲ以テスル手術局所ノ消毒ニ就テ

ツァブルドウスキー

Deutsche med. Woch. Schrift No. 9, 1911

著者ハ昨年外科中央雜誌ニ於テ本問題ニ關セル報告ヲナセルガ實驗數尙ホ少クシテ未ダ確實ナル證言ヲナスコトヲ得サリシガ其後多數ノ實驗ヲ重ネ本問題ヲ解決セントセリ。

著者ノ細菌學の檢査ニヨレバ5%アルコホル單寧溶液ハ二日間ニシテ手ノ消毒ヲナシ一分間ニシテ手術局所ノ消毒ヲ終ルコトヲ得ベシ氏ノ細菌學の觀察ハ「ヘーブル」ノ用井タル方法ニ從テ先ヅ「ガーゼ」ヲ水ニ浸シ然ル後消毒セル手ヲ劇シク摩擦シ之ヲ寒天ニ培養セリ而シテ他ノ藥物ヲ以テ消毒セル者ト對比スルニ沃度「ベンチン」「パラホン」「アルコホル」「アツェトン」九五%「アルコホル」ハ各々四乃至五分ヲ費シテ尙ホ多數ノ集落ヲ生ゼルニ反シ「アルコホル」單寧ハ僅カニ二分間ニシテ一個乃至二個ノ集落ヲ生ゼルニ止レリ次ニ一旦消毒セル手ヲ更ニ發汗セシメテ前同様ノ成績ヲ得更ニ又十分間水及石鹼ヲ以テ充分ニ清洗シ然ル後數分前記諸消毒藥ヲ以テ處置ニ更ニ細菌集落ノ發生ヲ檢シ「アルコホル」單寧ノ卓越ナル消毒力ヲ認メタリ、著者ハ二百三十二ノ手術ニ之ヲ用井只々數回結果ノ不良ナルヲ見シノミ、其大多數ハ所期ノ目的ヲ達セリ尙ホ著者ハ結論シテ曰ク在來用井ラレタル消毒藥中「アルコホル」單寧ハ其ノ第一位ニ位スベク沃度「ベンチン」或ハ沃度ノ缺點ナク「アルコホル」「アツェトン」ノ如ク高價ナラズ又「アルコホル」ノミヨリモ有効ノ時間長ク手術局所及手ニ用井テ不快ノ作用ナク又他ノ洗滌藥ト併用シテ何等ノ差支ナシ

●再ビ米粉榮養兒ニ來ル病變ニ就テ

(小兒科學會總會ニ於テ)

岡本京太郎

余ハ昨年小兒科總會ニ於テ摺粉重湯或ハ「オチバ」ヲ以テ養ヘタル哺乳兒ニ起ル病變ヲ Reismilhschaden トシテ報告シ、此モノハ Czerny ノ所謂 Mehlmilhschaden ト似テ少シク非ナル事ヲ附記シ、併セテ其原因ヲ兩障碍共等シク含水炭素ノタメニ起レドモ西洋ニ於テハ主トシテ麥榮養ナルニ日本ニ於テハ米榮養ナルニ基因スルニ非ズヤト結論セリ

爾後此ノ如キ米榮養障碍ヲ觀ル事十三例ニ及ビ、前報告ニ多少ノ修正ヲ加フベキヲ知リシ故再ビ茲ニ報告ヲ重ヌ前回ニ於テ、余ハ本病ノ主症狀トシテ食思缺損、尿利減少、羸瘦、聲音嘎嘶、顔色蒼白、浮腫、眼乾燥症、垂頰、腹部弛緩、肝萎縮、心音高調、大便ノ澀粉反應、尿ノ無蛋白、無熱、啼泣發作ヲ擧ゲタリ、サルニ今日ノ例ニ於テ補正ヲ要スル點二三アリ

- (一) 尿利減少、屢々頻回多量或ハ通常ナル事アリ
 - (二) 垂頰、特別ノ價值ナク、浮腫ハ一分症ニスギズ
 - (三) 肝臟萎縮、時ニ却テ大ニフル、モノ或ハ通常大ト思ハル、モノナリ
 - (四) 之ニ反シテ嘔吐、嗜眠、腹部膨隆ハ甚ダ多ク發現シ來ルモノニテ、即チ主要症狀トシテ追加ス
- 即前回ノ報告ノ主症狀ヲ改メ、食思缺損、嘔吐、羸瘦、聲音嘎嘶、嗜眠、顔色蒼白、「チアノーゼ」、浮腫、眼乾燥、腹部膨隆、弛緩、心音高調、大便ノ澀粉反應、尿ノ無蛋白、無熱、啼泣發作トナス
- 其他尙補正スベキ點ヲ擧グル時ハ

(五) 年齡關係、幼少ナル兒ニ重症來ルト限ラズ、年長兒ノ方ニモ屢々重症ヲ見ル、蓋シ幼少兒ハ同時ニ母乳、牛乳等ノ供給アルタメ甚シク

米榮養障碍ヲ蒙ル事尠ナキニヨルモノナランカ

(六) 榮養法、單純ノ米煎汁或ハ米粉汁榮養ニヨリ起ル時像後最モ不長ニシテ、母乳、牛乳、「コンデンスミルク」ノ併用ニヨリテ病ノ症狀ヲ極メテ複雜ノモノトス

(七) 發病時期、前ニ春季ノ末ニ多シトセルガ特ニ季節ノ關係ナキガ如シ

(八) 誘因、誘因不明ノ場合少ナカラズ、サレドモ感冒ノタメ或ハ急激ニ牛乳ヲ與ヘシ等ニヨリテ病症ヲ發現シタル事アリ

(九) 聲音嘎嘶、時ニ缺損セル事アレドモ甚シク低聲タルハ免レズ、一ノ不全麻痺ト考フ

(十) 脈搏、普通ハ常數或ハ反テ遲徐トナル、瀕死期ニ時ニ一層緩徐トナル事アリ

(十一) 呼吸、一定セズ、時ニ一過性ニ促進スル事アレドモ、又却テ遲徐トナル事アリ、トニカク乳兒脚氣ノ場合トハ全然其趣ナ異ニス

療法 一定ノ考案ナシ、タゞ本病兒ハ其消化器官ガ永時澀粉榮養ニ適應スベク働キオレルヲ以テ、脂肪、蛋白ニ對スル消化作用ノ準備不十分ニシテ、タメニ牛乳、「コンデンスミルク」、或ハ母乳ニ對シテモ甚ダ過敏ニシテ、米粉汁ヲ全廢シテ急激ニ此等ノモノヲ供給スル時ハ下痢發熱ヲ以テ反應シ、マタタメニ俄ニ不長ノ轉機ヲ取ル事アリ、即チ比較的徐々ニ榮養品ヲ改良シテ前記ノモノニ移ル方針ヲトルヲ要ス

豫後 概シテ永時單純ナル米榮養ノ下ニアリシモノハ不長ニシテ、年齡ノ幼少ナルモノ程危險也、又病機進涉シテ「キセロージス」、「チアノーゼ」、痙攣發作、強度ノ驚口瘡ヲ有スルモノ、或ハ嗜眠、食思缺損アルモノ、腎臟炎ノ併發セルモノハ、豫後疑ハシ、又乳汁ニ對シテ甚シク過敏性ノモノハ假令乳榮養ヲ以テスルモ病機ノ進行ヲ停ムル事能ハズ、其他普通死ノ前徴トナルベキ脈搏呼吸ノ變動ハ、本病兒ニ於テ觀察セラル、事尠ク、殆

ド頓死ノ状態ヲトル事アリ

●血液ノ防衛作用及血液循環ノ補助動力 (於精神病集談會)

醫學博士 二木謙三

生体ノ血液中ニハ殺菌物質ト喰細胞ト二者アリテ傳染病ヲ防衛ス之ヲ總稱シテ自然免疫ト言ヒ其力ヲ自然免疫力ト云フ、

然レドモ血液中ニハ此レ以外ニモ或何等カノ物質ヲ含有シ以テ自然免疫ヲ爲スモノ、如シ佛人メチニコフ氏ハ白血球ノ喰細胞説ヲ唱ヘ獨人ブフテル氏ハ「アレキシシ」説ヲ主張シ以テ其殺菌力ヲ説明セリ。

然レドモ是レノミニテハ充分ニ説明シ難キ點アリテ吾人ガ満足セザル所以ナリ、

彼ノ脾脫疽菌ハ羊、馬等ノ家畜ヲ侵ス最モ傳染力速カナルモノニシテ歐洲ニテハ最モ早ク種々研究セラレタリ、蓋シ家畜ハ歐人ノ主要食物ニシテ之ガ病原ヲ研究シテ其ノ豫防方法ヲ講ズルハ我日本ニ於テ農學者或ハ農家が恰モ稻ノ害蟲ノ驅除撲滅ヲ怠ラズ勵行スルガ如ク國民ノ生活ニ直接影響ヲ來ス重要ナル問題ナレバナリ、

茲ニ脾脫疽菌ノ研究進ムト共ニ前述ノ殺菌説ニ對シテモ論難スルニ至リ其説ノ重要セラレザルニ至リシ也

今動物ノ脾脫疽菌ニ對スル反應ヲ檢スルニ左ノ如シ

- 犬 一
 - 鶏 一
 - 兎 十
 - モルモット 十
- 即チ兎及モルモットノ血清ニハ殺菌素ヲ有スルモ陽性ニシテ、鶏ハ殺菌素

チ缺ケドモ陰性ナリ、サレバ如斯キ事實ハ如何之ヲ解決スベキカニ就テハ過去約二十年間ノ一大疑問トナリシナリ、茲ニ於テカ世界ノ學者ハ各自其ノ所説ヲ主張論議シタリト雖モ諸説紛々トシテ未ダ決スルニ至ラズ、

彼ノパステル氏ハ曰ク之レ鶏ト兎トノ体温差ノアルガ爲メニシテ前者ノ四十二度ノ高温ナルニ反シテ後者ハ三十七八度ナリ、即チ脾脫疽菌ハ四十二度ニ於テ死滅スルニアラズヤトナカクノ氣焔ヲ吐タキリト雖モソハ單ニ鶏ト兎ト二者間ニ於テコソ都合ヨケレ、而モ犬ノ体温三十七八度ナルモ陰性ナルハ如何テフ點ニ至リテ説明ニ窮シ其證據ハ根底ヨリ破レタリ、茲ニ於テカ余ハ鶏ノ白血球ガ脾脫疽菌ヲ喰フ状態ニ就テ實驗シタリ(拾數葉ノ寫眞板ヲ示サレ詳説スル)其結果ハ次ノ如キモノナリキ、

▲脾脫疽菌ト白血球試管驗内ノ實驗

一、モルモットノ白血球ハ其一個ニ對シテ多數ノ菌ヲ以テ包圍サル、如キ状態ヲ爲シ、

二、兎ノ白血球ハ其一個ニ對シテ少數ノ菌ガ貫クニ過ギナイ、故ニ二者ノ喰菌作用ノ差異ハ白血球一個ニ對スル菌ノ數ノ多少ト關係アルモノ、如ク、若シ同數ノ白血球アリトセバ前者ニ對シテ後者ハ陰性トナルベキナリ、

▲モルモットノノ腹腔内ニ菌ヲ注射スレバ喰菌サルズ之レ菌ニ莖膜ヲ被ルガ爲メ白血球ガ殺菌シ得ザルニ依ルモノナリ、

(之レ蓋シ何ニヨラズ試驗成績ハ生体内ニ於ケル事實ト必ズシモ一致スルモノニアラザルヲ知ル)

茲ニ於テカ「カプセル」ノ有無ハ菌ノ發育状態ニ重大ナル關係ヲ有スルモノニシテ、「カプセル」ハ白血球中中毒セシメ以テ麻痺スルニアラズヤテフ疑問ヲ生ズベケレド此ハ中毒シタルニアラズ、白血球ニ對シテ菌ノ「カプセル」無キハ味ヨク、「カプセル」被ルモノハ味惡シトイフベク即チ「カプセル」ノ有無ハ味ノ有無ヲ來スモノト知ルベシ、

▲菌ノ侵入ノ徑路及注射シタル菌ノ運命菌ノ侵入門ハ皮膚ナリ、今皮下ニ於ケル淋巴細胞ノ作用ノ如何ヲ檢スルニ皮下ニ、注射後或ル一定時間ニ於テ鶏ハ菌破壞サレ、兎ハ却テ菌繁殖シ血管ニ向ツテ進撃シ以テ其猛威ヲ逞セルヲ知ル、

即チ鶏ハ既ニ皮下ニ於テ殺菌サレタリ、シカシ其ハ淋巴液自己ノミノ力ニアラズシテ白血球ガ來リ參加シ以テ殺菌シタルモノナリ、

▲血清ノ殺菌力試驗、

一、血漿

一、血球十箇ノ液

殺菌力無シ、
殺菌力強シ、

▲、血小板ノ殺菌力試驗、

左ノ各試驗液一定量ヲ採リテ其液中ニ於ケル菌ノ發育狀態ヲ比較シタリ、

一、血漿

一、血漿十箇ノ液

菌數增加ス、
殺菌力加ル、

一、血清(六十五度ニ熱シテ血清アレキシシ)ヲ殺シテ

一、血清十箇ノ液

殺菌力加ル、
繁殖セズ、

一、養田

一、養田十箇ノ液

殺菌力增加、
殺菌力增加、

一、培養的培養液

殺菌力增加、
殺菌力增加、

一、培養液

無力性ニシテ殺菌力増加セズ、
無力性ニシテ殺菌力増加セズ、

而シテ血清中ニハ「アレキシシ」ノ外ニ「アンモセアトール」ナルモノアリテ殺菌スルモノナリ、故ニ「アンモセアトール」ヲ除キタルモノニアリテ

ハ殺菌力増加ス、

▲血漿ヲ煮沸シ含有セル蛋白質ヲ凝固セシメテ除去シ或ハ無水アル「コー」ヲ加ヘテモ尙死滅セザル或ル殺菌補助物質アリ、其ノ或物質トハ「アルカリ」性物質ノ如シ、故ニ蒸餾水ニ定規 ナトロン 滴液ヲ加ヘテ菌ニ對

スル抵抗ヲ檢スルニ菌ニ何等ノ障害ナキモ之ニ酒石酸液ヲ加ヘテ中和シ或ハ酸性トスル時ハ其作用中止スルニ至ル、然レドモ更ニ「アルカリ」性液ヲ加フル時ハ菌ノ作用ヲ生スルヲ以テ知ルベシ、

要スルニ血液中心血漿、血小板等ハ「アルカリ」性ニシテ其他身体ノ各分泌液ハ多ク「アルカリ」性分泌液ナリ故ニ生体ニ於テハ自然免疫力アル所以ナリ

▲血液循環ノ補助動力、古來「血ハ生命ノ本ナリ」ト言ヒ西曆紀元四百六十年ニ於テヒポクラテス氏ハ「血ハ心臟ヨリ肺ヲ通ジテ肉體ヲ循リ精神ヲ養ヒ以テ精氣加シ」ト云ヒ、支那ノ岐伯ハ曰「心ハ血脉ノ氣ヲ通ヒ脈ハ血ノ府ナリ、脈長キ時氣治リ、短キ時氣病ム、錯ナル時ハ氣イラツキ、大ナル時病進ム、上ニ旺ナル時逆上シ下ニ滯ル時漲リ脈異ル時氣衰ユ」ト實ニ合理的ナルベシ、心臟ハ身体ノ上半部以上ニ位シ血液循環ノ府ナリ而シテ腹部内臟ハ全血量ノ二分一、四肢ノ筋ハ四分一尙殘リノ四分一ハ各臟器ニ分佈含有セラル、

抑モ血液循環ノ原因ハ心臟運動、脈管系各部血壓ノ差異、胸腔内ノ陰壓、脈管運動神經等ノ作用ナリトハ生理學書ノ論スル所ナリ、サレドモ是レノミニテ如斯ク絶妙ニ循環シ得ベキヤ、之レ以外ニ補助動力ナキカニ就テハマダ世ノ學者ノ研究セザル所ノ如シ、茲ニ於テ余ハ先ヅ先哲諸賢ノ文獻ニ就テ調査シ大ニ得ル所アリタリ

平田篤胤氏ノ著書ニ「空氣ハ頭ヨリ吸ヒ血液ガ巧妙ニ循環シテ輸送ス而シテ巧妙ニ(上手ニ)循環セシムルニハ氣海ノ丹田ニ力ヲ入ルベシ」ト説ケリ、其他擊劍、馬術詠等技藝ノ練習ニ方ツテ所謂要義ナルモノハ「下腹ニ力ヲ入ルベキヲ教ヘ彼ノ諺ニ於ケル首聲ハ喉頭ヨリ出スヲ禁忌シ所謂擊丸ノ側ヨリ出スベシ」ト之レ何チ意味スルモノナルカ下腹ニ力ヲ入レヨ」換言スレバ腹壓ヲ高メヨ」トイフニ外ナラス實ニ簡ニシテ明ナラスヤ之レ秘訣！ア、腹壓！腹壓ナル哉今自家考案ノ此ノ腹壓計ヲ以テ多數ニ計測シタルニ其統計左ノ如キヲ得タリ

大人三、○キログラム、中學生二、五種痘兒二、○生後數ヶ月一、○一、五ニ過
而シテ大人ノ慢性病者ニシテ衰弱セルモノニアリテハ一、○一、五ニ過
ギザリキ、

是ニ依テ觀是病者ハ著シク腹壓ノ減弱セルヲ知ル之レ血液循環ヲ上手ニセ
シムルニハ腹壓ヲ要シ腹壓強キ者ハ健康ヲ維持シ以テ血液ノ循環ヲ完全ナ
ラシムベシ、
其レ腹壓ハ横隔膜ヲ腹腔ニ向ツテ壓下シ同時ニ腹壁諸筋(直腹筋、横腹筋、
内外斜腹筋)ノ收縮ヲ爲ス場合ニ於テ高メ得次ニ心臓及動脈管系ハ不隨意
的ニシテ靜脈管系ハ不隨意的兼隨意的心臓トイフベク其ノ隨意的作用ハ腹
壓ヲ以テ之ヲ左右シ得ベシ血液循環ニハトテ自家考案ノ血液循環模型ニ就
テ實證シ且腹式呼吸ノ血液循環ニ及ス影響ニ論及シ以テ血液循環ノ補助動
力ヲ結論セラル……………

●尿中蛋白質各種證明法ノ比較研究

及ビ自案新證明法ニ就テ

(東京醫學會雜誌第二五卷第一〇號)

佐多芳久

著者ハ千葉醫學專門學校ニアリテ井上博士指導ノ下ニ在來二十五種ノ尿中
蛋白質定性試験法ヲ撰ミコレガ鋭敏ノ度ヲ比較研究ヲナシテ、其最モ鋭敏
精密ナル二三試験法ノ長ヲ採リ短ヲ補ヒテ一新證明法ヲ案出セリ

著者ハ先ヅ卵白液其他「アルブミン」液、蛋白質、肋膜滲出液及ビ腹水等ヲ
材料トナシ各種ノ蛋白證明法ヲ施シテ其優劣ノ度ヲ表示シ、次ニ著者ノ證
明法ヲ記シタルガ而モ其試薬タルヤ日常臨牀家ノ薬局中ニ貯藏セラルベキ
藥品ヲ以テ製センコトヲ期シ數回ノ改竄ヲ經テ稍々満足ナル成績ヲ得ルニ
至レリ

著者ノ試験成績ヲ綜合スルトキハ左ノ如シ

(一) 在來二十五種ノ異リタル蛋白定性試験法ニ就キテ比較研究ヲ行ヒタ
ルニ、其鋭敏度ハ從來發表セラレタル成績ト稍々齟齬セル結果ヲ得タリ、
而シテ其成績ニ由リテ最モ鋭敏ナルモノヨリ順次ニ列記スル時ハ次ノ如シ

- (一) Mehn 氏法、(二)「ズルフオサリチール」酸試験、(三) タンレット氏
法、(四) マツシユケ氏法、土屋氏法、ジヨレル氏法、スピークレル氏
法、(五) ヘルレル氏法、(六) エスパツハ氏法、(七) 森川氏法、大黒氏法、
ヤウオロウスキ氏法、錯酸黃色血滴鹽試驗、ラーベ氏法、(八) オリーフ
エル氏法、ミラード氏法、タンレット氏、沃度水素試驗、ハインジウス
氏法、(九) ビクリン酸試験、クローム酸試験、(十) クロールカルク試験、
ツオウフロス氏法、ローベルト氏法、(十一) 煮沸試驗、(十二) 異性磷酸
試驗

(一) 從來人口ニアマリ膾炙セラレザリシ Mehn 氏ノ方法ハ其反應極メテ
鋭敏ナルモノニシテ〇・〇〇一% 即チ十萬倍ノ卵白液ニ於テモ尙證明シ得
ベシト雖、該法ハ臨牀上常用シ得ベカラザル二三ノ缺點ヲ有ス

(二) 依ツテ吾人ハ Mehn 氏法ヲ改良セント欲シ、之ニスピークレル氏法
ヲ配シ、折衷對酌シテ其ノ長ヲ採リ短ヲ補ヒ、結晶性石炭酸一〇・〇昇末
六・〇酒石酸四・〇酒精(九〇%)一〇〇・〇ヨリ成ル一新試薬ヲ案出シタリ

(三) 新試薬ハソノ鋭敏度 Mehn 氏法ト伯仲ノ間ニ存シ、卵白液〇・〇〇一
%ノモノニ於テ濁濁反應ヲ呈シ、蛋白質ニ於テモ凡ソ〇・〇〇二乃至一%
ニ至ル迄證明シ得ベシ

(四) 新試薬ノ特長トスベキハ凡ソ左ノ四點ニ在リ

- (イ) 其鋭敏度卓越ナルコト
- (ロ) 試薬ノ容易ニ得ラルベキコト
- (ハ) 試薬ヲ可檢液ニ加フル時ハ液上層ニ於テ濁濁環輪ヲ生ズルガ故ニ、
下層ノ透明部ト比較シテ其反應ヲ著明ナラシムルコト

(二)他ノ二三證明法ニ於ケルガ如ク可檢液ト試薬トナ重疊セシムル等其
他ノ複雜ナル技術ヲ要セズ單ニ可檢液ニ試薬ヲ滴下スレハ足ルコト
(六)新試薬ハ之ヲ日光ニ曝ス時ハ石炭酸ノ酸化スルガ爲ニ微赤色ヲ呈スル
ニ至ルモ、ソノ蛋白證明ニ於ケル鋭敏度ニハ變化ナク來スコトナシ、故ニ之
ヲ保ツニハ日光ヲ遮リテ保存スルヲ要ス

●新血液證明法

(日本消化機病學會雜誌第一〇卷第三號)

醫學博士 井上善次郎
安富哲三

著者等ハ血液ノ證明法ニツキ諸家ノ法數種ヲ列舉シ次テ新證明法ヲ報告セ
リ、著者等ノ法ハゴツサー氏試驗法ニワシ、デン氏ノ癒瘡木試驗法ヲ結ビ
ツケタルモノニシテ、其反應顯著而モ右兩法ニ優レルコトヲ證明セリ
著者等ハ新證明法ノ實驗成績ニツキ詳論スルトコロアリシガ、本論文ヲ摘
要スルコト左ノ如シ

一、被檢液一〇蚝ヲ試験管ニ採リ、コレニ「アルコホル」一〇蚝ヲ加ヘ更ニ
「クロ、フタルム」五蚝ヲ加ヘテ輕ク振盪シ、癒瘡木丁幾十乃至二十滴ヲ加
ヘ、次テ「ナツチン」ヲ含有スル「テレピン」油十乃至二十滴ヲ滴加シ輕ク
振盪スレバ、試験管底ニ沈降セル「クロロホルム」若クハ全液ハ血色素含量
ノ多少ニヨリ紫色、藍色若クハ青色ヲ呈ス

二、新血液試驗法ハ、著者等ノ試驗ニヨレバ他試驗法ニ優レルガ如シ、而
シテ血液量〇・〇〇〇〇〇一マデヲ證明スルコトヲ得

三、「エーテル」性浸出液ヲ用フル新試驗法ニ於テハ、苛性曹達ヲ加ヘ中性
若クハ弱酸性ニナシタルモノハ其儘ノモノ即チ強酸性ノモノニ比較シテ反
應著シク鋭敏ナリ

四、「エーテル」性浸出液ヲ分離スルニハ、著者等ノ考案セル分離試験管ヲ
用フルヲ甚ダ便利トス

五、新試験法ニ於ケル「アルコール」及ビ「クロロフタルム」ノ量ハゴツサー
氏法ノ如ク、「アルコール」一〇蚝「クロロフタルム」五蚝ナルヲ良シトス

六、新試験法ニ於テハ、「アルコホル」ノ%ハ必ズシモ九〇%ナルヲ要セズ
七、新試験法ノ特長ハ、(イ)反應ノ鋭敏ナルコト、(ロ)癒瘡木丁幾「テレ
ピン」油試験、ウエーベル氏試験及ビゴツサー氏試験ヲ行ヒタル後ニ於テ

モ、本法ヲ試ムルヲ得ルコト

八、新試験法ノ缺點ハ、本試験ヲ行ヒタル後、上層ナル透明液ニ更ニ癒瘡
木丁幾及ビ「テレピン」油ヲ滴加スレバ帶綠青色ヲ呈スルコト、クロロフタ
ルム及ビ癒瘡木丁幾ノ混合ハ血液類似ノ反應ヲ呈スルニアリ

九、反應ノ色ヲ永ク保存スル點ハ、新試験法ハアロイン法ニ及バズ
一〇、糞便中ノ血液ヲ證明センニハ、コレニ水錯酸及ビ「エーテル」ヲ加ヘ
テ「エーテル」性浸出液ヲ作り、コレヨリ新試験法ヲ行フベシ

一一、尿ヨリ血液ヲ證明センニハ、尿其儘或ハ「エーテル」性浸出液ニテ新
試験法ヲ行フベシ

一二、吐物若クハ胃液ヨリ血液ヲ證明センニハ、濾過セルトコロノ胃液又
ハ濾過殘渣ヨリ「エーテル」性浸出液ヲ製シ血液検査ヲ行ヒ、コノ際胃酸ヲ中
和スルヲ要ス

一三、滲出液若クハ漏出液ノ如キ多量ノ蛋白質ヲ含有スルモノヨリ血液ヲ
證明スル場合ニアリテモ同じク「エーテル」性浸出液ヲ作りテ検査ヲ行フベ
シ

●血清學的免疫研究ニ理學的化學應用ノ現況 附「メイナスタグミン」反應

(大阪醫學會誌第一一卷第一號)

福原義柄

著者ハ最近勃興シツ、アル免疫研究ニ對スル理學的化學應用ノ現況ヲ叙スベク、先ツワイカルト氏ノ「エビファン」反應、アプデルハルデン氏ノ光學的検査法、アスコリ、氏ノ「メイナスタグミン」反應、粘稠度検査法等ノ諸法ヲ紹介シ、殊ニ「メイナスタグミン」反應ニ於テハ(甲)反應ノ本態、(乙)「アンチゲン」ノ準備、(丙)計算實施ノ心得十則、(丁)反應ノ應用等ノ諸項ヲ詳述シテ自家ノ實驗ニ論及シ、ソノ成績ヲ記述シタルガ即チ左ノ如シ

第一 「コレラ」菌注射後「メイナスタグミン」發現ト 凝集反應トノ關係

アスコリ等ハ「チフス」百分一白金耳(乾燥シテ百二十度已上ニ熱セルモノ)ヲ家兎靜脈内ニ注射セシニ、高度ノ凝集力殺菌力アリシモ、本反應ナキヲ認メ更ニ又一週間歇ニテ家兎ヲ菌若クハ其、エキストラクト(志賀法)ニテ漸次増量免疫セシモ、最終注射後十一日目ニ凝集力二千倍乃至三千倍ニシテ、本反應ハ陰性ナリキ然レドモ高度ニ免疫シタル馬免疫血清ニテハ陽性ナリキ尙アスコリ等ノ試験ニヨルニ、「チフスタグミン」ハ耐熱性ニシテ、五十六度三十分ニ破壊サレズ、七十度ニテ始メテ無力トナリ、之ニ「ノルマー」血清ヲ加フルモ復力セズ、予ハ家兎ニ「コレラ」菌ヲ靜脈内注射シ、爾後日々血清ヲ採取シ凝集ノ反應及「メイナスタグミン」反應ヲ試ミシニ、凝集反應發現シ來ルモ、「メイナ」反應ハ毫モ大ナル滴數上ノ變化ヲ示サザリキ、由テ更ニ高度ノ「コレラ」「チフス」赤痢免疫馬血清ト同名菌「リポイ」デ」トナリテシテ、検査セシモ今日マデノ成績ニテハ甚タ悲觀的ナリ

第二 「メイナスタグミン」反應ト「アナフブラ

キシ」トノ關係如何

予ハ又馬血清ニテ過敏トセル「モルモット」血清ヲ取り豫備注射前ニ採取セル血清ト、其表壓差ナキヤヲ試ミシニ、何等ノ變化ナク、更ニ注射前後(即チ發症ヲ待テ迅速採血ス)ト血清ノ表壓差ナキヲ見シノミナラズ、前後ノ兩血清ニ馬血清「リポイ」ヲ混ジテ表壓下降セザルヤ否ヲ試ミシモ、亦何等得ル所ナカリキ

第三 「プレチピチン」ト「メイナスタグミン」發現トノ關係

アスコリ等ハ「ウイツテペプトン」、グラチー子馬血清ニテ免疫セル血清ガ本反應ヲ呈スト云フ、而シテ「ペプトン」及「グチラー子」ノ「スタグミー」ハ非耐熱性ニシテ、五十六度三十分ニテ無力トナルト報ス、予ハ家兎ニ羊血清ヲ靜脈内ニ注射シ、日々「プレチピタチン」ト「メイナ」反應トヲ檢セシニ、「プレチピチン」發現スルモ「メイナ」反應ハ認メラレザリキ

第四 予ノ試験ノ結果

今日迄ノ結果ハ甚悲觀的ナリ、然ドモ「アンチゲン」及「アンチケルベル」ノ結合ガ理學的化學的變化ヲ惹起ス可ク、之ヲ確實ニ證明シ得ル方法ヲ案出シ得ベキ希望ハ尙失ハレタリト云フ可カラス

最後ニ著者ハ其全篇ヲ綜括シ、之ガ摘要ヲナシテ曰ク予ノ試験ハ「メイナスタグミン」反應ノ價值ヲ疑ハシムト雖モ、尙ホ臨牀的惡性腫瘍ノ診斷ニ應用シテ批判セラレシコトヲ望ミ「アプデルハルデン」法ハ今後益々免疫學研究ニ應用センコトヲ期シ、「エビファン」反應ハ操作稍困難ナルモ、尙ホ試用シ、改良スルノ餘地アルコトヲ信セント欲ス、若シ夫レ粘稠度検査法、氷結點計測法等ノ如キモ將來研究スルノ價值アルベキナリ

●細菌「リポイデ」ニ關スル研究

(中外醫事新報第七三九、七四〇號)

福原義柄

著者ハ本篇ヲ分チテ(一)細菌「リポイデ」ノ殺菌力(二)細菌「リポイデ」ノ血球溶解、(三)細菌「リポイデ」ノ抗捕體作用、(四)細菌「リポイデ」ノ毒素結合作用、(五)細菌「リポイデ」ト「フアゴチトセ」トノ關係、(六)細菌「リポイデ」ト凝集反應トノ關係、(七)細菌「リポイデ」ノ狂犬毒及鷄「ベスト」毒ニ對スル作用、(八)細菌「リポイデ」ニ補體作用アリヤ、(九)細菌「リポイデ」ノ理化學的及ビ免疫學的性質ノ九章トナシ、現下ノ問題ニ關スル細菌「リポイデ」ニ就テ精微ノ研究成績ヲ公ニシタルガ、其結論左ノ如シ

(一)諸種細菌ノ「リポイデ」ハ多クハ殺菌性及ビ溶血性作用アリ、種幹ニヨリ同一菌ト雖モソノ含量及ビ作力ニ差アリ

(二)細菌ハ液狀培養基中ニアツテハ、ソノ「アウトリーゼ」ニヨリ多少「リポイデ」ヲ溶出セシム、斯クシテ溶出セルモノ及ビ菌體ヨリ水ヲ以テ抽出セルモノニテハ、「リポイデ」蛋白ト結合シテ、ソノ作用ハ純「リポイデ」トシテ製出セシモノ、如ク著シカラズ

(三)「リポイデ」ノ溶血力將又殺菌力ノ如キハ動物體內ニテ殆ンド發揮サレズ、ソハ體液中ノ蛋白ト結合シテ「インアクチーフ」ノモノトナルニヨルモノニシテ試験管内ニ於テモコノ關係ヲ實示シ得ベシ

(四)細菌性「リポイデ」ハ耐熱性ナリ、然レドモ蛋白ト共存スル時ハ非耐熱性ノモノトナル

(五)「ピチチアナーゼ」作用ノ本態ハ細菌性「リポイデ」ナリ

(六)「ピチチアナーゼ」リポイデ」ハ實扶的里毒破傷風毒ヲ中和スルモ、大腸菌「リポイデ」ハ「エルトル」螺旋菌ノ「ヘモトキシーン」ヲ破壞スル能ハズ

(抄録)

(七)細菌「リポイデ」ハ細菌凝集反應ヲ多クハ促進スル如シ
(八)「ピチチアナーゼ」リポイデ」ハ狂犬病毒鷄「ベスト」病毒ヲ破壞ス
(九)細菌「リポイデ」ハ「薄キ」アルカリ、又ハ酸ニヨリ破壞サレズ「ペプシン」若クハ「トリプシン」消化ノ影響ヲ受ケズ
(十)健常血清ハ細菌「リポイデ」作用ヲ抑制ス、コノ力ハ血清中ノ蛋白ニヨルモノニシテ、血清「リポイデ」ハ興ラズ、臟器「エキストラクト」モ亦健常血清ノ如キ作用ヲ發揮ス
(十一)細菌「リポイデ」ハ免疫元性ナシ

●糞便中ヨリ室扶斯菌ヲ分離スル法

(東京醫事新誌第一七〇八號)

醫學士 辻 寛 治

著者ハ普通肉汁培養基五・〇ヲ入レタル遠心力沈澱用試験管ニ健康人糞便ノ少量ヲ植エ、約二十時間孵卵器ニ入レタル後之ヲ遠心器ニ致シテ殆ド清透ニ至ルマデ沈澱セシメ其上清一白金耳ヲ遠藤氏又ハドリガルスキー氏平板培養基ニ移植シ、約二十時間培養セル後其聚落ヲ檢セシニ、比較的多少ノ(凡ソ大腸菌聚落ト同數ノ)「アルカリ」性糞便菌ノ聚落ヲ見出セリ、コレガ對照トシテ糞便ヨリ直接ニ培養セシモノハ大多數ハ大腸菌ノ聚落ニシテ「アルカリ」性糞便菌ハコレヲ認メザリキ、著者ハ進デ普通大腸菌、室扶斯菌及ビ「アルカリ」性糞便菌ニツキコノ關係ヲ檢セシニ、普通大腸菌ハ早ク沈澱スルモ、室扶斯及ビ「アルカリ」性糞便菌ハ容易ニ沈澱セザルコトヲ知レリ即チ著者ノ種々ナル實驗ニヨリ菌體ノ短クシテ運動ノ活潑ナルモノハ沈澱シ難キコトヲ確證セリ、故ニ是等ノ細菌ヲシテ沈澱シ難カラシメンニハ其發育ニ最適當セル培養基ヲ撰ビ、コレニ反シテ沈澱ヲ容易ナラシムルニハ其發育ニ適セザルモノヲ用フルヲヨロシトス、而シテ特殊免疫血清

三九

中ニ於テ發育セル細菌ハ殆ド其運動ヲ失ヒ絲絨狀又ハ狀ニ發育シ、繁殖モ亦頗ル防碍セラレ、コトハ既ニ吾人ノ知ルトコロニシテ、コノ場合ニアリテハ容易ニ沈澱スルコトヲ知ル

著者ハ右ノ事實ヲ應用シテ腸窒扶斯患者ノ糞便ヨリ窒扶斯菌ヲ分離スル場合ニ、通常糞便中ニ多ク見ル所ノ普通大腸菌及ビ「アルカリ」性糞便菌ノ免疫血清ヲ作り、之ヲ應用スルコトニヨリテ沈澱ニヨリ窒扶斯菌ヲ分離センコトヲ企テタリ、著者ハコノ方法ニヨリテ腸窒扶斯患者五名ニツキ其糞便ヲ検査セシニ三名ニ於テハ多數ノ聚落ヲ認め他ノ二名ニアリテハ陰性ノ成績ヲ得タリ、但シコノ二例ニアリテハ既ニ恢復期ニアリテ全ク解熱セル後ナリキ

終リニ著者ハ、本問題ニツキ研究スヘキ餘地アリテ更ニ完成ノ後報告スベキナリキ

●特發性角膜脂肪變性ニ就テ

(第十五回日本眼科學會總會ニ於テ)

醫學博士 高安 右人

十五歳、農女、遺傳症ノ認めベキモノナク患者ハ生來健康ナリ且テ兩眼潮紅、腫脹シ疼痛アリシ事アリシガ視力障害ハナク暫時ニシテ治療セシ事アリ、現症ノ起原ハ十歳ノ時先ヅ右眼ニ角膜ニ點狀斑點ヲ生ジ次デ左眼ニモ同様ノモノヲ生ゼリ個々ノ斑點ハ大キクナラズシテ只其數量ヲ増シ來リテ爲ニ視力ノ障害ヲ來セリ、自覺的ニハ異物感、羞明流淚、輕度ノ疼痛アリ、視力障害次第ニ増シテ今日ニ至ル

現症、結膜ニハ「トラホーム」アリ分泌充血共ニ高度ナリ、角膜ハ艶消シ硝子ノ如ク一面ニ溷濁シ不正ノ小斑點點々散在ルモ其排列ハ稍格子狀ヲナス色ハ稍帶黃灰白色ニシテ角膜面ハ一體ニ少シク膨大ス、周圍充血甚シキモ

溷濁角膜トノ間ニ稍透明ノ間隙ヲ殘ス、血管ノ一部ハ「パンヌス」狀ニ角膜中ニ走行スルモノアレハ全體ノ病型ハ「パンヌス」トモ異リ、去リトテ又角膜實質炎トモ異ル、視力ハ左右六十分ノ六、

角膜炎ノ一部ヲ剝離シテ氷結標本トナシ、「ズダン」染色セルニ實質ハ葉狀脂肪變性ヲ呈スルヲ見タリ、此脂肪ノ由來ハ他ヨリ轉輸サレシ者ニ非ズシテ實質中ニ於テ變性形成サレタルモノナリ即チ余ハ特發性脂肪變性ナル診斷ヲ下セリ、
文獻ニ徴スルニバウムガルテン氏ハ「グレイフエー」實函二十二卷(一八九六)ニ於テ硬化性角膜炎ナル題ノ下ニ脂肪變性ヲ論ジ、又カボツキー氏ハ「間歇性刺戟症狀ニ伴ヘル角膜脂肪變性」ヲ報告セルヲ見ル予ノ例ニ於テハ是等ノ例ニ比シテ脂肪量著シク夥キヲ見ル、

* * * * *

通信

●鈴木寛之助君通信

(山崎教授宛)

海軍々醫中監全氏(二十九年卒業)は軍艦鞍馬に乘りて英皇戴冠式に列式せられ遠く其航海日記を寄せられたるに付左に之を轉載して其厚意を深謝し且つ全氏の健康を祈る

遣英艦隊消息

新嘉坡より一筆を啓上

明治四十四年四月一日八白八洲櫻雲鑿巖春方さに酬ふるの時日出る國から日の没する事なき國の祝典に列すべく我道英艦隊鞍馬利根の二艦は司令長官島村中將閣下統率の下に

横須賀發航

二萬七千哩の鵬程に第一歩を踏み出した

三月二十一日侍從武官西海軍少將鞍馬に來艦優渥なる聖旨を傳へらる艦隊員一同感奮吾人の任務更に幾十倍の重きを加へたるを感じた出港當日の朝重任と榮譽とを擔へる我艦隊の首途を送るべく海軍大臣代理財部海軍次官を始めとし伊東元帥山本大將瓜生、坂本、吉松、藤井其の他の諸將軍來艦されたり財部次官からは齋藤大臣の訓示を與へられ伊東、山本兩將軍亦告別の辭を以て行色を壯にせらる在港各艦からは「安全なる航海を祈る」の信號と登艦禮式を以て我行を送られた平凡なる仕方ながら送らるる身には却つて之が一入胸に透徹し心から感謝の意を來して「好意を謝す」と答信し同じく登艦禮式を行ひ互に帽子を振つて別れを惜しみつゝ豫定の十一時三十分徐々行進を起した又横須賀海兵團の軍樂隊は兩艦を周つて「ロングサイオン」の曲に勇ましき秋別の意を傳へ我艦上の軍樂隊之に唱和しつゝ港口を別れた

此の日天候陰凄北風強吹波頭白し送り來れる水雷艇隊には海堡近で謝して別れを告げ愈々東京灣口を出た風は強いが追風である故何とも感ぜぬ唯日本の匂が少し沖迄届いた外は濃氣僅かに海上を擧めてるばかり

日本魂の土製の巨塊崇高なる富嶽は濃氣に隠れて視れども見はず是のみは何さふく物足らぬを感じながら伊豆半島を右に見て進む此の邊で

遣英艦隊

に就て少しく書くと致さう、來る六月下旬に於て行はる可き我同盟國皇帝「ジョージ」五世陛下の戴冠式の盛儀を祝せん爲めに我二艦を派遣せらるゝは既に御承知の如くである而して先帝「エドワード」七世陛下の戴冠式の際

には今の軍令部長即ち時の伊集院少將引率の淺間高砂の二艦が派遣參列した是れ實に明治三十五年で既に九衰葛の昔しである今次の遣英艦隊も亦二艦で編成され兩艦とも我海軍の手に成り鞍馬は横須賀、利根は佐世保で建造されたのである左に兩艦に關する數字を列れて説明に代ゆる

鞍馬

艦種 一等巡洋艦。進水四十年十月。竣工四十四年二月。排水量 一萬五千五百噸。實馬力二萬二千五百。速力二十一節。

利根

艦種 二等巡洋艦。進水四十年十月。竣工四十三年五月。排水量 四千百噸。實馬力一萬五千。速力二十三節五。

全長 四百八十五呎。最大幅七十六呎。甲鉄厚七吋。武器 四十五口徑十二吋砲四門。四十五口徑八吋砲八門。四十口徑四吋七砲十四門。三吋砲四門。機砲四門。雷發射管四門(水中)

乘組員 九百六十五人(司令長官以下全部)

我鞍馬は未だ竣工せざる昨年頃から英國に遣はされるだろ。この噂が高かつたのであるが七十五日と昔より相場の定つてる噂は期限を過ぎて遂に事實さかり三月一日竣工と同時に利根と共に第二艦隊に編入され其の一部として司令長官直率の下に英國に派遣されることゝあつたのである、艦員は喜び勇んで諸種の出航準備に従事し夜を日に繼いで忙殺され三月下旬準備畧成れる時一日艦建造に關係ある職工及其家族を招いて艦を拜觀させ次で乗組下士卒の家族最後に准士官以上の家族を招待し吾々が乗つて英國に行く艦は之より御別れを兼ねて艦を拜觀せしめた

二十七日二十八日には兩艦の候補生以上に拜謁及實所參拜を仰せ付けられ

(通信)

准士官下士には賢所參拜を仰せ付けられ、これで御暇乞もすみ諸種軍需品の搭載も終り準備全く完成を告げた、艦は帝國海軍最新の精銳航海は目出度初航海任務は重し榮譽は大ふり吾人艦員勇奮せざらんとするも豈得べけんやで元氣満々「左様から」と襪を解いた

却就四月一日は遠州灘に暮れて明くれば紀州洋熊野の山は薄曇み那智の瀧のみ白く細く一條直下微かに山の狭間に見えて居る

今日は日曜日分隊点検に關しては後で書くさしやう

四月二日午後佐世保から 皇太子殿下を護衛して神戸に向ひつゝある

第一 艦隊

の無線電信が 殿下の渾き御思召を傳へて今夜土佐沖に會合する様言つて來た即ち速度を増して進んだ、午後八時半頃西方水平線上航海燈が見えて五隻を數ふ是れ即ち第一艦隊で薩摩、鹿島、筑波、肥前、伊吹の序列で漸次近寄つた 殿下は二番艦鹿島に在ます各艦互に探照燈で照し合ひ我艦隊は針路を東方に反轉して暫し第一艦隊と同航し土佐沖は時ならず壯觀を呈した「鯉や珊瑚樹は嘸面喰つたである」我艦は君が代の樂を奏し謹んで殿下の萬歳を祝し奉り御暇乞を申上げ針路を元と來し方向に轉じ十時互に惜しき袂を別つた

三日は神武天皇祭、日向洋で遙拜式を行ふ午前低氣壓の中心に突入疾風強吹雨が降つたけれど數時間にして事なく過ぎた九州の南で郵船命社の安藝丸に會した外は船を見ず南西諸島の西を過ぎ連日各種の教練を行ひつゝ南へ南へと進み五日午後一時から

西部標準時

を用ひ時計が一時間後戻りして「トートー」一時間餘計に當直したと言ふ人もあつた當直は四時間で交代する定めてあるが時間が一時間後戻りした、めに五時間當直した譯なのである、時刻は此時までは中央標準時を用ひ東徑百三十五度の子午線に於ける時刻西部標準時は東徑百二十度の子午線の

時刻であるそれで時計が一時間後戻りと言ふことなる

六日は臺灣の東を南下し能久親王御上陸地として世に知られたる三貂角の南東

黒潮

に乗り入つた黒潮は世界に於ける著名なる潮流の二で南方赤道の方から北上し來り臺灣の東を過ぎ九州に近づいて二流とふり其本流は我南海岸の沖を東し八丈島附近に至り有名なる黒瀬川さなる、黒潮は一般に其色藍黒他の水色に比し著しく濃厚である黒瀬川の名是に依りて起る、紀州土佐沖、九州の南端の間を往復するに常に著しく此の潮に影響される水溫の高き又此一特徴で約八十度ある此の潮帯以外の水溫は之より約十度低ひ隨つて黒潮に入つたか否やば海水溫度を測れば直に知ることが出来る而して日本近海の航海家漁業家等には此の潮には随分密接な關係がある例へば航海中濃霧等に會し艦位不精確な時など水溫を測つて船の黒潮内に在るやを判じて艦の位置を知るの參考に供するが如き又此潮によつて樓家を左右されてる漁族即ち鯉の如きもの、漁獲に就ては此の潮が日本の南東海岸に接して流るゝ時と然らざる時とに至り大いに影響を受ける如きこれである加之陸上の氣候にも大關係を有して是等のことは近時世間で少し注意する様になつた然し以上は單に地文學的乃至は海洋學的に觀た黒潮の一面である

黒潮が過去數千年、我進化に寄與せる事の如何ばかりであつたか將た如何なる關係を大和民族に對して有するかを研究したならば面白ひだらうと思ふ、黒潮文明の光に浴して居る吾人は誠に此感深しである午後八時東經百二十二度附近で

熱帶圈

に入つた横須賀出た時は氣溫が五十度今や八十度さふり夏服を着て、此の日各種の教練を行つた、氣候酷熱人を煮て情氣満々たらしむる時には元氣よく教練を行ひ邪氣を拂ふのが最も宜しい旺盛なる士氣活潑なる舉動艱

難を物さず遣り口で行けば情氣も病氣も吃驚敗亡するは言はずも知れたこと其の教練の數多き中に「合戦準備」と言ふのがある艦が敵の洋上に相會し砲火將に開かれんとするに先だち戦鬪の邪魔さあるべきものか始末し敵彈の爲めに破壊され又は火災を起す様なものを取り除いて艦の戰鬪力を充分に發揮せしむる様準備するので軍艦旗は高く大櫓の斜桁に掲げられる端艇は艦内に取り入れて覆をかけられる、數多き支柱や手摺は倒され取除かれる、昇降口や窓は閉じられ通風筒は頭を引込める防水扉防水蓋は鎖される見る間に艦内は邪魔物一つふい様にされ敵彈が何程飛んで來てもびくさもせぬ様にふる面して砲や彈藥庫にもそれ／＼用意をふし敵來れど待構へる又釣床で所要所の防禦の手の個所を防禦する方法をふす此の教練が艦内で最も痛快で最も勇ましいものである、此の準備が出來ると今度は「戰鬪教練」と言ふのをやる是れは「合戦準備」で艦全部の準備を整へた後、砲水雷等に直接準備をふすので十二吋砲は巨人の如く悠々ど動ひて敵に向けられる各砲には彈藥が供給される艦内到處の飲水罐は満たされる防火の準備もふる血流足か滑らす時の用意に撒くべき砂も準備される是等の準備全く成るや發砲の令を今や遅しと待ち詫ぶるのである、實戦には初陣の人は此時武者振ひと言ふのをやるそーだ

是等の教練は治に居て亂を忘れざる深い用意の唯僅かに一小部分に過ぎないのである此の教練の際

一 水兵海中に溺る

即ち直に救助艇を卸して是を救つたが何等の異状もない元來艦が航海する時は端艇を救助艇に準備し救助艇員を定めて置き溺者ある時は非常の荒天で本艦すらも危険である様の場合の外は晝夜の別なく直ぐ端艇を停め救助艇を卸して救助を行ふものである

溺者は何時あるやも知れぬ故常に警戒すると共に艦の後部即ち後甲板に救助浮標番兵を置き溺者ある時は前艦橋から後甲板にある電鈴を鳴らし番兵

をして時機を失せず救助浮標を溺者に投下せしむるのである此の浮標は水中に投下さるゝや自動的に火を發する装置を有し溺者搜索に便ふる様にしている而して艦では平素溺者救助教練を行ふつて貴き人命の救助に於て寸毫も遺漏手落のふい様に訓練を積んで居る

郷國の山河に別る

横須賀出港以來連日陰曇時々強風吹到狂瀕艇を打つ事も有つたが天候は回復して静穩さふり漸く無風帯へど進入した此の時迄海水の飛沫躍入の爲め開く事の出來なかつた下甲板の窓が開き得る様になり下甲板に私室を有する人下甲板に寝る人等は大喜び、申甲板連に冷かされると「ア、涼しいもつと冷かしてくれ」

八日午後一小帆船の日章旗を識かへし北上するに會したが同じく我國旗を識せるものでも大船巨舶を見るよりは愉快である、今此の小船を見て四百年の昔我民族の海外發展——和冠——八幡船——御朱印船等を回想し感慨禁ずる能はさるものがある

「緯度低くなれば温度高くふり服白くふり色黒くふる」とは數年前或人の戯作であるが蓋し眞景である

今日よりは准士官以上が「カーキー」服と帽子の異色使用許され麥藁帽「バナマ」帽と思ひ思ひの帽子が白服の上に載せられ「カーキー」色が是に雜つて如何にも熱帯らしくなつて來た下士卒は誰も彼も麥藁帽で中々涼しそである

九日は日曜日人員調査と被服点検を行はれた人員調査は艦長が下士卒の服装容儀姿勢敬禮等を点検されるもので被服点検とは下士卒に給與されてる被服類の点検を行ふもので綻びや汚れを打ちやつて置いて分隊長に叱られるものもある元と元と海軍の下士卒は比較的複雑狹隘な所に生活して居るわけ各種の整頓手入等が周密巧妙なることは到底陸軍のものが及ばぬ所であ

る習慣性さあるの恐ろしいことも是で知ることが出来る但し中には時々手抜ありして御小言頂戴さいふことなる斯くして事は些細ながら訓練を施され依つて以て紀律を振肅されるといふことある午後は

撃劍相撲

等の遊戯を許されて元氣満々の面々相撲をやる竹刀の音も勇ましく響く銃劍術も柔道も櫛櫛体操も何でも御座れた太平洋上水渺漫たる所蒼空と碧海との間に浮世の塵を交へぬ風に吹かれながら武を練つて嬉戯する壯者眞に是れ護國の干城砲臺よりも艦よりも御國は末頼しき金城と頼んでる快あるかふだ是れが濟むと入浴た汗を洗ひ落した後價千金の涼風萬斛横溢せる天幕の下に憩ふ時は實に婆娑の有象無象の想ひ到らぬ所である春宵一刻價千金ふどいつた奴は共に語るに足らずですれ

風は斃れて流汗玉の如く瀧の如く満した上に又満する時水に冷せし「サイダー」平野水「ミュンヘンビール」眞に是れ天の美祿而も遂に我慢し切れて氷塊を口にすると言ふ有様兎角氷室は天下の至寶なりと謂ひつべしだ横須賀を出て、早や十日御國を離るゝ二千五百哩海水の温度八十幾度濃藍色は群青の壘を摩し水平線は高く膨れて油を盛つた如くに見える

入道雲幾千百蒼空を横行する所是を熱帯と言ふ實に奇峰多き夏雲所謂積層雲は疊々疊々又團々白雲黒雲を生じ大入道小入道とあり怪奇忽ちにして平凡となり千變万化百鬼晝行夕陽は是に映して五彩四色美はしく染め上げ照り返し熱帯の無風帯は雲の獨舞臺是が油の如き海に映して潮も沸りかと思ふばかり此の變化に富みて而も平凡なる光景は唯僅かに時々思ひ出した様に飛び交ふ飛魚に依つて亂されてる熱帯地方の名物海豚の千疋連れも驟雨も来らず頗る天下泰平

此の恐ろしき入道殿も暮世蒼然たる頃には早や姿を消して影もふく北極星と「サウザンクロス」を水平線上南と北に低く等分に眺め得る様になることあると此方の天下月はよし風は涼し軍樂隊の奏樂を天の樂と聞きながら

涼を納るゝ時は人間界を超越してゐる様な氣がする

珍客到来

時々海上に鳥の飛ぶのを見たが遂に一羽の木兎先生來訪した赤紐に脚を括られて体よくいへば珍客悪く言へば捕虜、それでも先生頗る得意氷室から持つて来る生肉に舌鼓を打つて居らつしやる眼玉の丸く大きいのは生れつきですから仕方ありませんと言つた風時に取つて大いに無聊を慰めて呉れるので先生大持てだ今日から愈々時計に「眞時」を用ふることにあつた今迄用ひてた標準時は「平時」と稱するものだ眞時と言ひ平時と言ふも皆天文學上の言葉である此の説明は大分面倒で天道様一つでは間に合ひまゝもよく氣候も暑く故暫く御預りする翌十一日は

被服洗濯

横須賀出港後第三面目である氣候は暑し作業は割合に骨が折れる被服は瀧の如き汗で汚れる日本内地では一週二回と定められた洗濯も熱帯では幾回やつても足りることはふい唯時間と淡水の關係から一週二三回位ひしか出来ぬ洗濯と言へば水道の水給栓から瀧の如く出る水でやる様に考へる人があるかも知れぬが斯る人は必ず天罰がある何故ならば………と向きにふる程でもないが元來艦内は淡水が少くない日本内地にある時ですら十二三人に五六斗の水しか興はない是て一人が二三枚位宛の洗濯をやるのだ陸上にある人などには到底想像も及ばぬ程である今回の如き航海には一人前の水量更に少ない而も是だけの水で何も奇麗さつぱり洗濯するのが奇妙だ、海軍の下士卒は實に洗濯學の博士といひつべしだ斯く洗濯して出た石鹼水は直ちに海に捨てふい是で甲板を洗ふのである蓋し廢物利用の「オーソリチー」だ

十三日は新嘉坡在泊の英國軍艦「モンマス」と無線電信を交換しつゝ行く艦で「アムバナ」全列島が左舷の方に見えて來た別に珍らしいでもないが陸影の見ゆるのは變化があつて面白い夕方に總員を集め愈々明日新嘉坡入港と

言ふので吉田副長から各種の心得を訓示され寺岡分隊長は

新嘉坡に就て講話

をされて日本を出で、から始めて着く港だ各自の頭には種々の事が想像されて居る、講話を聞いている顔は希望と好奇心とに輝いて分隊長の一言毎に一句毎に活々として而も無邪氣に動く恰も孫共が御婆さんから桃太郎の話をして貰つて居る様に聞いて居たのは吾等が感心した是に繼つて鈴木軍醫長の衛生講話があつた、入港に先ち陸上に於ての注意を興へる共是迄度々の講話に就て記憶を新にされた

明れは十四日今日に入港靜穩か海上には行手に當つて島の影が一つ二つ水天相接する所に浮いて見ゆ時刻の進むと共に其の数が増し其の形が大きくなつてくる九時頃英國軍艦「ペロラス」「フロラ」の二隻相前後して潜水艇を曳きつゝ東航するに會した英艦から我司令長官に對し十五發の禮砲を行ふ本艦よりは是に答へ「御機嫌ヨウ」と信號で挨拶して行く、次ぎには英國軍艦「モンマス」の同じく潜水艇を曳いて東航するに遇つた

新嘉坡島及附近の島山は其形が明かに見ゆる様にふり眼さめる様に蒼々々繁つて居る熱帯植物は是等の陸を飾つて我等を迎へて居る、艦隊は進んで

新嘉坡に入港

午後零時十五分投錨し英國の國旗に對し二十一發の禮砲を行ひ「カンニン」砲臺から同数の答砲があつた在留日本人は岩谷副領事を始めとし直ぐ訪問して来る艦は入港後の仕事で中が忙がしい港内は幾百の船舶輻輳し陸を望めば市街は綠樹に包まれ生々として見ゆる

先つて二週間の航海も無事にすんだ是から一寸骨休み當地に於ける行動は次便に譲るゝとして是で御免を蒙る

明治四十四年四月十四日

遣英艦隊軍艦鞍馬

* * * * *

古編母より第二信
首めに先づ我二艦に就て再び筆を行らう

御曹司牛若丸

が僧正坊の膝下に武を練り兵を講じ遂に大厦を脱倒に起し家兄を助けて偉業を成さしめ源九郎義經として史上あつてからぬ人物となつた其の鍛練の地は何處京都の北に登りて幾千年間皇基を護つて居る鞍馬山の奥深く古松老杉千古の色を保つて雪の且風の夕此の歴史を繰返し語りつゝあるを聞き給へ

我鞍馬は此快奇なる歴史を有する山の名を冠し洋々春の如き未來を以て我海軍に生れて來たのである而して九百の健兒總て是れ牛若丸昔の牛若は唯一人家のために努力し我九百の牛若丸は大君のため御國のために心身を捧げて力を致して居る、驕つて

坂東太郎

は如何、源を彦九郎正之の故國に發し汪洋として八州を遶り漫々として東海に朝し且に星を流し夕に帆を浮べ怒々天下の大をなすものは是れが刀水の巨流である昔は義貞の誠忠に澄み下つて彦九郎の義憤に清められ更に東湖の詩中に流入す嗚呼此天地の正氣滔々千古に流れて大和民族の血液に活精神を注入鼓吹したること幾何であるか、而して坂東太郎の名と歴史と如何にも痛快である兩岸の一樹一石も皆是上古以還の史實を傳へて太郎を飾り錦衣更に花を添へ河は遂に神州の至寶誇稱すべき一名物とあつた之を名させる利根の艦上正氣鬱勃紫雲常に懸て居る此の紫雲時々形を變へ黒雲とあつて煙突から出る稱して日本魂と言ふ蓋し是れ正氣の薫々たるものである

我二艦は斯様か豪い名を持つて居る吾々乗員たるもの此の名に負くことがあつてはあらぬ況んや横須賀發航の前艦隊の上長官以上には御陪食の榮を賜り次で侍從武官を差遣せしめられ「勤務御苦勞に思召させ給ふ」難有き

聖慮を傳へしめ玉ふ吾々乘良感微惜く處を知らず、唯全能を盡して之に答へ奉らふければ、おらぬ草莽の微民此の無上の光榮に浴す、これも身を海軍に置きたればこそ、今更ながら感懷無量、吾々は此所に繰返し之を記して優渥なる 聖旨を御國を距る五千里の地から我同胞に傳へ得るの光榮を有するを感喜するものである却説

新嘉坡に於ける我艦隊

の行動は如何に外國軍艦としては入港當時和蘭、軍艦一隻在港入渠して居たばかり、我司令長官と海峽殖民地總督及和蘭の司令官との訪問交換等公の儀式も濟み我副領事及三井支店等の艦隊乗員招待我艦に於ける副領事以下主たる在留本邦人の招待等至極愉快に行はれ下士卒は一回宛數時間の上陸を許され「ジョンストン」機橋に上れば待ち設けた我居民は案内の勞を執り親切に何もかも世話して呉れた有名なる植物園に往つたものもある博物館を見たり市街を見物したり愉快に半日を過して歸艦した石炭は十五日利根、十六日本艦が搭載した支那人の工夫が澤山に來て半ば裸体で日に焦げた肌を出し何か譯のわからぬ事をワイワイ言ひながら熱帶式に悠々石炭を積込んで居る所は氣短か、吾々は齒痒かつたけれども亦一種の奇觀であつた

和蘭軍艦は十八日に出港した又出入の漁船數多き中に日章旗を掲げてものは若松丸、河内丸、丹後丸、土佐丸、万田山丸、第三乾坤丸等であつた

新嘉坡の歴史及事情

を少しく考究しよう

新嘉坡は亞細亞大陸の最南馬來半島の南端にある新嘉坡島の南岸に在つて實に亞細亞大陸の最南端、北緯一度十八分、東經百三十五度五十一分赤道の北約八十哩に位置して居る

印度洋より東太平洋に出するに馬刺加海峽あり南に「サンダ」海峽がある新

嘉坡は前者の東口即ち歐亞に跨がる海路の咽喉を扼し倥然東洋の海上を睥睨して居る英國は此所を踏石として東洋に其巨腕を延ばした軍事上、商業上、頗る樞要なる地である

古き昔の新嘉坡は唯漁人海賊の棲家に過ぎなかつたのである、馬來地方のことが史に載せられてるのは支那の梁時代が最初のものである後「マラツカ」の名が支那人に知られて居る

十六世紀の西班牙、葡萄牙の海上横行も過ぎて英佛蘭の三國が巴にふつて東洋の海上の殖民地の擴大を争つたのは我慶長以後で當時此の地方は混沌として彼等の争奪に委してあつたのである、山田長政が鋌を遲羅に得て威を振したのも此時代である現に其の勢力馬來半島にまで及んで居る、我國民の海外横行史を緝ひて此の時代の來ると如何にも痛快であるが又如何にも痛恨に堪ぬこともある

爾來幾多の曲折を過て新嘉坡島が英國の手に入り愈々諸種の施設に着手したのは今から約九十年前で當時は僅かに二百足らずの馬來人の部落に過ぎず、東西二十八哩南北十四哩面積二百六十方哩の小島であるが瘴烟鬱、霧全島を蔽つて居たのである之を英人が拮据經營智力と金力とを用ひ東洋人の勞力に依頼して開發に努めた結果今や人口三十二萬を有する世界有数の重要な港となつたのである

三十二萬の住民中歐米人は僅に五千、支那人が約十八萬他は馬來人瓜哇人印度人其の他東洋人である日本人も千四百百居ると稱せらるゝも其大部分は例の賣笑婦と之によつて衣食して居るものである、支那人の多くは數代此の地方にあるもので支那語を全く知らぬ、されど形丈は支那人であるのも奇觀である、斯くして新嘉坡は幾多の種類の共進會の様になつて居る

但し言語は主として馬來語が用ひられて居る、陸に行つて見るさ人力車夫馬車の馭者などに種々雑多の人数があるのを目がたく

此所は自由貿易港で四十二年に於ける貿易總額約四億五千萬弗出入船舶五

千三百隻、七百萬噸内日本船五十八万噸、英國船三百六十万噸である物産は天産豊富、就中錫が重きをなして錫は馬半島隨所に存在して採掘の容易ふこと路傍土砂を拾ふと同様である此の相場は直接半島の景氣を左右して數年來又鐵樹の栽培頗る盛にふつて日本人にも手を出してゐるものがある數年後には重要物産の一とあるだらうとの話

新嘉坡島の北に一連足らずの海峽を隔て、相對して「ジョホール」と言ふ國がある英國の勢力の下にある巒挺を獨立國で公許賭博場のあるので有名な所である此の賭場は非常に繁昌し新嘉坡附近名所のひとつである

新嘉坡が建設されて後英國は漸次手を延ばし其保護の下に馬來諸州を一團として聯邦を作つた、新嘉坡は其の首府である、港は深く波は穏かに陸上は樹木繁生し、日々驟雨が來て熱度甚しからず、居住に難からぬ所である、而して港の西部には大船巨舶も横付し得る大棧橋を有し船渠もある港として必要なる是等の諸設備は英國が此の地を主要なる軍港とみなさんが爲

めの擴張計畫の下に皆官有とさかり港は改修さるべく今や盛に工事中である名所としては植物園、名物としては錫、「バイナップツアル」藤細工等で御土産にありろゝである又開發されたと言ふものゝ熱帯である野生の猿は郊外の樹梢に見ることが出来る飛狐(一尺餘もある大蝙蝠)も居る鱈、鱺、巨蛇等は勿論虎も時々海を渡つて大陸からやつてくるので中々賑かだそゝだ

四月十九日午前八時十五分岩谷副領事を初め在留民に送られ愈々錫を抜いて古倫母に向つた

新嘉坡海峽に賀賀丸の東航するに「御機嫌よう」と挨拶しつゝ馬刺加海峽に入り二十一日夕方から「ベンガル」灣に向ひ眞西へ進んだ波は穏かに朝夕の風は思ふたよりは涼しく暑熱に慣れた爲めでもあるが大分樂である熱帯名物の驟雨は二三度來たばかり、例の龍巻も一度見るを得ただけ日々教練に心身を鍛練しつゝ進み二十四日夕方は鱈釣りをやつた

大きふ先生來たけれども餌を食はずに「左様から」さも何さも言はずに姿を

隠し鱈釣に失敗に終る

艦内で行ふ教練の中に手旗信號教練あるものがある此の信號は両手に色の異つた小旗を以て通信するものであることは既に知らるゝ通りである

由來艦船では互に意思を通ずるに言語等では不可能な場合が多い、そこで各種の旗を綴つて掲ぐる信號あるものによつて遠距離でも通信を行ふ手旗信號は其の輕便なるもので頗る便利である吾々海軍にあるものは手旗信號に熟する事自由に談話し得ると同様であらねばならぬ、是れ時々稽古する

所以である
斯くして吾人は意志を通ずるに無理に言語の御世話にあらんでもよいと言ふことゝある即ち信號は一種の無線電信である眞の無線電信は數千哩の遠きに通信を行ひ信號は眼力の及ぶ所に於て無線電信の用をふす至便と言ひつべしだ近頃は小學校でも教ふる様になつて一般に普及して來てゐるから行

々は海軍に於ける手旗信號の訓練が樂にふるであらうと思ふ
二十五日には錫蘭島の山が見えた、御釋迦様の故跡のある所と思へば何となく難有思はれるふと、神妙らしいことを言ふ手合も出て來た

二十六日早朝古倫母防波堤外に達し水先案内を乗艦せしめて入港午前九時繫船浮標に繫留し航海茲に於て無事平穩に終つた

英國々旗に對する二十一發の禮砲を行ひ陸上砲臺から答砲があつた名譽領事も來訪したる在留日本人は少ふいと、洗濯屋が一人來たばかり鬱蒼たる樹色は赤色の大厦と相交り見るからに如何にも暑さうに見える陸上を眺め

つゝ、
明四十四年四月廿六日
軍艦 鞍馬

* * * * *

「ボートサイド」より第三信
古倫母は英領印度錫蘭島の首府で又東洋に於ける海港の樞要なるもの人口

(通信)

(通信)

約十九万を有す、却説

「シーロン」島

は印度半島南端の東に接し茄子の如くぶら下り其北端に点々連亘せる小島の帯によつて印度本土に取り付けられて南北二百七十哩東西四百四十哩面積二万五千四百八十方哩(約四千二百八十方里)にして我北海道より小ふるこま八百方里)山岳重疊全島を蔽ひ最高峰「ペドロタラガラ」は八千三百呎又「アダムスピーク」と稱七千三百五十呎の山がある

全島の人口明治四十年の調査によれば三百九十八万八千人、人種に數が十二種其の内歐米人六千六百人、宗教で區別すれば佛教二百二十五万人印度教百万人回教三十万人基督教四十万人である斯く佛教徒が多數を占めて居るから僧侶は勿論佛寺が多く僧侶は見た所生きた羅漢様をつくりである此の島は大分古いから支那と交通して知られて居つたらしい、最も趣味のあるのは「アダム」「イブ」が天國の樂園から逐拂はれた後當がはれた處に即ち此の島であると稱せらるゝこと「アダムスピーク」ある山あるも全く之れが爲めである此の山頂には「マタム」が一千年間片足で立つて居つた、めに出來たと回々教徒が唱ふる足痕がある所が佛教徒は此の島は釋迦が來て修業をなした又教を弘めた歴史を持つて居て「アダムスピーク」頂上の足痕は釋迦のものであると稱してゐる、是に對して印度教徒は「否々あれば濕婆(印度教の神)のものである」と言ふ

娘一人に婿三人足痕の引張願ふんで先づ珍談の部に屬すべきものと謂つべしただ此の足痕の模寫が「カンデー」の齒の寺(後に記す)にあるが其長さ約四尺ある此の島は五百年前葡萄葡才人の有に歸し次で和蘭に奪はれ約百二十年前英人の手に歸し今日に及んでる島内には處々に主とも言ふべきものがあるが漸次英人の征服する處となつたのである此の島には北の部「カンデー」を稱する處がある

古倫母から約七十五哩遠軍が通じてゐる、此の地は釋迦の齒を納めて居る御寺

(齒の寺)があるのさ土地が高く涼しく景色が佳いので有名で古倫母へ寄泊する船舶の乗客は古倫母行事の一として必ず訪ふべき所の一さあつて居る

島村長官以下士官の多數は往つて訪ふた

古倫母

は赤道の北約四百二十哩に位置し此の山の部に對する上古からの海港で恰も仁川の京城に於けるが如き關係があつたらしい、英人は是に防波堤を築造して立派な港を成した「シーロン」島の西岸稍南偏して位置し海岸は殆んど直線なふし少しも港らしい形を有して居らぬこれを南西、北西、北東の三防波堤を築造し六百六十「エーカー」(二千七百町歩)の面積を有する港としたもので工費總額二千二百三十万圓を要してゐる、此の築港に觀るに世界の如何なる海岸でも港を造り得ぬ所はないと言ふことが出来る、即ち少しも天然の恩恵によつて居らぬ、而して五月より十月に至る南西信風期であるや印度洋は暴風に暴れて百丈の怒濤は澎湃として古倫母の港一呑みさやつて來る

之れを防波堤が勇士單身大敵を引受けて奮戦する如くに難なく受け止めるのである古倫母の町は新嘉坡と同じく人種の共進會である唯支那人が一人も居らぬ艦が入港すると土人の商人が寶石類や繪葉書其の他の品物を賣りに來るが掛値を言ふのと寶石類は雙物をを持つて來るのさで油斷が出來ぬ甚しいのは郵便切手を艦に持つて來て掛値して賣らうとした奴もある、棧橋を上ると人力車や馬車が頻りと乗車を勧める日本人の在留者は極めて少數あるに關せず、日本語を解する土人があるのも一奇、彼等は日本人と見ると「シヤカアダ」(釋迦佛陀)に盛に言ふ彼等は吾々も佛教徒日本人も佛教徒而して日本人の此の地に來るものは必ず佛跡を訪ふものと考へてらしい

蛇は寸にして人を呑むの氣あり「シーロン」土人は三歳にして手を出すの乞

食根性あり此れ等の風は寧ろ意外とすべきものであるが百千來往の旅客が多年馴致せる結果であると思はれる

「ゴアラ」と稱する猛毒ある蛇が居る此の地名物の土人の蛇遣ひが「チャルメラ」の様な音の出る笛を吹いて巧に遣つて見せる此の蛇遣ひが一日艦に來た總員後甲板に於て之を見物したるが笛を吹く「ゴアラ」は咽喉を大きく膨らせながら鎌首を擡だげる毒蛇と聞く丈けに一寸凄いものである此の蛇遣ひは又手品をやる孟買の巡査が何さかしたさか言ひながら小さい不細工な人形を列べたり色々なこととして見せるが其の幼稚な見に透く様な仕方が愛嬌があつて面白ひ

歐洲より亞弗利加より日本より支那より濠洲より西に東に航する船舶は必ず此の地に立ち寄つて炭水補充をやる港である此の所に泊泊六日間これ記す可き行事もかい下士卒は一回宛上陸を許された又遭遇せる多數の流船の中に熱田丸丹後丸があつた

石炭搭載

四月二十八日二十九日の兩日
をやつた此所と藤士との間が今回の本隊行動中最長の航路で三千五百哩をこて石炭は満載と言ふことゝふる、熱帯の地如ふるに太陽は今や北に進んで赤緯十度、頭上から照らして物に陰影なく酷熱烈日の如く風は死し一指を動すも流汗を見る時々風らしきものもあるも唯熱氣の微動のみ此の如き處で石炭搭載を行ふは艦隊行事中樂でない事業の一である、されどこれば又妙に元氣を鼓舞させるから面白ろい載炭は特別の事情なき限りは艦員自ら是を行ふのである

烈日熱火の如く天を燎かし更に地を熾かんとし空氣は烽火爐から昇騰する熱瓦斯の如くである石炭殊に英國炭の粉末は翳々吹かざる風に飛んで眼に入り鼻を侵し耳を攻め口を塞き呼吸を逼迫せしめ困難は想像するに餘りある是に對し將校は水兵を督し機關官は機關兵を勵まし汗と炭粉とに全身彩

らせつゝ互に速度を競つて載炭する

砲を操る手機を握る手に石炭灰を運びつゝ片時の休む暇もなく炭粉の黒烟濃々として天日も暗き處に立ち間斷なく灰を手送りする流汗淋漓玉をふすかんで憂さしい形容詞は何の役にも立たぬ、汗は流れて瀧の如く飛び來る炭粉は所嫌はず肌を附き見る／＼全身眞黒々染め此の染め上げた色は汗のために流されて其あとへ又新しい粉が來る汗も粉も新陳代謝して手送る灰も次から次へと換り行く變らぬものは唯之を手送る人の身体ばり而して石炭を盛られた灰の流れは連續斷え間なく幾筋となく艦内に流入して石炭船と艦との間を走つて

石炭船一隻終れば又一隻猶又一隻と敵は新手を差かへ入かへ攻め寄せる何を小癩ふ振舞かふと炭煙漢々濃々たる所に引受けては射落し薙倒し時々一騎打の功名もあつて敵味方眞黒となつて相戦ふ敵がひるむ其の隙を監督の分隊長の號令で一齋に休憩する流れた汗の補充と次に流す可き汗の原料たるべき飲料水は準備され煙草の火も夫々用意されて休憩の令と同時にそれつゝ一時に元氣をつける水を飲む煙草を喫む汗を拭く煙を吹く休むのも申々忙がしい唯見る眼ばかり怪しく光る黒坊主が幾人と列んで休んでる天下の怪は此所にありと言ふ格應て又敵の新手が攻め寄せる分隊長の號令で一齋に猛然として敵に向ふ幾隻來ても石炭船は空虚にされて退り行く又炭庫内部は機關兵が居て上の積入口から落ちて來る石炭を適當に掻き散らして居るこれが申々の難業で炭烟濃密燈火は三尺離るれば見る可からず十分居れば窒息せんとする處に在りて蒸々たる熱氣と戦ひつゝ作業をふす、到底之を自撃した人に非ざれば苦熱の状況を想像することすら出來ぬ、艦は炭中炭粉の飛入を防止するため窓と窓に密閉し昇降口天窓等は覆をかき其の他炭粉の附着して汚れる様なものには總て覆をかける艦内下底に空氣の出入すべき通風筒すら閉ぢられる艦上は到る處黒塵で蔽はれ手觸るれば手が黒くふり腰觸るれば腰が黒くふる而して鋼鉄製の大艦は外よりむり

く照熱せられ其の上風が全く起らぬ空氣を動かせば却て熱い電氣煽風器も其の効ふし何處も同く苦熱の巷である又當直將校も黒く炭粉に染められてる

石炭の方が薯片ついたと見ると例の土人は早や遣つて来て艦に上げて呉れさ言ふ生憂しいことでは退却せぬ大喝する暇も付ける暇める人は眞黒お眼ばかり變に光つて居る加ふるに炭粉が眼に入つて居る暇は一向に利かぬ土人は酒蛙酒蛙として引退つて行く

載炭終つて食事各自の食卓には氷塊が供せられて一日の苦熱を拂つてくれる次で艦内を掃除し入浴して茲に一大作業を終る

五月六日の朝八時出港

亞刺比亞海へと乗り込んだ南西信風は既に吹き始めて日々南西風のみ来て右舷側は何時も何時も風下で艦内に入る處右舷側は頗る暑い左舷万歳の聲又起る古倫母を出てから三日間は一天陰凄白浪時々舷を叩いたが聽て天氣は回復し

六日は靖國神社の祭日で遙拜式を行ひ何日かは自分も祀らるべき身と遙拜かみ殉國の靈を拜して敬虔の誠を捧げた式後障礙物競走相撲等々六々の競技が行はれ滿身充隘の元氣は今日こそは吾が天地と甲板の上に威を振つた相撲半ばに幕内力士の土俵入りが行はれば奇想天外より落ちて化粧禪さあり、土俵の上で「シート」さやる處は天晴れ天下の力士である、相撲甚句がやんやの喝采を博した夕食は特に許されて上甲板の天幕の下で清新なる涼風に浴しつゝ士官以上は後甲板に下士卒は前甲板に一家の如く團樂して平和に愉快にやつた下士卒の方は平素の麥飯に代ゆるに五もく飯其上更に御馳走がある而して正宗、「サイダー」「シトロン」「ミュンヘンビール」「パイナップル」などが賑かに列べられて景氣を添へて

日は西方水平線下に入り殘照は天を射て熱帯の變化窮りなき雲に映じ眞紅棗色橙黄淡紫と人間の手では決して出来ぬ色彩のあらゆる配合を以て空を

彩り染め返むし紺青色の海に反映しては金黄色のうれりを染め出し緩やかふうれりの上に漣幾千百條、金色紫色紅色濃新色の縮緬の巨帛は海を蔽ひて際涯かく異なる色の境界は互にばかりして新たに描き出される畫にも口にも筆にも説明することの出来ぬ美しく崇い景色を眺めながら先づ一杯に君萬歳を奉祝し殉國の英靈を祭り徐ろに而かも底に力ある熱帯の涼風に吹かれながら楽しく語りつゝ、飲みつゝ、食ひつゝ、連日の苦熱を忘れて居る間に日は全く落ち代り日は八日の月晴れたる空に斜に懸り波は銀、鱗滝倚さして涼氣は更に清新、應て宴は終つたが吐き出す氣は虹の如く天に向て嘯げば星は極爛月は明かに浴世の塵は絶えて來ず身も心も清く自分は人の世を超脱して非常に豪くあつた様か心持がして清夢曠快浩然として心が洗はれた、以爲らく静かある時は鏡の如く怒號すれば天日を呑み地軸を揺がす渺茫たる海洋は以て浩々濶達蒙宕の氣を養ふべく吾人波上にあつて將に天恵の大なるを謝するのである而して忠誠なる英靈も笑つて之を首肯することと思ふ

印度本土の尖端を右にして進めば「モンコイ」と言ふ島がある「見に来い」と言ふからには何か特殊のことでもあるかと思ふ「醜い」島であるさか此の島の名日本人にして初めて成程と了解が出来る考へ横によつては頗る面白ひ名さなる、序を以て御披露に及ぶ

艦は亞丁灣口に向ひ約西北西の方向に進みつゝある經度の變化は一日約四度時刻は眞時によつて毎日正午の艦位に對する時を翌日正午迄用ひ正午にかゝる其時の經度により多少はあるが約十五分宛時計を後にして行く、かゝるが故に正午より正午迄の時間は二十四時間にあらずして二十四時間十五分五十秒と言ふ様かものさなる而して緯度よりも高い故艦の北方を通つて併し一寸見た所では殆んど頭上である朝から晩まで頭上から直射御親切により照らして呉れるので肌は潮風を浴した上を黒く染め上げられ御陰で病氣ふんてものは起らぬが熱いので難有迷惑

機關部員の勞苦

此の際艦底三十呎の箱の如き瀛室機械室等にあつて當直しつゝ艦の航進に努めつゝある機關部員の勞苦に就て試みに考へて見給へ蒸氣壓力二百噸の通風裝置は活潑に運動して新鮮冷涼の氣を送り入れ熱氣の排出に盡しつゝあるも艙室内温度百四五十度而して艦上の氣温は九十幾度此の熱い空氣が送入されても下では是を歡迎する位ひである此の焦熱の室内にある機關部員の狀や如何に、艦の乗員として定められたる機關部員數は少くはあゝいさりながら之を各種の機械に配すれば極めて少數さる艦が活動してゐる以上艦に備へ付けてある機械類は大小さなく之を運轉する必要がある航海が日本近海に於ける如く連日の長航と言ふても十日を出ずること稀に損所を生ずれば之を修理すべき工場さ時日に乏しからず、氣候は溫和に航海の行動を束縛する事情が少ない場合は話しにあらぬが

遠く派遣さるゝ艦

に在つては行動上諸種の事情が束縛がたく一日の延引も許さない機械の取扱上些細なる注意の不足も延びて艦の行動を左右するに至るこゝがある之に對する策として取扱を任ずる人に常に新銳の氣を維持せしむるため可成多數の人を用ひて新陳交代作業に服せしむるを要する然れ共人員には限りあり各員は必要に對する最少限の數を以て苦熱と戦ひつゝ少しも故障を生ぜぬ様機械の取扱に従事せればからぬ斯くして航行の際には晝夜の別なく百二十度乃至百四十度の所で働くのである空氣の流動は極めて少く火を焚くにより蒸氣の熱により室内の暑さは所謂蒸し熱い頗る不愉快かものさるこれに油の香が加つてゐる、各種の機械は間斷なく運轉されてゐる幾百個所の摩擦部に熱を生じたら大變、幾百個の「ピン」や「ナット」が緩んだから一大事機械は少しも緩まず焼けば圓滑に動く機油の如き汗の中に働いてる
 鹹て瀛室を見る炎々たる火焔は爐内に熱を吐いて此の「エチルギー」を水に傳ふべく燃えつゝある機械の運轉を順調平滑ならしめんがために氣壓を

一定に維持するを要し焔は此の爲めに注意深く調整される而して此の火力の調整の甚だ困難あるに加へて石炭の消費の顧慮すべき必要がある千噸の石炭を以て同速力で千哩を航し得るさ千二百哩を航し得るさ軍艦として價値に大差を生ず即ち經濟上の問題は別として石炭の消費を考へればあらゆる焚火の術も亦難いかゝで單に石炭を投げ込めば可ふるが如き考へは既に古い昔のことゝあつてゐる又一方では汽罐の水の高さに少しも油斷があらぬ水の高さ換言すれば罐内に入れ置くべき水量は一定の基準があつて過不足あるを許さず過ぐれば熱の供給不足となり水量足らざれば汽罐を損する此の水量調整又一難事で大の熟練を要する他方では炭庫から石炭を操り出す仕事がある炭庫の構造上石炭の繰り出しが困難なものが多い従つて此の繰り出した作業は最も苦しいもので炭粉は濃々暗憺人は

石炭と汗の裡を泳ぎ

つゝ仕事するものと思えば大差はない此の困苦は五千万の同胞必ず記憶して忘れざらんことを望む、要するに機關部員の勞苦は熱と汗と油との裡に泳ぎつゝ苦戰惡闘することである、機關部員が此の困難に對する抵抗かは即ち艦の戰鬥力である碇泊すれば次の航海の準備に機械類の手入を行ふ、航泊の間はず機關部員の勞苦は想像以上幾倍して居る、四時間の當直を終り上甲板に出て涼風に吹かるゝ時の快味は之を未だ味はぬ人に語るも了解は出来ない又當直中流汗頻々として渴を促さる一掬の水に咽喉を潤はす時の其味醒の水は物かは此の水の味に勝るものは又ささいのである、而して通風筒送風器等の口に立つて冷風に浴する時はこれこそ神風である命が延びる前には石炭積ばには機關部員の苦狀を記す、徒らに困苦を訴ふるものさかす勿れ樂あれば苦あり

唯見れば何の苦もなき水鳥の足にひまなき我思ひ哉
 人は吾人の樂みの方面のみ見てるから聊か苦の極めて小なる部分を描いて暇さきあしの運動を一寸御覽に入れたばかり

(通信)

八日午後八時二十分「ソコトラ」島の北を過ぎて亞丁灣に入る亞丁は此の灣の北岸にあり英國が紅海南口の押へさして防備堅固に守る處次は「パベルマンデア」海峡此の海峡の中央に頑張つてるのが英領「ペリム」島之を入れ

紅海

さかる長さ千二百哩幅は最廣は百八十哩船の形をして頭を北に向け其左角の尖端が「スエズ」である東は亞刺比亞、西は亞弗利加の大陸に挟まれ氣候の蒸し熱いで有名な處今回には常に微風があつたので開いて居た程烈しくはなかつた北へ上つて行く此所は天下の大道だが來往する汽船には日に二三隻會つたばかり想像より少し小さい艦が一羽やつて來て「ガムルーム」の客分さかり日々牛肉を一皿づゝ平げて頗る元氣臺灣附近で來訪した水鬼と交代と言ふ工合

十四日午前十一時東經三十六度五十四分の所で溫帶に入つた此のためでもあるまいが吹き來る風が俄かに涼しくなつた亞丁灣に入つて以來空氣が極めて濕潤で夜にふると上甲板は雨の降つた様になり風も生暖かつたのである

十五日の夕方「ジュバル」海峡を過ぎて「スエズ」灣に入つた右には「シナイ」半島の連山高く聳え左には亞弗利加の地が微かに見えて、島と云ふ島山と云ふ山は全く赤禿で草一本生ねて居る真の砂礫の固塊で寂寞凄愴を極めてる兩岸沙漠の此の灣内の島としては當に然る可きものである大陸は海岸から數哩の間緩傾斜の沙漠でそれから例の赤裸々の山が隆起して沙の海に山がある様なもの陸地は此の如し少し風が吹いても沙塵が立つ、これある哉紅海に入りてより一日さして濃氣海を望めて遠望を妨げ艦内に沙塵のたに汚れるこゝ北風吹く時の旅順沖に異らぬこゝ之れ即ち沙塵が濃漠として紅海を蔽ふてゐるからである此の夜空氣異常に乾燥し乾濕寒暖計の差約二十度に達した十六日早天愈々蜩蟬の角の端に到着陸を望めば紅色の

人家が微かに眼に入る艦で燈臺立標等を右に見左に換へして午前八時

「スエズ」運河

の南端「ポート・ヘューフィック」に投錨した見渡せば港内拾數の船が在泊し

「スエズ」の町は北方遙かに沙漠の上に立ち瀛車が往來したる

「スエズ」地峡は北は地中海に洗はれ南は紅海に臨み其幅七千哩足らずであ

る土地は沙漠高きは最高七十尺位古來此の兩海を連れよこしたものは澤

山あるが成功してない所が今より五十餘年の昔佛國の人「セツプス」が運

河開鑿を計劃し「スエズ」運河會社を設立し千八百五十九年八月初めて工を

起し數万の人夫を使用し幾多の困難と戦ひ万難を排し十年の長日月を経て

竣工し明治二年十一月十六日盛大なる開通式を以て之を世界に開いた長さは

八十七里其の三分の一は湖水を利用して現時通行し得るものは吃水二

十八呎の船までである工費總額二億万圓と稱せらる附帯工事の大なるもの

としては「ポートサイド」(運河の北端)「テューフィク」(運河の南端)兩港一

部の修築及埃及の首府「カイロー」から「ナイル」河の水を引く淡水運河(全

長約二百哩)を此の兩港に造れることである淡水運河なるまでは運河工事

の場所迄毎日三千頭の駱駝に「カイロー」附近から淡水を運搬せしめたと聞

く十七日午前十時三十分出港運河に入る皇國は今や五月の初夏菜花の上を

帆前船が走つて繪の様である、然るに此の地方は沙漠兩岸の沙丘低く

して艦は沙上を行くが如くである斯くて夕方「ティムサー」湖に着一泊し今

朝出港午後二時「ポートサイド」に到着茲に最長最難の航海を終つた

明治四十四年五月十八日

「ポートサイド」 軍艦 鞍馬

* * * * *

「ジブラルター」より第四信

五月十七日午前十時水先案内人乗艦せしめ鞍馬を先きに兩艦約二千米の

距離を置いて

「スエズ」運河に入る

運河入口の西岸に運河會社の建物と猶二三の家がある其附近一帯に茂れる樹下に見物人が如何にも珍らしそに見て居た、通河の規則として五節半以上の速力を用ふることが禁じられて本艦の速力は約五節であつたが時々水勢兩岸に激して砂の洗ひ落さるゝのを見た、通航料一萬七千圓の幾割は運河の埋貨とある譯である河の東岸は開放し其の儘の處が多く砂漠は遠く天に接し目を遮るものも無い西岸は大部分護岸工事が出来て居て土地は處々樹木が茂り矮草が思ひ出した様に斑々点生し加ふるに丘阜の起伏凹凸稍著しく南西には「アツタウ」裸山紫褐色を呈して控へ「スエズ」の市街は其麓長く引いた礫の端に淡紅色の一塊をなして居る

淡水運河も鐵道も西岸に沿ふて通じてる淡水運河は幅約一間の淺い溝であるが其兩岸數間の地は草木繁茂して砂漠には見ることの出来ぬ肥沃な景を呈して居る即ちこれにより砂漠でも淡水を灌溉すれば相當に木や草が生へるさ云ふことが知れる又河の西岸には三四哩を隔て「ステーション」があつて淡水の供給通船船前に關する通信々號などをやり夜は燈臺の用をふし番人の家があつて草木が培ふれば綠陰には涼風が吹いて居る河は南端から十數哩は眞直に正北に向ひ轉て小「ピツター」大「ピツター」の兩湖を過ぎ運河の中程にある「ティムサー」湖までは北西に走る運河は約二十哩は湖水を其の儘利用して居て上記三湖の外「バラ」湖を通つて我二艦は十七日夕刻「ティムサー」湖に入り運河通路を避けて投錨した商船などは夜間は「サーチライト」で前方を照しふがら通過して居るが我艦は夜航をやらず翌朝七時投錨北上した

河幅は狭いから手を伸せば岸に觸れんとする位艦の過ぐるや「アラビヤ」土人（此邊の土人は一般に「アラビヤ」種である）の眞裸体の眞黒な小僧が何か有りつかうと思つて犬の吠ゆる様か奇聲を發しふがら岸を走り艦について

（通信）

來るこれに「ビスケット」や銅貨などを投げてやるに大喜び慾の深い奴にふる澤山に貰ふとして六哩も七哩も馳けて來るのがある又時々流車の走るのが見ゆる車体は淡紅褐色に塗られ遠望すると砂色と見紛ふ程である河岸一帯の建物も亦然り動物の保護色と同じと言ふ譯でもあるまいが感心せぬ、但し鐵道が廣軌であることは特御斷して置く所々野羊の群を見るに大なるは數百小なるも數十の一群が番犬に護られながら二三の牧者に従つて徘徊して居る様は畫にあるもの其の儘で水草を逐つて遊牧する種族の傍を想はしめる殊に牧者の風態が黒白の布に身を包んだ「マホメット」式で其の光景が埃及邊の昔話にありそだ又岸上に見る土人の風貌外觀は總て「マホメット」式で所謂回教徒の畫にあるものと寸分違はぬこれまで新嘉坡や古倫母で見たものは皆佛敎式の土人であつたが今「マホメット」式を見るに珍らしく感ずる而して是等土人住家は木造の極めて粗末なものの降雨の極めて僅か土地まで防雨に關する考案を有せぬ約五尺立方の家さ話のよりは寧ろ箱と稱すべきものこれが砂上に置いてあるだけ引越すには家財道具を家に入れて家ごと背負つて歩けるさ云ふ工合世界に於て家を背つて歩くのは蝸牛と寄居蟲（やどかり）と此邊の土人ばかりだと思ふ土人の此家と相對して奇なるものは河上の舟に造られた白人の家である是は又如何にも涼しいの—だ

「バラ」湖から北方約二十哩は「ボートサイド」迄正北に直行して屈曲しふい此の湖の北に「カンタラ」の渡しと言ふのが有る隊商の交通路であつて幾十の駱駝の群が岸近く渡されるのを待つて居る立てるもの坐せるもの臥せるもの様々々態をして居るが背には荷を載せて何れも悠揚迫らず落着いて居るものば脚を三つに折つて居るが坐つて居る人間の腰の邊によく似た形をしてた、其長い首を前に出して居るのは如何にも重さであるが何んでもない筈だと言つた様か頗つき

河の護岸工事や浚渫は絶えず行はれ毎日活動して居る、浚渫船や小艇瀛船の

數は本艦の會したものでだけでも數十隻ある、又土人の舟が細長い帆を斜めに張つて來往するのに度々會した「カンタラ」以北は渺茫天に接して際涯ない「メンザレ」湖を西に見て進む「ポートサイド」から數哩手前で湖上鵜の様な鳥が幾十万と群をなしてたのは奇觀であつたこれは「フライング」(紅鵜)の一種であるをうだ

「ポートサイド」

に近づくに砂に似た色の高樓巨屋軒を接して我を迎ふる如く高い水の塔を左に見て愈々到着運河會社前の河岸に沿ふて艦の前から鋪や大索を以て少しも動かぬ様撃泊した即ち船艦擱泊をやつた時に十八日午後三時

「ポートサイド」と言ふ所は運河の北口として鑿河と同時に建設築港されたもので此の地方の行政を管する埃及の政廳がある、埃及の首府「カイロ」(瀛車四時間程又基督教徒の聖地「エルサレム」へは東北約八十哩此の地は世界有數の給炭地で炭種は英炭であるが一週間に十萬噸供給することは珍らしくない本艦は十九日に石炭搭載をやつた、載炭には「アラビヤ」土人の苦力を使ふが色が黒いだけに石炭の黒いふどは少しも御構ふして頗る速い又淡水運河あるため淡水も潤澤で嘗て明治三十七年十一月下旬露國波羅的艦隊「フェルゲルサム」支隊の二十一隻に三千九百噸の水を供給したのは名高い話、「カイロ」に行くには此の地方からするのが最も便利である島村司令長官以下數多の士官が五十年の古跡を訪ふべく往かれた「ピラミッド」「スフィンクス」など中々面白ひそうだ

二十日清國軍艦海圻が戴冠式參列の途上司令官程璧光の將旗を掲げて南から到着した此の司令官は日清戰役の時威海衛陥落の際丁汝昌の使命を我軍に齎した人で島村司令長官は當時參謀として是に接したものだ云ふ二十一日に互に訪問を交換された此の他相會した外國軍艦は蘇士では伊太利の「アレチューザ」と「ポートサイド」で葡萄牙の「レパリカ」である是迄は大分暑熱に苦しんだが此の地に來てから俄かに冷涼となり氣温八十度、大

きに淺きよくなつた唯晴風が陸上の沙塵を遠慮なく吹きつけるには少々かち不愉快に感じた

二十二日朝出港

運河完成者「レセツプス」の銅像を左に眺め港外に出て埃及國旗に對し禮砲を行ふこれ港内では禮砲を行ふことが許されぬからである陸の營所から答砲があつた「ポートサイド」沖で投錨して教練中清國軍艦海圻がやつて來て禮砲を交換し御先へ御免と西へ去つた同艦は英國へ直航すること、氣候は涼しくあつて何をすることも適當な時節であつたそこで

二十三日から日々各種の教練に心身を鍛練し熱帯地方の暑熱のために不知不識緩んだ肉を引締めて時は夏ながら恰かも夏から秋に入つた様か心持で元氣も益盛であつた、二十四日より二十六日まで北西の強風連吹して白濤濤々として舷を打ち艦も動搖して櫂須賀出港以來初めての天候艦に弱い連中はびく／＼もので居た、風は二十六夕刻から風で浪も靜かにあつた但し濃氣は何處までも取れない、地中海ふど、輕蔑して一寸拗れた様もの二十七日の朝は「マルタ」海峽右は伊太利の「シ、リー」島左は英國が防備堅固に地中海の死命を制する「マルタ」島である此の海峽に於て遙かに東方を望んで

第六回日本海々戰紀念を迎ふ

海峽は小なれど朝鮮海峽に似て居る、昨日までは風波が大きかつた、濃氣は依然として深い日本海々戰の日を回想して何とも言へぬ感愴更に一層の深きを加へた午前八時半紀念式を舉行し當時海軍及聯合艦隊に賜つた世にも難有き勅語を奉讀し心に同海戰死者の英靈を祭り石井艦長吉田副長から其の時のこゝにつき詳細な御話があつて一同當時を回想し肉體り骨鳴るの感があつた而して此の時此の地に海軍の紀念日を祝したる吾人は更に幸福なるを感した、世界の海上王英國が其の海上勢力を培養樹立した歴史上の實物を遠く近く右に左に望み其の最も著しき一つを眼前に置いて色々考

へて見るさ湧き出する感懐更に盡くるを知らふ、今は暫く之を措て彼の時のことを回想せしめよ、敵艦隊が臺灣の東に来てから以後の消息不明であつた時我國民の感は如何であつたらうか、「敵の二艦隊見ゆ敵は東水道を通するものゝ如し」と哨艦の警報を聞いて聯合艦隊の將士三万躍躍之に向ふた時は今猶想ひ出して腕が鳴る

敵艦見ゆとの警報に接し聯合艦隊は直ちに出動是を撃滅せんとす本日天氣晴朗ふれども波高し

の警覺を得たる我國民は如何なる感じがしたるか、若し不吉にも敗戦したる大變我邦土を如何にせん更に滿州にある百万の將卒を如何にせん

皇國の興廢は此の一戦にあり各員一層奮勵努力せよ

の信號は掲げられた時全艦隊の士氣大に振ふ回想して茲に至れば身は六年前の大海戰場に在るの感がある 天皇陛下の御稜威と神靈の加護によりて大勝を獲て世界を變動した時の我國民の感は更に如何であつたらう

爾來茲に六星霜世運は幾變轉じて吾々は益々責任の大なるを自覺する「勝て兜の緒を締めよ」の東郷司令長官の訓戒は一日も之を忘れてはならぬ式を終て停止漂泊端舟競漕を行ひ頗る痛快であつたが最後に僅か一尺の差を以て利根に勝を奪はれたのは實に際どい所で残念であつた

午後には撃劍の紅白勝負を行ひ後甲板上兩軍入り亂れて竹力の音勇ましく龍鬪虎搏壯快を極めた、夕方合戦準備教練で日本海々戰當時追想を更に深からしめ、これで元氣は益々旺盛に天氣も辟易して、此の夜は穩かに過ぎ翌日は日曜日で分隊点檢を施行され次で島村司令長官から訓示を興えられ紀念すべき五月二十七二十八の両日茲に更に忘るゝ能はざる日となつて愉快に終つた、二十八日夜から天候又も險惡風波大さなり二十九日も過ぎ三十日は英艦「クレスセント」と無線電信を交換しつゝ進み三十一日午前一時三十二分北緯三十六度五十二分の處で西徑に入り午後西班牙の連山を濃氣の裡に右に發見し初めて歐洲大陸を見た、今朝は濃氣のために陸が少しも見

(通信)

はす漸く「ジアララター」の巖山を見付け出し英國が地中海の咽喉を扼し難攻不落と固めたる千五百尺の絶壁下を過ぎ歐羅巴岬を廻つて午前九時半到着、英國方の好意により防波堤内に入り浮標に繫留した(未完)

明治四十四年六月一日

軍艦鞍馬にて 鈴木寛之助

●淺野達也氏通信

(山崎、松原教授宛)

全氏は昨年十一月本校を卒業したる後ち上京し三井慈善病院にありて研究中なり

護啓時下春暖無類之候に御座候處例により御座右益々御清康之段奉遙賀候毎々何彼と御配意に預かり感謝主極に奉存候其後終始念頭に懸かり乍ら何候之禮を曠ふし背徳何卒御寛容願上候

拙者儀去る一日出京御配意により兎も角三井病院を尋ね木村院長に寸刻の面談を許され小生の願望を陳述仕り候然かる處院の規定にては醫員又は助手たることを得るは東京帝大の卒業生に限り他は研究生又は講習生として許さるゝのみに候由但し後二者も或る時明を限りて且つ人員を限りて募集する規定に候へば突然出京して直ちに應募せんことは殆んど不可能に有之候只だ寸刻の面談に有之候へば同院の詳しき事情は知るに由ふく候へ共講習生の如きは其實盛だつたらぬものあるか、奉愚察候今一つの研究生の方も小生出發の際に應募の時期已に過ぎ去り居り候へば斷念仕り候何にして小生共は東京と云ふことに就いての智識は殆んど皆無にて今回ば始めての事に候へば出るにも入るにも不便至極某處に行くにはどの電車に乗るべきにや某區ほどの方面に當るや等の事さへ一向に別り不申茲一月月程は斯う云ふことを知るのも小生に取り一つの學問に有之候べし一通り東京と云ふことに就いての智識も得られんには猶改めて三井病院の規定乃至至模樣など

五五

も詳報すべき機会も有之べく奉存候次に小生自身の事は御配意により山本君塚本君其の他二三學友を相尋ね四方山の談も致し且つ修學の模様手續等をも聞き糺し一方三井病院のこゝ御流れ相成候へば之れに代はるべき處を求むるの必用は小生に取りては焦眉の急と存じ種々愚腦を絞り候末遂學友の勸誘も有之三浦内科(謹之助)に介補として通勤することに致し三四日前より通學罷在候次第に候介補の務めは萬々御承知にも有之候はんが該内科の講義聽講、病床講義、傍聽、外來患者救療の處方記載(僅し助手の指揮により)等に有之其の他望みによりては病解の傍觀主に先生又は助手に懇願せば病室廻診の時隨伴せらるゝ便法も有之候由塚本氏など此頃肋膜炎穿刺液より結核菌証明の事に着手致し居らるゝ様聞及び候勿論山本氏や塚本氏やふどは講義の時臨床講義のさきふど常に邂逅致居り候

介補のふすべきことば上述の如くに有之候へ共小生共は最も新參者に有之候へば一向事情は分かり不申事情の分かる迄は講義、臨床講義の傍聽位に止め餘まり差し出がましきことをふさぎる様に心懸け居候其の中に様子も相別かり候はゞ處方を書く方へも廻はり病室廻診の隨伴等を懇願する機会も有之べきかと存じ候

金澤出の人にて介補たる人に入澤内科にては山本直枝君、塚本君、三浦内科にては井上元君(數年前の卒業生の由)河崎君(三年前の卒業生)と小生外科にて一人(名は相忘れ申候)其他聞けば猶有之やも知れず候へ共詳しきは存じ不申候

猶詳しきは爾後折々機に乗じて執筆仕度存居候目下の處は赤ん坊が廣海に突然投げ出されたる如くに周圍の事情もど薩張り相判かり不申されば學事の參考とすべき材料も申上げた候へ共此の邊に就いては日猶淺き事とて一向に無案内永陽の中には何れ見聞の点々傳へ可申候何かの役にも立ち申候へば本懐之れに過ぎず候

別紙三井病院規則畧書一通送附仕り候間後日小生の如く同院へ參り度き考の者も有之候はゞ御參考に供し被下度候
諸先生へは別書不仕機會も有之候はゞ何卒宜敷きに鶴聲願上候乱筆平に御免被下度先は要々迄斯くの如くに候恐惶頓首

三井病院研究生規程

- 第一條 本病院ニ於テ一ヶ月以上醫學ノ研究ニ從事スル者ハ本規程ニ從フヘシ
- 第二條 研究志望者ハ醫術開業免狀ヲ有スルモノニ限ル
- 第三條 研究志望者ハ願書ニ研究科目及研究期間ヲ記載シ履歷書ヲ添ヘテ本病院長ニ差出シ許可ヲ受クヘシ
- 但研究科目ハ一科目又ハ數科目ヲ志望スルコトヲ得
- 第四條 一科目研究志望者多數ナルトキハ其人員ヲ制限スルコトアルヘシ
- 第五條 各科目ノ研究志望者多數ナルトキハ特ニ一定ノ時間割ヲ作製シテ講習會ヲ開クコトアルヘシ
- 講習會ニ關スル細則ハ別ニ之ヲ定ム
- 第六條 研究生ハ研究費トシテ一科目一ヶ月金拾圓ヲ前納スヘシ
- 但既納ノ費金ハ如何ナル事情アルモ之ヲ還付セス
- 第七條 研究生ハ本病院長ノ指定シタル講師ノ指導ニ從ヒ研究スヘシ
- 第八條 研究生ハ院長又ハ講師ノ指揮アルニアラサレハ本病院ノ患者ノ診療ヲナスヲ得ス
- 第九條 研究生ハ本病院係リ員ノ承認ヲ經ルニアラサレハ猥リニ本病院ノ器械藥品又ハ圖書ヲ使用スルヲ得ス
- 第十條 研究ニハ本病院ノ都合ニ由リ醫員(無給)事務ヲ囑託スルコトアルヘシ

講習會規則

第一條 講習會左ノ科目ノ中ニ就テ會員希望者一定ノ數ニ達シタルトキ之ヲ開クモノトス

内科、外科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚蠱毒科、婦人科産科、病理解剖、
第二條 講習會員ハ一ヶ月前ニ其開期及科目等ヲ廣告シテ之ヲ募集スルモノトス

但會員ハ醫術開業免狀ヲ有スルモノニ限ル

第三條 講習會ハ約四週間ヲ以テ一期トス

第四條 講習會員ハ一科目二十名以下トス

第五條 講習會ハ講習費トシテ一科目金拾圓ヲ前納スヘシ

但既納ノ費金ハ如何ナル事情アルモ之ヲ還付セス

第六條 講習會員ニハ別ニ定ムルトコロノ研究規程ヲ準用ス

第七條 講習會員ニシテ講習會終了後猶ホ引續キ研究生タラントスル者ハ

前條研究生規程ニ依ルヘシ

因ニ記す氏ノ宿所左ノ如シ

東京芝區田町五丁目淺野方

淺野 達也

●生沼曹六氏通信

(松原教授宛)

同氏(三十一年卒業東京慈惠醫學專門學校生理學教授)は獨乙留學を卒へて目下英國に研究中あるが今や其多大の業績を擧げて八月中旬伯林を出發し九月上旬敦賀着の豫定なり切に今君の安着を祈る

拜啓宛へ御發達の十全會雜誌先頃當地へ轉送され確に落手仕候難有御禮申上候學兄には益御精勵御勉學の事々奉察候小生は愈歸國の時期迫り萬事に名残り惜く存候扱て英國は小生のかれ／＼興味を有したる國にて一度此國の學生の生活や學者の研究態度を見度きものと存じ居り候處より遂に留學期中より數月を割きて此地に送る事と致し去る三月末日名殘の盡きぬ獨逸

國を旅立ち佛國を経て四月上旬英國にたどり着き月の半頃より當劍橋にまゐり目下生理實驗室にて研究に従事致居候英國大學の制度は日本獨逸の之れさば大に趣を異にしたるものにて各大學特殊の方針を以て經營され居り申候其内牛津大學と劍橋大學とは何れも千年許の歴史を有し其方針も相等しく最も英國流教育の顯著に發展したるものと存候當大學の特徴とする所は即ち College. にして當地には實に十七の「カレエヂ」有之申候「カレエヂ」の創立は大學より稍若く最も古きセント・ピーターカレエヂが七百年前程前の創立と申す事に御座候「カレエヂ」の性質は全く小生の想像したるものとは異りたるものにて一種の大學寄宿舎に外ならず候大學々生にして何れの「カレエヂ」にも屬せざるものも有之候得共是れは甚だ稀れに候又「カレエヂ」に屬するも「カレエヂ」内に住せず大學公認下宿とでも申す様な素人居に下宿せるものも有之申候得共是れ等は何れも例外にて大多數は何れかの「カレエヂ」に屬し其所屬「カレエヂ」内に寄宿致居候此「カレエヂ」には即ち英國紳士養生の本家本元にて牛津又は劍橋の「カレエヂ」生活を送りたりと云ふ事は即ち本場仕込の英國紳士ありと云ふ裏書附に外ならずして恰も獨逸に於て血闘の刀痕を有するものは大學生活を送りたりと云ふ確實なる証據あると同一に御座候「カレエヂ」は一種の寄宿舎の續あるものゝれども日本の寄宿舎とは大に趣を異にしたるものに御座候我邦諸學校の寄宿舎の様あるものれども日本の寄宿舎とは大に趣を異にしたるものに御座候我邦諸學校の寄宿舎生活と云へば賄征伐が缺くべからざる年中の行事のみに數へらるる程の身じめある又一方面より云へば大に安直なる生活に候へ共當地の「カレエヂ」生活は全く其反對で中々上等なる生活の代りに經費を要するとも夥しく三學期千五百圓乃至二千圓に御座候大學の學生に加ふる所の制裁も中々嚴重なるものにて特別なる場合の外は夜間十時以後の外出入を許さず大學の學生監は二名の屈強なる壯丁(「アルドック」と稱し)シルクハット)及燕尾服を着用して「プロククター」に隨行す)を率ひて市中を

(通信)

巡邏し學生を監視すると云ふ有様に御座候學生も亦自ら重下獨逸學生に見るが如き放逸なる行爲は餘り見受け不申候何を扱て貴族國の貴族學校の事に候得ば萬事に就き Varsity の Town. その間には截然たる區別ありて獨逸大學の學生に見るが如く市井の士女を相携へて談笑し觀樂すると云ふが如き事は當地には絶て無之所に候概して申せば當地の學生生活は大に小生の氣に入り申候

扱て獨逸の生理學界と英國の生理學界とを比較すれば量に於て英國は到底獨逸の敵には無之候へ共實に於ては英國必ずしも獨に劣らず存申候御存知の通今日の生理學は前世紀に於て獨逸に續出したる生理學者の力に持つ所頗る多く御座候得共是れ等「オーソリチー」の漸く凋落したる今日の獨逸生理學は既に全盛時期を經過して今日は僅に其精力を以て進みつゝあるが如き觀有之申候之は獨り小生の見る所あるのみならず獨逸學者中にも此見をなすもの少ふからざる様に見受け申候

小生は本月三十一日當地出發再び獨逸に入り目下ドレンスデンに開催中の萬國衛生博覽會を見物し萊府に立寄りて舊師舊友に暇を告げ八月中旬伯林發の瀛車にてシベリヤ經過歸國の途に上り可申候何れ近々拜眉の期も有之事と存候御無沙汰御詫傍近狀報道斯の如くに御座候頓首

七月十六日

●平原雲新氏通信

(十全會宛)

全氏は三十三年に本校醫學科を卒業して郷里なる鹿兒島縣川邊郡西加世田村大浦町に開業せられしが此度奮然立て南洋諸島を拔涉し目下シンガポールにありて今其書信に接す快男子の壯舉眼前に髮鬚たり吾人は殊に深く此の如き快男子の會員中より出でたるを名譽とし切に全君の健康と成効とを祈る

因に全氏の宛名所左の如し

Dr. Hirahara

Japanese Dispensary

No. 14 Middlewood,

Singapore.

拜啓各位益々御多祥之段遙賀候扱て小生儀本年四月末古郷出發南洋諸島觀察の目的にて聽診器一本にて無錢旅行を試み申し候五月初めボルチオ島に乗り込み暑氣を犯して田舎まで駆け廻り隨分危険に且又大に愉快に接し申候全島附近諸島を廻はり目下シンガポールに固着致し當市遠藤氏の經營に係はる日本大藥房院主任ドクトル醫學士岩橋氏の後を受けて全院へ在勤仕候左に感想の一編を申上度候

先づボルチオ島着早々例の熱性病に接し申候最も當時該地方在留日本人は殆んど熱性病に罹り全滅の有様にて親しく其の患者に就き治療等を試み申候と息るときは直ちに熱發すること妙に御座候氣候は左程に暑からず又晝夜の溫度の劇變も少くのみならず晝夜共に時々涼氣を感じて堪へ難き様も無之候へども只々非常に溫氣多く爲めに斯く健康を害するものかと存し申候元來當院は創立以來既に九年の星霜を経て從來の統計に俵れば「マラリヤ」熱性病患者は其の過半を占め小生就任以來日猶淺しと雖も殆んど「マラリヤ」研究所の如き感を來し申候「マラリヤ」に對しては其の特性並に人種等の關係等に就て後日委細申上べく候早々以上 (七月二十二日認)

●加藤鐵作氏通信

(下平教授宛)

全氏(四十年卒業)は目下左の所にありて熱心に研究中あり既に「ドクトル」を得られたることあれば近き將來に歸朝せらるゝことあらん

Dr. K. Kato

Weender Chaussee No. 41.

Göttingen, Deutschland.

謹啓其後は多忙に紛れ御無沙汰を蒙り何卒御海容願上候時下日増に暖氣相催しまいり申候處先生には益壯壯榮の段慶賀の至りに奉存候故國は最早梅花満開の時期も過ぎ追々暑氣に向ひ申候事と推察仕居申候當方も追々暖氣相加はり目下は木の葉も日一日と綠葉を帶ひまいり至極好時期と相成り申候十全會雜誌二部御送附に預り難有奉存候久々にて母校の近況も承り誠に嬉しく感じ申候扱小生もマールブルヒにて一學期當地にて三學期間を學び最早滞獨も滿二ケ年以上と相成歸朝も追々近まり申候出來得べくんば尙長く當地に止まり學び度き存候得共最早期定期年限もまいり申候に付き今後は各大學視察の上六月中旬頃西比利亞を経て歸朝の豫定に御座候ドクトル試験も去る二月九日を以て無事に相濟し申候間右御通知申上候先は右御無沙汰の御詫旁申述度早々頓首 (月沈原にて)

諸先生初め同窓諸兄に何卒宜しく御傳聲願上候

●岡忍氏通信

(中村欣一郎、額又太郎阿氏宛)

全君 (四十年卒業、舊金澤病院外科二部醫員) 目下朝鮮京城の大韓醫院にありて孜々韓人の醫育に従事中なり眞面目にして熱心ある全君が著々成效せられんこと吾人の毫も疑はざる所なり

拜啓幾度か筆執らんとしてはあらず如何に御詫び申すべきやを知らざる程の御無沙汰し奉るの至り餘りに禮儀知らぬ愚なるものよこの御怒りもあらう御事と存じ候何卒寛大なる兄の御宥恕により向後の御交誼を懇願し奉り候日々の過ぎ行くは驚くばかりに早く金澤を後にして出發仕り候節は未だ雪ちらちらと申す時に候ひしも今は凌ぎ難き暑氣の候と相成候が思へば

(通信)

永き間の御無沙汰に候ひし在澤中の御交誼及び出立の際には御見送を忝ふしたる事深く銘して忘じ能はざる所唯々感謝の至りに御座候小生着後間も高く高木兄についての悲報承り驚き申候貴兄を始め諸兄の御心盡しも効かく此の事に接せられしは如何に御悲嘆にあらせられ候御事と奉察候其後貴兄には如何にいらせられ候や益斯道の爲め御盡しふされ日々向上ふし行かる御事と羨慕に堪へ不申候小生は頭腦日々「アトロフイーレン」し行くるを覺ゆるのみに候小生の受持學科は解剖(一年)七時間外科總論(二年)三時間「ポリクリ」(三、四年)十二時間尙ほライイへあれば「セクテオン」もあされはからず頭に於て善く少くも身体健からざる小生には随分勞れ申し候のみならず慣れぬ講義の準備と來ては申々に苦心を要し申候されど生徒は全く朝鮮人のみに候へど自由なる日本語にて少しの差支もなく語し得る程彼等は日本語に熟し居り候へば其点に於ては心易く候併し「ポリクリ」には日本語を一字だも解し得ざる患者のみの相手にて隨靴搔痒とは此事と存候其患者の「アナムネーゼ」は學生に執らせ候も無茶苦茶か「アナムネーゼ」にて之れを訂正するばかりでも骨折れ申候當分の「ポリクリ」は「アナムネーゼ」を執らせる事の練習のみ主眼と致し居り候所置する人は別にあり全く關せざるものに候へば小生は當地に參り候てより患者の所置をしたことのない有様に候

日々「こんふ」ことに追はれ本も雜誌も見る暇なく「アトロフイー」せざらんとすると得べからざる有様に候先は御禮やら御詫やら種々を兼ねて右の如くに候頓首

因に岡氏は京城大和町二丁目二八四に住せらる

●在豊橋同窓會報

(松原教授宛)

六月廿五日午前十一時より渥美郡田原町木戸三樓に於て開會、同地在住の

五九

渡氏世話役さかり豊橋市より、關口、原、鈴木(舊姓大野)、齋田、北村、山科、寺境、坪倉の諸氏今日のみは何れも寤屋袋を脱ぎ棄て看る目も涼しき浴衣兵子帯姿に、來會、席定まるや渡氏簡單に開會の辭に兼て同窓會に對する希望を述べ、後さへ例の他人交らずの快談壯語、少しく耳熟するに至れば坐間に配置されたる或るものを相手の隠藝様々、内々少しく天機を漏せば關口氏の追分節、坪倉氏の出雲節、齋田氏の狂言、原氏の日本堤ぶど大いに振つた部類ふるべし斯くて午後五時母校の萬歳を三唱して無事閉會、豊橋連は一同馬車にて歸宅の途に就けり

* * * * *

内地雜報

●博士論文

去六月廿六日授與せられたる六氏の論文如左

高安六郎氏

一 實驗的腎臟炎ニ於ケル絲襪體ノ解剖的變化ト腎臟機能トノ關係ニ就テ (獨文)

一 所謂傳染性動脈内膜炎竝に癩麻質斯性惡性心内膜炎ニ於ケル結節構成ニ就テ (獨文)

一 腎臟炎浮腫ニ就テ (獨文)

一 福患腎臟ノ機能検査 (獨文)

中原徳太郎氏

一家兔ノ骨端軟骨ノ切開後ノ治療狀態 (獨文)

一 急性胃擴張ヲ伴ヘル腸間膜動脈性腸管閉塞ニ就テ (獨文)

一 骨膜乳劑ノ植入及ヒ注射ニヨル皮下及ヒ筋間ニ骨新生 (獨文)

一 腎臟切開及ヒ腎摘出後ノ副腎髓質ノ變化ニ就テ (獨文)

一 骨ヲ侵蝕スル扁平上皮癌ノ知見 (獨文)

一 富山縣下ニ於ケル佝僂病及ヒ骨軟化症ニ就テ (獨文)

長 興 又 郎 氏

一 哺乳獸及人類心臟ノ「プルキンジ」氏纖維内「グリコゲン」含有 (獨逸文)

一 「アダマス、ストークス」氏症候叢ニ對スル病理解剖的増補 (獨逸文)

一 心壁内膜ノ健態及病的組織ニ關シ (獨逸文)

一 肝靜脈本幹及肝臟部下大靜脈ノ閉塞ニ就テ (獨逸文)

守 屋 伍 造 氏

一 冷血動物ノ控種結核 (獨文)

一 結核菌ノ變性說竝ニ其菌ノ生存期限ニ就テ

一 濾胞性大腸炎潰瘍ヨリ獲タル一種ノ窒扶斯類似菌ニ就テ (邦文)

一 臟器乳酸ノ知見 (獨文)

一 心臟筋ニ就テ (獨文)

鹽 田 廣 重 氏

一 腫瘤形成性回盲體結核ノ病理及療法ニ就テ (獨文)

一 人類「アクチノミコーゼ」ノ知見ニ關スル補遺ノ大要 (獨文)

土 肥 章 司 氏

一 昇汞ノ赤血球溶解作用ニ就テ (獨文)

一 免疫性物質(赤血球溶解素、凝集素、沈降素)上ニ及ホス蠟毒治療藥(水銀、沃度、亞砒酸)ノ影響ニ就テ (獨文)

一 白血球ニ及ホス昇汞ノ作用ニ就テ (獨文)

一 不溶解性水銀劑殊ニ水銀油注射後ニ於ケル局處的變化ニ就テ(獨文)
 一 膿疱疹論(邦文)
 一 文身ト黴毒疹トノ關係ニ就テ(獨文)
 一 組織内ニ於ケル「スピロヘーテ」パーリリーダ」ノ現出ニ就テ
 附「スピロヘーテ」染色及ヒ其銀蝕標本ニ於ケル核染色ニ就テ一二ノ
 注意(獨文)

一 彈纖維性假性黃色腫及ヒ皮膚ノ膠樣變性ニ就テ(獨文)

一 黴毒血清診斷ノ本性ニ關シテ動物試驗的研究(獨文)

● 本年度の傳染病豫防諸費
 四十四年に於る各地方廳の傳染病豫防費及「トラホーム」豫防、地方病費等
 の豫算は左表の如し。

道廳及府縣	八種傳染病豫防費	療養所分擔金	豫防費	トラホーム豫防費	市町村補助費	地方病補助費
北海道	一、九二〇	三、二三一	五三三	—	—	—
東京	四、五二〇	九、六六八	七七九	—	—	—
京都	二、八一五	五、八一七	四三一	—	—	—
大阪	一、五八四	一、五五三	一六三	—	—	—
神奈川	五、六三二	三、一一六	二〇五	—	—	—
兵庫	一、四〇九	一〇、九〇九	一一〇	—	—	—
長崎	一、二九六	四、四〇九	九七	—	—	—
新潟	三、五三一	五、三〇〇	一五五	—	—	—
埼玉	二、二五八	三、三一四	二五六	—	—	—
群馬	七、三五八	二、三三九	二〇五	—	—	—
千葉	五、二七	三、三八二	一九〇	—	—	—
茨城	六、〇二五	二、〇〇〇	一六三	—	—	—
栃木	二〇七	二、四四五	三二三	—	—	—
奈良	二、四三四	二、八五八	三五九	—	—	—
三重	三、七〇四	五、七四一	六二	—	—	—
愛知	四、〇四〇	四、九九五	—	—	—	—

△ 三、四一七
 ○ 五〇〇

大分	福岡	高知	愛媛	香川	徳島	和歌山	山口	山形	廣島	岡山	島根	鳥取	富山	石川	福井	秋田	山形	青森	岩手	福島	宮城	長野	岐阜	滋賀	山梨	静岡
二、一九八	九六五	四、三一二	七、八〇七	三、〇五〇	五、二一一	五、八八一	五、八四六	六、八五八	三、一九四	七、五四八	五、一八〇	一、二二八	一、五三一	二、〇五〇	二、二八八	二、五七一	一、五一〇	一、八六二	八、八二一	四九一	七、一四七	一、五二九	一、〇二五	二、〇二一	三、四〇九	
二、〇〇〇		五、九〇九	一七、九六五	二五、四五八	一二、二八〇	八、七五二	一九、五二九	一六、三一四	一九、七五八	七、二八六	一〇、〇〇〇	一、六四九	五、二九七	六、〇〇〇	七、〇〇〇	七〇〇	三、〇〇〇	三、八四三	一一、三九四	八〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、七八〇	三、五四〇	七、二九二	一〇、〇〇〇	
三、九四一	九、七一〇	二、九五四	四、六七四	三、四八四	三、二四五	三、四五七	四、六五八	七、〇八六	五、九七九	三、五六三	二、一八一	四、一六〇	三、九四二	三、一一二	二、二三三	二、三九九	一、六一七	一、七三〇	三、一二〇	二、〇八三	三、四九〇	五、一〇四	三、九五六	一、四一〇	三、五七三	
七二八	二二〇	二二四	四二四	二〇四	三一九	五四七	二七四	一七二	二八二	四〇	四六四	一一〇	一〇二	六〇	二〇	九六	二〇〇	二三一	一一〇	一三	八三九	四八五	一〇七	一二〇	五七五	
二、五八四	一、九六七			八二六	五〇五				五一一						一、〇〇〇	四四七		八九						一、三八三	四、一〇二	
				一、〇〇〇	八二六	一、〇〇〇			七六二						一、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇					一、九〇〇				
					五〇				△二五〇							△一、〇〇〇							△三三四	△二、〇〇〇		
									△五〇〇																	

佐賀	二、〇〇〇	三、〇〇〇	三、九八〇	四〇〇
熊本	二、四三八	一、三四〇四	六、五〇六	一〇九
宮崎	一、二九四	三、〇〇〇	二、五五四	九〇
鹿児島	三、五一九	八、五八四	五、二三三	一九四
沖繩	五〇〇	六、五〇〇	二、一〇五	二七一
合計	一九三、二四二	六、八〇四	二〇〇、三〇六	一、七、四三八
				三五、七九三
				一〇、九九四
				一、二〇〇

右によれば八種傳染病費は八十萬四千六圓にして癩瘰防疫二十一萬十七圓、「トラホーム」費五萬二千二百二十九圓、地方病費一萬二千九百九十四圓あり、八種傳染病費に比して癩瘰防疫費の割合に多きは療養所新設費あるが爲めにして明年度頃よりは次第に減少し遂には現今の何分の一に減少するからん、此以外に尙花柳病費も少からずあり、總てを合計せば蓋し年々百萬圓以上さふるあり、而して單に八種傳染病費のみにも年々百萬圓近くを支出しつゝあるあり、所謂八種傳染病費ふるものは、事後の費用、即ち後始末の經費、消極的、火消「ポンプ」的の働きを必ずに支出せらるゝ經費あり、借金國の日本が、年々斯る消極的經費に百萬圓を支出せればならずは困つた話からずや（醫海時報抄）

●朝鮮東北部藥業狀態

朝鮮は戰役前までは一部商人にのみ重きを置かれ母國の全社會を通じて餘りに實業上の關係は無かつたが戰役後一般の社會から朝鮮の事さ云へば非常の興味を以て迎へられ合邦以來は愈々其距離を短縮せられ相互觀光國の訪問等頗々其來往は盛んに成つて來た、併し其觀光はほんの一部分であつて中々内部の有様を伺ふ事の出來無いのは我輩常に遺憾に思つて居るのである、何故ふれば母國に於ては到る所交通の便が開かれて居るが悲しいかな未だ朝鮮には夫れが整うて居らぬ、今日の處では瀛車さ云へば京釜線

を通じて新義州へ行くのさ馬山の分岐線と仁川の夫れより外にない、そんなら其外の旅行はどうするかさ云へば徒歩若くは牛馬車か瀛船の便に依る外は無い、何分半島の事だから瀛船の便に依れば大概の處へは行ける事さ成つてある處が船嫌の日本人と來たら恐らく他に類の無いので實に御馳しき次第ながら労働者さんどの生活上止むを得ず遠征する者を別として先づ衣食住に不自由をさせないものには中々容易に動かぬ、こんな事では島國民の將來はどうなるだらう、折角克ち得た植民地の發達も百年河清を待つたの有様で其合邦も僅に名を得る丈けに止まりはせまいか、我輩は杞憂するのである、何と嘆かましい有様じや無いか、だから多大なる費用を掛けし觀光團も千遍一律の鐵道沿線のみ止まり何の得る處も無いのである論より證據比較的諸種の寶庫に富む此の東北の地は僅に先年彼の安住氏の五福目藥の擴張に來られしのみにして他に一人の小僧をも派遣せられし人は無い、大方釜山以北日本海の怒濤を見れば航程僅か一晝夜すれば元山港が有れさ船嫌の諸者先に玄海の一夜に腰を抜かしホー／＼出發地に歸着せらるゝ結果からん、イテヤ腰抜け同業者諸君（之れは失敬）の爲めに未知の東

北地方を照會せん
先づ東北地方にはどんな所があるかさ云う事をザツト話して見よう
開港場としては元山、咸津、清津の三ヶ所あつて道廳所在地としては江原道江陵、咸鏡南道の咸興、同北道の鏡城の三ヶ所ある、面積から云へば全朝鮮の三分の一強は確にある、こゝ云へばそんな大なる土地がある今日ま

で世の中に多く知られて居らんかと云ふ諸君の胸に疑問が起るであろう、尤もふ次第である、併し夫れは不思議では無い、總て何れの處が開かる、も先づ海岸からである、北海道かてそうじやないか、夫れがポツ／＼内地へ進入して道路の必要とあり、鐵道の布設となるのである、夫れだから初めはどうしても海で仕事をなす、詰り漁夫か、ふんぞが、多くは吾人の先驅者さあつて入込むのである、其漁夫が一番近い所の釜山へ着いて東西の兩海岸を見渡した處が西北の方は恰も母國の瀬戸内に似たる多島海で彼れ等は何かよく懐かしい様な心地がせられ、東海岸を見れば斷崖絶壁で一望際限なき大海原であるから同じ事から懐かしい何だか馴染の有りそやな海で仕事をすれば遂に西海岸を選んだので、仕事をし見れば想像に違はず其魚族も同じく仕事も同じ様な設備を以て足るから之れならば云ふので二三の小家掛けが出来、夫が今度は殖へて漁村を形付くる云う工合式に漸々開けて來たので地の理と云ふ事は有るが此處のは海の利で今日の繁榮を來たしたのである、海産の觀光諸君は鐵道の沿道は能く御承知であらうが一日幾回の運轉ある沿道に日本人は何んか仕事を居るか云う事は鳥渡見へまい、否か見様と思つても日本人が其沿線の二三ヶ所を除くの外は居ない云うても好位であるから見へぬので、夫れが海の方より一つ廻つて御覽、居るは沿岸到る所に日本人の影を見ない所は無いのである、エライ咄しが脇道へ外れた様じやが右云う様な動機で西海岸がお先へ開けたのである

威鏡南北道と江原道即ち東北岸の方で何處が早く開けたか云うと元山である、元山は明治十三年に開けた港で開港場の内では随分古いのである、我輩の立場として先づ元山から先きへ話し漸く北進して江原道の事は最後に話そう

る、又馬關よりは原田流船の第五、第八の盛運丸の貳隻、其他二三隻の不定期船が通つて居る、又沿岸航路船としては釜山と雄基間、元山と雄基間の二航路船が定期不定期混ぜせ七八隻通つて居るから海よりしての交通の便は比較的盛んである併し開港當時の元山は實に淋しき一漁村で有つたのである、我輩の渡鮮した明治三十年の頃は漸く一ヶ月一回位より母國との交通の便は無つた、町は稍形をふして居つた、それでも先づ衛生機關として病院が一つ所々薬店が日本人側では一軒(藥劑師池田一太郎君)、鮮人側では例の草根木皮屋が五六軒も有つたらう夫れが十四五年の間に病院は改築せられ開業醫も殖へて四軒、齒醫者も三軒出來た、藥品を商う家は開局藥劑師二軒、藥店が九軒と鮮人側では日本の藥屋が五六軒出來た、舊藥房は一向殖へぬ、否寧ろ一二軒は減つて居る、鮮醫乎夫れは無數である、夫れで吾人の營業振を話して見よう開業當時は元山以北にも以南にも深く内地へ入込んで居る日本人は無かつたから藥品の多くは五十里も六十里も遠方から病人が有ると容體を云ふて態々買ひに來たが戦役後大抵田舎にも日本人がチャンと入込んで店を構へて居るから遠方から買ひに來るものが無かつた、其代り地方の同業諸君へ輸送する事に成つたそれだから今や元山は東北海岸のマア中心市場と成つた譯で釜山と京城邊からも吾人の勢力内へチヨイ／＼チヨツカイをして切り込みに來るがそれは出來ん、ふせからば地の理が許さんので漸く我輩等は飯が喰つて行ける由來どう云うものか、藥品は西北よりも割合に能く賣れる、其譯か、譯は分らんが彼等は日本の藥品に對し餘程信頼して居る、賣藥か、近頃これも餘程賣れ出したが以前は寶丹とか千金丹とかより買ひに來ない、之れは日清戦役の頃多分兵隊さんが其名を擴めてくれたのである、其他の賣藥は一向買ひにも來ない又こちらからも勧めても見あつた云うのはさても日本の賣藥を彼れ等に勧めたさころで返りが利そうにも無いと思つて居る、そんならどをして居つたか云うに多くは對症調劑で彼れ等に接し

たから彼れ等も非常に喜んで遠きを苦にせず云う通り幾度も買ひにも来るし中には物禮なんぞを持つてくる人もある

こんふ事を云うと何んだか賣藥の攻撃の様であるがそうでもない、賣藥規則が悪いので止むを得ん成行じや賣藥の事を云ひ掛つたから今少し賣藥の話をして又本文に取り掛るさしよう、賣藥は今日でも清涼劑と眼藥位を除くの外は多く在留日本人の需用である、夫れだから賣藥の賣高は日本人の多く在留する西北部及中央に及ば無いのである、近時は中々内地賣藥の強敵と云へば強敵、語を代へば賣藥の發展とも云へるが彼れ等鮮人間に賣藥の營業者が非常に殖へた、其譯はこうである、始め中央に於て賣藥屋の成効者が出来て諸方へ支店を出したのである、處が可ふり賣れるので其支店が獨立して皆一箇の營業者も成つたのである、内容か、ソレハ母國の賣藥の及ぶ處では無い、ふざふざらば普通用量の域に達して居るから賣れる筈じや(藥石新報抄)

* * * * *

醫 校 雜 報

● 官立醫專校の志望者

去七月十五日を以て入學試験を舉行せし各官立醫學專門學校出願者は總計四千二百一十一名にして、入學許可數は六百六十一名あり、其區別左の如し。

(醫校雜報)

校 名	志願者數	入學許可數
▲千葉醫專校	八百十五名	百 名
▲仙臺醫專校	六百三十五名	百五名
▲岡山醫專校	七百八十八名	百十七名
▲金澤醫專校	五百八十九名	百十名
▲長崎醫專校	五百九十八名	百廿九名
▲新潟醫專校	七百八十六名	百 名
總計	四千二百一十一名	六百六十一名

● 藥學科志願者 ● 去月試験を執行せし、本年各醫學專門學校藥學科へ入學志望者は、二百八十五名にして、採用せられたる者は、僅に百〇九名ありき、即ち左の如し。

校 名	藥學科志望者數	入學許可數
▲千葉醫專校	百一名	三十名
▲仙臺醫專校	五十六名	二十名
▲金澤醫專校	七十七名	三十名
▲長崎醫專校	五十一名	二十九名
總計	二百八十五名	百〇九名

校内雜報

●四十二年度同期卒業生會記

南 涯 士

七月十八日、關兄、中田兄は芽出度く奉公の義務を終はらせ給いて御歸澤にあり、齋藤友一兄は御一身の都合で再び金澤病院へ御歸來にあり、坪田、茨木の二兄は今回撰ばれて軍醫學校へ御入學の事さふり、依つて此れを機として金城樓に一夕の清宴を張つた。是の日暑熱灼くが如く軒端の騮馬も聲ふきりの夕で有つたが、馳せ參ずる者十有餘名、近來の盛會で有つた山田兄は止み難き事情の爲め御出席おかつたのは千秋の遺憾で有つた。

余りの暑さに吾々の全身は熱汗で滴々たりで有つたやつと一杯の「アイスクリーム」に蘇生の思を得た。午下八時愈々開會。幹事は型の如く挨拶を宣し次で隔てふき友垣の酒宴は始まつた唯れ人も喜色面に滿ち快談風發す。追々相互の間に益の往來は識るが如く往を語り現を談じ盡くる所を知らふかつた。先きの燒熱地獄は今は極樂淨土の花園と化して去つた。宴酣なる時千里を遠しとせずして遙々中島から馳せ加はつた宮川尙平兄を得て一段の歡樂を添へた。時節お宜しき曲面白くある人の歌い出るに合せて箱根の一曲を片々とたんづる者あり。其の珍なる技のたごべくも有らず或は詩吟に或は管歌に愈々出で、愈々々で有つた。吾々の歡告は蕩々抵止する所を知らふかつたが、過ぎたるは及ばざるてふ事も有之ものから十時と云ふに閉會を告し各々酔步蹣跚歸路についた

附記、山田有登兄は今回三州の豊橋在田原病院へ外科主任として八月四日御榮轉の由。兄の前途の多幸多福を祈るのである

●七五三、山田、伊藤三氏送別會

七月二十一日午後七時七五三龜吉氏山田有登氏伊藤治郎吉氏の送別會が金城樓に開かれた御存知の通七五三氏は三十八年度卒業にて一度七尾病院に赴任されたが、歸りて外科一部に醫員として敏腕を振はれつゝありしか、今回歸國開業せらるゝ、山田氏は四十二年度の卒業にて外科二部に醫員を奉職されしが今度三河田原病院に外科主任として榮轉せらるゝ管尙伊藤治郎吉氏は四十三年度卒業初め内科一部に後轉して外科一部に研究中の處今回富山赤十字病院へ就任せらるゝ事とふつた

此會に加はりしもの學校病院職員は勿論市内開業の知友數多にて非常の盛大なる宴會であつた幹事諸君の御骨折て一同が席に就くや下平教授は幹事側を代表して開會の辭併て送別の辭を述べられ次で七五三氏山田氏伊藤氏相次いで謝辭を述べらるゝ、これより宴にうつり互にくつろぎ胸襟を開きて快談數刻親しき上に尙親しむの機を得蓄を談し將來を約し會を散せしは午後十時日中の暑さ一通りならさりし今日此頃涼風肌をかすめ月中天にかゝりて皎々長く今日の宴を膺内に印刻せしめた。

●歡迎及送別會

此度韓清泉君及び湯爾和君の兩氏が清國より來校せられたるに付き歡迎の意を表し且つ森田齋次君及び辻北辰之助君の兩氏が獨逸國留學のため出發せらるゝに付き送別の意を表せんが爲め全氏等の知友たる深美貞之助、林篤、田中正一、田中一次郎、山田義忠、竹下麗三郎、松原三郎の諸氏の發

起によりて去八月十三日午後七時より味嚙藏町金城樓に於て宴會を催されたり會する者學校病院の職員あり開業醫諸氏ありて四十五名に達し定刻に至るや高安右人氏は發起者一同に代りて開會の趣意を述べられ次で韓君は湯君と共に立ちて、森田君は辻本君と共に立ちて各々挨拶に兼れて將來の抱負と希望を述べられ主客歡を盡して散會せしは夜十一時頃なりき。

韓君は士頌を號し明治四十一年本校醫學部を卒業するや永く金澤病院外科第二部にあり富田教授の下に普通外科及び耳鼻咽喉科を研究し甚だ熱心に眞面目に勉學して倦まず多大の學識と経験を齎らし昨年七月郷里に歸國せられて清國浙江省の公立病院を新設して其院長に推戴せられ且つ全所に醫學校をも新設せんさし此度其病院及醫學校の設計及設備準備の爲めに我國に再來し東京等各地の大病院、醫學校を參觀し器械店及書店を訪問し次で我が母校に來られたるなり

湯爾和君は明治四十三年に本校醫學科を卒業し直ちに歸國して韓君と共に浙江省杭州の新設醫學校及び病院の設立に盡力し此度韓君と共に母校を訪問せられたるなり全君は浙江高等醫學校長に推選せられ且つ浙江病院副院長となりて内科部長を擔任し尙ほ浙江會議廳議紳に撰ばれたり議紳は浙江省の官吏、紳士、及民間より撰出せられて浙江省の事務を議するものにして恰かも我が縣會議員に似て尙ほ責任權力の大なるものなりといふ吾人は我母校より此の如き名譽ある両君を出だしたるを誇りし我母校出身者が斯る樞要なる位置に推戴せられたるを見て欣喜措く能はざる所なり尙ほ吾校出身の厲家福君(明治四十一年卒業)は歸國後軍醫となりて全く浙江省杭州にあり毎日午前は浙江病院に出勤して内科を擔任し以て湯君を助けつゝありき云ふ故に此の大なる浙江病院は全部吾が校出身者にありて經營せられつゝありき云ふも不可し快此に過ぐるものかし尙ほ目下當校醫科四年に在學中の芳廷、權君は卒業後全く衢州高等醫學學校に奉職して解剖學を擔任する筈なりと聞く

(校内雜報)

韓湯兩君は八月十六日午前八時十五分に金澤を發車して歸途に就かれたり兩氏は歸途大阪の大病院を參觀し十九日神戸を出帆して上海に向ひ上海より瀛車五時間にて杭州に歸省せらるゝ都合なりと云ふ。

森田齊次君は明治三十一年に本校を卒業し次で福井縣立病院に奉職して當時の院長高橋剛吉氏(元本校内科教授)の下に内科を擔任し次で金澤病院に戻りて婦人科に入り故小川教授の下に致々研學愈らざりしが明治三十四年東京醫科大學解剖學教室に入り田口博士の助手となりて解剖學を專攻し明治三十八年に至り東京慈惠醫學專門學校教諭に榮轉して全校の春井春次郎博士と共に解剖學講座を擔任して今日に至りたるが此度全校生理教授生沼曹六氏(本校三十一年卒業)歸朝に付き入り替りて獨乙に留學せらるゝことありたるなり全氏は來九月十二日横濱出帆にて渡歐し獨逸にてはハルレ大學にて解剖學研究の筈なりといふ因に全地は本校の金子教授の研究せられたる所なり

注本辰之助君は明治三十三年本校を卒業して金澤病院眼科に入り高安博士の下に専ら眼科を修め後ち石川縣監獄醫を奉職し次で郷里七尾に歸りて神明病院を獨力にて經營し全氏は院長となりて眼科を擔任し尙ほ内科及び外科の有力なる専門醫を聘して院勢益々發展し藝きには論文を提出して金澤醫學專門學校醫學士の稱號を得益々努力して終に私費留學せらるゝに至れるなり全氏は全氏病院の元内科部長横山醫學士と共に八月十九日神戸出帆の平野丸にて渡歐し相共に一先づ伯林に行き全地に一二週間滞在の上エムンヘン大學の眼科教室に入りて研究の豫定ありき云ふ。

●韓、湯兩氏之披露招待會

永々當金澤に留學醫學を研究し歸國せらるゝや大清國浙江省高等醫學學校長又は同公立病院長の要職に就かれたる兩氏は今回醫事視察器械購入の要件

を帯びて來朝第二の故郷とも云ふべき當金澤の地に舊師知友を訪れ八月十四日午後六時より金谷館に教授諸師開業醫院醫員知友等を招きて一大宴會を開きぬ。定刻前より來賓續々として參集し休憩室に入り次で一同紀念の攝影をふし午後七時宴を開く。當日の主人湯君立ちて招待の辭をふし一同充分に歡を盡されん事を述べ次で高安博士は來賓を代表して謝辭を述べて兩氏に希望する所あり山海の珍味は次々に運ばれ酒盃は織るが如く一同陶然として酔えし頃高安校長の發聲につれて。大清國 皇帝陛下の萬歲を三唱し湯君の發聲にて大日本帝國 皇帝陛下の萬歲を三唱して乾盃し、山崎病院長の發聲にて韓君湯君の萬歲を三唱し湯君立ちて諸先生諸先輩知己の萬歲を三唱して一同之に和し、重孟亦重孟歡湧き温情溢る次で餘興は演ぜられ李君湯君の吟詩演說等あり來賓側にて金子、石川教授等の希望詠曲等ありて一同歡を盡し散會せしは午後十時過ぎふりき當日の出席は實に六十名の多數ふりき。

●木村孝藏氏歡迎會

元本校教授木村博士は去八月十三日墓參の爲め來澤せられたるに付き藤井伊之吉、飯森益太郎諸氏の發起によりて十五日夕餼甚堪に於て全博士の歡迎宴會ありたり學校及病院職員の外に金澤市内の開業醫諸氏の來會甚だ多く殊に羽咋郡の鈴木秀英氏は遠方より態々來會せられ非常なる盛會にて互に昔時を談じて興味津々、散會せしは夜十二時過ぎふりき。全博士は十七日金澤病院を訪問して全月夕刻大阪に向ひ歸途に就かれたり。吾人は全博士が吾校を去られたる後にも金澤を故郷の如くにして毎年來澤せらるゝを感謝して止まざる所ふり。

* * * * *

人事

●鈴木文太郎氏 京都大學解剖學教授博士全氏(元本校解剖學教授)は來春歐州視察の途に上らるべしと云ふ。

●島田吉三郎氏 (二十九年卒業)は嚴父病氣のため去七月下旬より郷里ある越中國水橋町に歸省せられたり吾人は全病痾の一刻も早く全快せんことを祈りたりしが終に永眠せられたり聞く痛惜に堪へず。

●辻岡律君 全氏(三十年卒業)は東京淺草にありて開業し業務大に發展して氣焔万丈ふりしが吉原大火の爲に類焼の災害に遭はれたるも其後は東京淺草區千束町二丁目二百四十二番地に移轉せられ從來よりも尙ほ一層盛大に開業せられつゝありと云ふ。

●七五三龜吉氏 日露の役我々の建兒中一士官ありて近衛の精兵を率ゐて擲たる功名を遂げ再び學に従ひ三十九年本校醫科を卒業し爾來外科一部醫員さふり中途七尾病院外科部長を奉職し再び外科一部に入りて専ら皮膚病花柳病並に外科一般を研究し餘暇皮膚病癩毒圖譜を作製して普く有志の士に分ちたる事あり氏や醫術の妙技を有せるのみならず圖譜に書に風流の氣を養へたるは人の識る所なり、今や機熟し時至り宿年の英志を抱きて放棄に歸り一大醫院を設立して一般患者の診療に従事せらるゝ事さふり去月三十日當金澤を出發歸郷せられたり願はくば益々壯健の程を祈り併て今後の發展を望む。

●中村重好氏 全氏(四十二年藥學科卒業)はかれて金澤病院藥局に奉職されしが去六月中旬朝鮮海州慈惠醫院の招聘に應じ金澤病院辭職の上

六月二十四日金澤驛を出發して赴任の途に就かれたり吾人は全氏の健康を祈りて止まず。

●森善次氏 全氏(四十三年度卒業)は前項中村重好氏の後任として七月三日金澤病院調劑員を命ぜられたり。

●田中退三氏 全氏(四十三年度卒業)は去六月一日陸軍藥劑生を命ぜられ目下所屬歩兵第三十五聯隊より金澤衛戍病院に通勤中なり。

●岡部千太郎氏 全氏(四十三年藥學卒業)は此度朝鮮に渡航して仁川本町四丁目八番地の七に獨立して藥店を開業せられたり吾人は吾同窓會員諸氏がドン／＼帝國の新版圖に雄飛せられんことを祈りて止まず好漢願くば健在ふれ。

●寺田久十郎氏 (四十一年度)卒業後高岡市東病院醫員となり次で富山赤十字病院内科醫員奉職近々徳島縣徳島市石川病院へ轉任せらるゝ由。

●森田齋次氏 (三十一年度卒業)は東京小石川區茗荷町七五に轉居さる。

●山崎芳太郎氏 (三十四年度卒業)は東京市日本橋區橋町三丁目十六番地に開業さる。

●日野修次氏 (三十六年度卒業)は歸朝後愛知縣一宮町字傳馬町に住せらる。

●若尾隆吉氏 (三十七年度卒業)は和歌山市本町五丁目に轉住。

●長井運男氏 (三十八年度卒業)今回吳海軍工廠附に補せらる。

●近森村重氏 (三十八年度卒業)は去一月高知縣技師(七等)に叙せられ高知市北新町八二番地に住せらる。

●西村銀太郎氏 (四十年年度卒業)東京市小石川區丸山町一番地人見泰三郎方に住せらる。

●竹中精一郎氏 (四十一年度卒業)東京市小石川區大塚窪町廿四

番地に轉住せらる。

●才田猶次氏 (四十一年度卒業)は今回軍醫學校へ入學せられ東京麹町區上二番町七番地遠藤方に住せらる。

●堀孝信氏 (四十二年度卒業)は從來神戸病院小兒科に勤務中の處七月歸郷能美郡板津村字一針にて開業せらる。

●塚本政次氏 (全年度卒業)昨年来入澤内科にて研究中の處此度鳥取縣立病院内科に榮轉さる。

●田濱仙次郎氏 (全年度卒業)は今回神戸病院を辭し郷里廣島縣豊田郡大崎中野村にて開業せらる。

●山田有登氏 (全年度卒業)今回外科二部醫員兼外科副手を辭し三河田原病院外科主任に榮轉せらる。

●茨木忠俊氏、坪田義門氏 両氏共に今回軍醫學校へ入學せられ茨木氏は東京四ツ谷寺町一番地に住せらる。

●田中精一氏 (全年度卒業)從來鎌倉病院に在勤せられしが七月一日宇都宮渡邊病院副院長に榮轉せらる。

●福村深教氏開業 四十二年度卒業後福井縣に於て開業本年春山碯内科に約一ヶ月間研究後神戸私立病院へ奉職せられ次で本月一日より高知縣婦負郡五福村の自宅に於て開業専ら外科診療。

●本校出身陸軍々醫勤靜

任陸軍二等軍醫正 陸軍三等軍醫正 村山 有(毛筆)

陸軍二等軍醫正 村山 有(毛筆)

免本職補給路衛戍病院長

近衛歩兵第二聯隊附陸軍三等軍醫正 橋本監次郎(三毛筆)

免本職並陸軍省醫務局御用掛兼勸陸軍省醫務局課員

(會告)

免本職補步兵第六十七聯隊附
 工兵第十三大隊附陸軍一等軍醫 宮崎 稔作 (三七年度)

免本職補金澤衛戍病院附
 步兵第三十九聯隊附陸軍二等軍醫 鈴木 實 (三八年度)

免本職補基隆衛戍病院附
 金澤衛戍病院附陸軍二等軍醫 高桑 勇次郎 (三九年度)

免本職補金澤衛戍病院附
 步兵第三十五聯隊附陸軍二等軍醫 赤尾 肇三 (四〇年度)

免本職補大阪陸軍地方幼年學校附兼同校教官
 輜重兵第四大隊附陸軍二等軍醫 太田 勘市 (同)

免本職補遼陽衛戍病院附
 野砲兵第九聯隊附陸軍三等軍醫 吉澤 祐寬 (四一年度)

免本職補小倉衛戍病院附
 步兵第十四聯隊附陸軍三等軍醫 田中 三彌 (同)

免本職補獨立守備第六大隊附
 步兵第三十八聯隊附陸軍三等軍醫 吉川 友信 (同)

免本職補糧重兵第二大隊附
 工兵第三大隊附陸軍三等軍醫 安藤 佐吉 (四二年度)

免本職補朝鮮駐劄羅南衛戍病院附
 步兵第六聯隊附陸軍三等軍醫 大野 喜重 (同)

免本職補朝鮮駐劄羅南衛戍病院附
 陸軍三等軍醫 北川 文松 (四三年度)

免本職補朝鮮駐劄羅南衛戍病院附
 中村 喜太郎 (同)

免本職補朝鮮駐劄羅南衛戍病院附
 西村 福太郎 (同)
 村上 盛濟 (同)
 坪倉 利 (同)
 高崎 英彦 (同)

山科他喜雄 (四四年度)
 角田 眞一 (同)
 竹村 常雄 (同)

會 告

自明治四十四年七月十一日校外特別會員會費調書
 至全 八月十五日

金額	期 限	氏 名
金參圓	自四十三年度五ヶ年分	加藤 鉄 作君
金參圓	自四十四年度五ヶ年分	島村 伊之 助君
金參圓	自四十四年度五ヶ年分	鵬 脚 光 榮君
金參圓	自四十四年度五ヶ年分	河村 賢太 郎君
金貳圓	自四十四年度二ヶ年分	堀井 竹次 郎君
金參圓	自四十四年度五ヶ年分	渡 孚 貞君
金參圓	自四十四年度三ヶ年分	山内 馨二 郎君
金參圓	自四十四年度三ヶ年分	馬 詰 定 衛君
金五圓	自四十四年度七ヶ年分	青木 市次 郎君

以上